向日庵

4

目　次

関西学院における英語教育の開始 ―「英語の関学」の源流を探る―・・・・・・・・・・・1

井上琢智（関西学院大学学院史編纂室研究員）

寿岳文章の「書物の共和国」――対話のある共同体を目指して ・・・・・・・・・・・・13

佐藤光（東京大学大学院総合文化研究科教授）

宗教的真理の探究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

中島俊郎（甲南大学名誉教授）

壽岳文章とウィリアム・モリス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

川端康雄（日本女子大学文学部英文科教授）

寿岳しづ ――書いて、ともに生きて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61

長野裕子（特定非営利活動法人向日庵理事）

新村出と寿岳章子 ――資料紹介を中心に・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80

新村恭（新村出記念財団嘱託）

慈父・文章先生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90

草川八重子（小説家）

「編集後記」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95

玉城玲子（向日市文化資料館長）

関西学院における英語教育の開始 ―「英語の関学」の源流を探る―[1]

井上琢智（関西学院大学学院史編纂室研究員）

はじめに

関西学院はしばしば「英語の関学」と呼ばれることがある。しかし、そのように呼ばれるようになった経緯・実態はそれほど明らかではない。たしかに、本学は以下のような著名な英文学者を排出しており、それが「英語の関学」と呼ばれるようになった一因であろう。「ピューリニズムとヘレニズムを交えた学匠詩人」竹友藻風(帋雄：1891-1954：普通学部在籍 1906-09）*[2]は、訳詩集『ルバイヤット』（1921）やダンテ『神曲』全 4 分冊を完訳し(1950)、翌年世界文学賞、大阪府芸術賞を受けた。また、関西学院 50 周年（1929）を記念した同窓山田耕筰*作曲の頌歌『関西学院頌歌』を作詞し、1950 年関西学院大学最初の文学博士号の学位（旧制）が授与され、寿岳文章らによって書かれた追悼文「学匠詩人」は『英語青年』に掲載された[3]。

---

[1] 本稿は、2019 年 12 月 14 日、NPO 法人向日庵の公開研究会（於：長岡京市中央学習センター）で筆者が「〔研究ノート〕関西学院〔高等学部文科〕の英語教育と研究―寿岳文章をめぐる人びと―」として報告した内容の前提となる関西学院の制度（文部省の制度改革とそれに対応した関西学院の学部・学科改編・教員の採用など）を明らかにしようとするものである。なお、「英語の関学」と呼ばれていた公式記録を未だ発見できていないが、関西学院大学英語研究部創部 100 周年記念事業委員会『関西学院大学英語研究部 ESS100 年史』（1998、263 頁）で再録されたベーツ第四代院長の ESS への手紙の中で“By that time〔同院長が着任した 1910 年には「英語の関学」と呼ばれていたという〕 Kwansei Gakuin had already gained the reputation of excellence in the teaching of English.”とあり、それには、吉岡第二代院長の尽力も大であったとも書き、英語の達人の卒業生に永井柳太郎*〔早稲田大学教授、政治家〕、乾精末〔戦間期の平和運動家〕、神崎驥一〔第五代院長〕*を挙げている。さらに、「1949 年（昭和 24 年）卒業生」田良原雅也は、その「活動報告」において、「当時から、『英語の関学』と言われていました」（同『100 年史』、64 頁）と書いている。

[2] 本論文中人名に＊が付された人物は、『関西学院事典』増補改訂版（デジタル版は関西学院大学 Web で閲覧できる。以下『関学事典』と略す）に立項された人物である。なお、竹友の詳細な伝記的研究には『学匠詩人　竹友藻風評伝』（藤原弘一郎、私家版、2010）がある。

[3] 第 101 巻第 2 号、1955。他に、関西学院の佐藤清の「ある思い出」、中村賢二郎の「追憶」などが掲載されている。研究社が 1898 年に創刊したこの『英語青年』は、主に英語・英米文学の研究者向けの月刊誌で、英語独学の専門誌としてスタートし、第二次世界大戦中も発行を続けた。主に英語や英米文学の研究者を対象とした論説・随想、海外学界の動向報告、英訳・和訳の指導、洋書・和書の書評、国内学界のニュース、訃報等を掲載し、本誌に論文が掲載されることは研究者の目標であった。2009 年に休刊し、以後、『研究社 - web 英語青年』として引

アメリカ文学研究に生涯を捧げた志賀勝（1892-1955、高等学部英文学科在籍 1918-21）*は、最初の出版物ユージン・オニイル『ダイナモ』（飜訳、1931）で「アメリカ文学者としての･･･前途は決定され」（東山正芳）。以後著書・飜訳は 30 冊にもおよび、その中でも『現代英米文学の研究』（1935）で第五回岡倉賞[(4)]を受賞（1936）し、1955 年「アメリカ文学の成長」を主論文として関西学院大学より文学博士号の学位が授与された。「志賀勝君のこと」を書いた寿岳文章*らによって書かれた追悼文は『英語青年』に掲載された[(5)]。

ブラウニング研究者曽根保（1896-1976、高等学部英文学科在籍：1919-23）は、ここで挙げる 5 名の著名な英文学者の中で唯一『関西学院事典』に立項されていない自称「英語教師」[(6)]である。その理由の一つが、関西学院卒業後同年東京帝国大学文学部に入学し、同大学に招聘されていた E. ブランデン（第 1 回在日期間：1924-27）[(7)]から教えを受け、卒業後文学部副手となると同時に大学院に入学して以降 5 年間市河三喜、斎藤勇の指導下で「英国哲学的詩人ロバトブラウニング」[(8)]を研究した。1935 年に東京女子高等師範教授になった後、関西学院とは公式な交流がなかったことに加えて、「脊髄の負傷がもとで、「昭和 26 年から 51 年、79 歳で亡くなるまで 25 年間病臥したままであった」[(9)]ことからだと思われる。彼の主要業績は、W. Hall Griffin, *The Life of Robert Browning* の飜訳書『Robert

---

き継がれたが、2013 年 3 月でウエブページも終了した（Wikipedia）。

(4) 岡倉賞は、英文学者岡倉由三郎を記念して 1932 年創設された優れた英語教科書、研究書、教育機関などを対象とした賞である。なお、詳細は遠藤智夫「＜資料調査報告＞「岡倉賞」・「岡倉英語教育賞受賞者および岡倉由三郎追悼記事」（『英学史研究』第 37 号、2004）参照のこと。なお、シェイクスピア研究者大塚高信は、1935 年、第四回岡倉賞をコイヤード著『日本語文典』翻訳（坂口書店）で受賞しており、東京高等師範学校教授から、戦後の 1946 年、関西学院大学教授に就任した。

(5) 第 101 巻 11 号（1955 年）。寄稿者は、寿岳文章「志賀勝君のこと」、東山正芳「志賀教授を憶う」、佐藤清「志賀君のこと」（ともに関西学院関係者）などであり、「年譜」も付されている。

(6) 曽根保（口述）『ある英語教師の記録』（限定 500 部、私家版）のタイトルである。なお、向山義彦「ブラウニング研究者　曽根保の自伝」（『英米文学研究』梅光女学院大学、第 34 号、1998、225- 243 頁）は、上記口述の自伝ではなく、「ブラウニングと私」と題して曽根が「1973 年に執筆し、同年 5 月 15 日当時 Baylor 大学に在学中の向山に送っ」（225 頁）た原稿の掲載である。

(7)『英語青年』（第 20 巻第 3 号、1927）は「ブランデン号」と題する特集号を組み、曽根保は「詩人の生ひ立ち」を投稿している。なお、この号には竹友藻風が「印象と感想」を投稿しているが、寿岳文章の投稿は見られない。この情報を提供いただいた甲南大学名誉教授で、NPO 法人向日庵理事長の中島俊郎氏には記してお礼を申し上げます。なお、ブランデンは、1949 年に創立 60 周年を記念して作られた英語校歌 “A Song for Kwansei”の作詞家（作曲は山田耕筰）として関西学院ではよく知られた人物である。

(8) 曽根保前掲書、239 頁。

(9) 曽根保前掲書、241 頁。

Browning 彼の生涯と作品』（理想社、1931）で、翌年、同書は第一回岡倉賞を受賞した。日本ライトハウス理事長岩橋武夫（1898-1954、高等学部英文学科在籍 1919-23）*は、在学中に C. J. L. ベーツ第四代院長*夫妻から「替わる替わる『楽園喪失』の音読と講義」を受け続けながら、同じ盲目の詩人ジョン・ミルトンの『失楽園』を研究し、卒業論文「ミルトンのソネット研究」を書いた。卒業後は大阪市立盲学校の教員をしていたが、ベーツ院長の助言もあり、クエーカー教徒でエスペランティストのジョン・プレイルスフォードらの援助で、エディンバラ大学へ留学し、M.A.の学位を取得し帰国、関西学院の講師・教授を務め、33 年には『失楽園の詩的形而上学』（基督教思想叢書刊行会）を出版した。

岩橋は渡英中に接したイギリスの盲人福祉、点字図書館等の調査・研究を行い、1933 年大阪盲人協会の会長となり、35 年 10 月には日本ライトハウスを大阪に設立し、理事長となった[10]。

英文学者・書誌学者・和紙研究家であった寿岳文章（1900-1992、高等学部英文学科在籍 1919-23）*は、1916 年頃から「『英語青年』は読んでいた」（『福原麟太郎著作集』第五巻「月報」、研究社、1968）し、友人の話から「エスペランテストで、早稲田大学理工科在学中に失明した岩橋武夫という盲青年も、来年は関西学院の文科〔1915 年に英文学科と改称〕へはいるつもりだという」ことを知り、入学した。二人は同じ第一啓明寮（第二啓明寮には曽根保が入寮していた）[11]で生活し、切磋琢磨しながら学びつづけ、卒業論文「ウイリアム・ブレイクの『ジェルーサレム』」（最初のタイトルは「ウイリアム・ブレイクの思想に見出される華厳思想の用語」である）を提出した。

1923 年に関西学院を卒業し、岩橋の妹静子（ペンネームは「しづ」）と結婚、在学中に中等教員英語科検定試験に合格していたこともあり、4 月から中学部で教鞭をとった。この年の早春に初めて東京に柳宗悦（関西学院文学部の英文学講師を 1926-29 年務めた）[12]を訪ねた。翌 24 年に京都帝国大学文学部選科に入学し、1929 年『ヰルヤム・ブレイク書誌』を出版し、31 年に柳とともに月刊誌『ブレイクとホヰットマン』を刊行しはじめるなど、研究者の第一歩を踏み出し、1952 年まで関西学院で教員を続けたが、学生からの留任署名運動にもかかわらず、甲南大学へ移籍した。

高等学部在学中「村上博輔*という篤学の聖職教授から、ダンテの生涯についての熱のこもった講演を聞き」、「上田敏の遺書『ダンテ神曲未定稿』」を入手するなど寿岳が関心を持ち続けたダンテの『神曲』の口語訳（完訳）が、甲南大学退職後の寿岳の最晩年の仕事であった。その公刊（1976）で、1977 年 1 月、第 28 回読売文学賞(研究・飜訳賞)を、88 年 2

---

[10] 室田保夫「岩橋武夫研究覚書：その歩みと業績を中心に」『関西学院大学人権研究』13 号、2009、27-31 頁。

[11] 中村清「啓明寮生活と文科の人々」（関西学院文学会編集部『文学部回顧』1929、314 頁。この寮生徒は「半個月位、日本語を使つてはいけないと云ふ規則を作つて毎日英語で話してゐた程だつた」（『文学部「創立回顧」』1934、7-8 頁）という。

[12]「旧教職員表」『開校四十年記念　関西学院史』1929、23 頁。

月、第 24 回日本翻訳文化賞をうけ、1990 年年には、物集索引賞特別賞を受賞した。『英語青年』（第 138 巻第 2 号、1999）には寿岳の追悼文として、笠原勝朗「小伝」、上杉文世「警世の使徒を惜しむ」、柳橋眞「和紙への情熱と教え」、寿岳章子「父・文章の思い出―ベルなりません―」が掲載された。

関西学院における英文学研究は、その種が 1900 年代初頭から 25 年頃までに蒔かれた。ただ、その土壌は、関西学院の創立時から多くの宣教師と日本人英語教員によって開墾されたものであり、そこでは、キリスト教主義（principles of Christianity）教育が根を張っていった。その根を絶やさず、しかも時代の要請に応えるために、学校組織、学部・学科改編を続けていった。そこに育ったのが、竹友、志賀、曽根、岩橋、寿岳であった。

他方、生徒・学生は自ら「英語会」（1896 年設立、現・英語研究部＜E. S. S.＞）を組織し、「英語の関学」と称されようになる土壌を自ら耕し、種子を蒔き、水を撒き芽吹かせた。彼らはその芽を関西学院学内にとどまらせることなく、国内外へと届けた。例えば、1921 年には、第 1 回中学部英語会を開催し、関西圏での英語学習の進展を鼓舞した。

さらに 1952 年から始まった毎日全国高等学校弁論大会は、第 7 回大会（1958）からは“The Annual All-Japan Inter-Senior Hight English Oratorical Contest for Churchill Trophy” 「チャーチル杯争奪全日本高等学校生英語弁論大会」）と称して、コロナ禍にある 2020 年も第 69 回を開催し、高等学校英語学習の日本での深化に貢献している。

2. 関西学院の創立

1889 年、関西学院が旧校地神戸原田の森（現・神戸王子動物園）で設立された。設置されたのは二学部で神学部（Biblical Department）と普通学部（Academic Department）[13]であり、その神学部は英語神学科であった（1891 年 6 月の第 1 回卒業生 3 名は英語学科の卒業生であり、その年 9 月に神学部邦語神学科が新設された）[14]。

普通学部は、すでに当時の日本では学校制度が整備していたため、初等教育との連携を考慮し、その入学資格は満 14 歳以上の高等小学校卒業の男子[15]で、予科 2 年本科 4 年の課程で

---

[13] “Constitution of the Kwansei Gakuin”『関西学院百年史―1889-1980―』（以下、『百年史』と略す）資料編Ⅰ、1994、620（p. 31）頁』。この英語科は 1903 年に閉鎖されたが、翌年には復活している（『百年史』通史編、Ⅰ、137 頁）。

[14] 『関西学院百年史―1889-1980―』通史編Ⅱ、1998、591 頁。

[15] 男子校関西学院に対して、女子校として創立されていたのが、広島英和女学校（1886 年、現・広島女学院）である（『百年史』通史、Ⅰ、28 頁、61 頁）。ただ、加えて、神戸にも女子伝道師養成学校を創立しようとしていた。1888 年 9 月 3 日の「学校設立援助金要請」には “It was also thought best to have two schools for girls women. One to be in Kobe and the other to be in Hiroshima.”（『百年史』資料編、Ⅰ、631＜p. 20＞頁）と書かれている。神戸に創立されたのが、1888 年の W. R. ランバスの母が創立した「神戸婦人伝道学校（Bible Woman's Institute）」（「ランバス記念伝道女学校」と改称）である。このランバス記念伝道女学校と広島女学校（広島英和女学校からの改称）と 1888 年に M. J. バローズにより設立された「神戸女子神学校」

あり、当時の中学校令（1886 年 4 月 10 日）による尋常中学校（5 年制）とは入学年齢、修学年限の異なる体制であり、ベンジャミン・フランクリンが提案したアメリカの中等教育機関の例にならうもので、実用的な知識や技能を教える小規模な私立学校をモデルにしたものとされる[16]。この普通学部の第一の目的は「高等ノ学校ニ入ラント」する生徒の育成であったにもかかわらず、初年度の入学生は予科・本科を合わせても 29 名に過ぎず、その大半はアメリカ南メソヂスト監督教会伝道地域からの出身者に過ぎなかった。
さらに 1890 年以後、教科の授業には「主トシテ英語ヲ以テ英文ノ講読」が新たに加えられ、英語学校としての性格をもつものとなり、93 年の 2 度目の学則改正において高等部普通科（College Course、普通学部高等科）が設けられたものの、生徒が集まらずすぐに廃止された。というのは、科目が中学校に準ずるものであったにもかかわらず、関西学院がなおも中学校令にもとづく本格的な教育機関としての認定を受けず、上級課程への進学が困難であったためであった[17]。

その後も、1899 年には「三ヶ年程度ノ英語専修科ヲ新設」[18]し、他方、文部省訓令第 12 号（1899）による認定の問題への対応が図られ、普通学部も公立中学校の課程に則ったものに改めるなど、繰り返し学則改正、組織変更などが行なわれ、1902 年には英語本科（3 年制）が設けられた。さらに 1904 年には、普通学部高等科を再興し、普通学部高等部（3 年制）とした[19]。08 年 10 月 16 日に「本院普通科」は「中学校ト同等以上」の資格を得られるよう申請し、09 年 2 月 10 日に文部大臣より認定（徴兵令適用）され、同年 8 月には指定（専門学校入学資格）を得るなど、徐々に学校としての組織が整備されるにともない、在学生数も増加していった[20]。このようにその課程は中学校令の基準に従いつつも、英語にお

とがメソヂスト系の女子の三校があった。

1921 年にはランバス記念伝道女学校と広島女学校の保母師範科とが合併し「ランバス女学院」となり、41 年には同校と神戸女子神学校とが合併し、聖和女子学院（その後、聖和女子短期大学、聖和女子大学、聖和大学と改称）が誕生し、2009 年に関西学院と法人合併した（『百年史』通史、Ⅰ、28 頁、61-62 頁、「聖和短期大学」『関学事典』266 頁）。

(16)『百年史』通史Ⅰ、156-57 頁。

(17)「普通学部」『関学事典』、406-07 頁。

(18)『開学四十記念　関西学院史』1929、付録、3 頁。これが普通学部高等科に代えて新設された英語専修科（三年制）である。この普通学部高等科の全面的な復興は、1904 年の「普通学部高等部」である（井上琢智「文部行政と関西学院」『関西学院史紀要』3 号、1993 年 6 月、53 頁（年表「文部行政と関西学院年表」）。

(19) その「関西学院高等学部ノ目的ハ･･･進テ業務ニ就事セント欲スル者ニ須要ノ高等教育ヲ授クル」（『私立関西学院一覧』1904）である（田淵結「関西学院高等学部文科～専門部文学部についての一理解―公刊された「年史」等を手がかりとして―」『関西学院史紀要』第 3 号、1993 年 6 月、77 頁）。

(20) この詳細な過程については、井上琢智前掲論文に加えて、井上琢智「文部行政と関西学院普通科」（『関西学院史紀要』4 号、1994 年 10 月、43-110 頁）を参照のこと。

いては基準以上の時間をかける授業が行われていた[21]。それを可能にしたのは、日本人の中学校教員免許取得者を雇用する一方、多くの外国人宣教師のなかから日本における中学校教員免許資格を取得ものが出た結果であった。
例えば、普通学部（1889-1915）の部長 8 人の内、吉岡美国*、西川玉之助*を除いて、外国人宣教師であり、最後の部長 S. E. ヘーガー*[22]は、認定・指定の推進者であり、高等教育機関への卒業生の進学を重視したこともあり、自ら 08 年無試験資格で中学校教員免許[23]を

---

[21] 関西学院普通学部が英語教育を重視していた事例としては、以下の科目毎の授業時間の比較からも分かる。関西学院普通学部が設置された時期に適用されていた「文部省令十四号」（「尋常中学校ノ学科及其程度」1886）によれば、英語 29 時間（43%）、国漢 20 時間（29%）、数学 19 時間（28%）であったのに対して、1889 年の普通学部では、それぞれ 52 時間（53%）、19 時間（19%）、28 時間（28%）であり、国漢に比べて、英語と数学が重視されていた。ただ、1908 年までの推移を見ると、ほぼ、尋常中学校令の指定した時間数に合わせていったことが分かる（井上琢智前掲論文「文部行政と関西学院普通科」71 頁）。

[22] 前掲書『関学事典』「ヘーガー」、418 頁。1908 年 10 月 30 日（送付日付けは 10 月 22 日）には、ヘーガーと同時に M. V. ガーナー*、W. K. マシュース*にも「中学教員免許状」が送付されてきた（井上琢智前掲論文「文部行政と関西学院普通科」58 頁。なお、「関西学院憲法」起草委員の一人であった C. V. モズレー*は、居留地廃止以前の 1895 年に兵庫県に「教員仮免許願」を出し認められている。その交渉過程の資料は、上記論文 104-06 頁を参照のこと）。

[23]「中等教員とは、中等学校すなわち師範学校・中学校・高等女学校の教員」であり、「戦前期においては、教員免許状を持っていなければ、これらの中等学校に有資格教員として就職することができなった」。これは、1900 年 3 月 31 日の勅令第 134 号で規定された教員資格の「包括的規定である『教員免許令』」にもとづくものであり、その免許状取得は、「教員養成の目的をもって設置された官立学校」卒業生と 1902 年 3 月に交付された「臨時教員養成所官制」で指定された「臨時教員養成所」の卒業生とに限定されていたが、加えて、教員検定（試験検定・無試験検定）に合格したものも免許状を取得でき、双方とも免許状を文部大臣が授与した（豊田徳子「戦前期日本の私学における中等教員養成の研究　私立の大学・専門学校と無試験検定―日本大学を事例として」『東京大学文書館紀要』第 26 号、2008、1 頁）。この無試験検定の場合にも、公私立大学等の「指定校」の場合には、「ほとんどフリーパス」であったのに対して、公私立の専門学校や大学の専門部等の「許可校」の場合、「スタッフ・設備・在校生および卒業生の成績・教育実習計画等に関して、文部省当局による詳細なチェックがなされた」（岩田康之、榊原禎宏等「無試験検定制度許可学校方式における認可過程」＜「近代日本中等教員養成に果たした私学の役割に関する歴史的研究」『日本教育学会大會研究発表要項』第 60 巻、2001、126 頁＞）。

なお、関西学院と同様、各種学校としての中学部に留まった青山学院は、その高等科が中等教員無試験検定の特典を得たのは、1900 年であり、同志社専門学校の英語師範部がその特典を得たのは、関西学院よりも遅れて 1933 年であった（太田拓紀「戦前期における私立中学校教員養成部の設置過程とその要因：明治後期・大正期を中心として」『京都大学大学院教育学研究

取得した。また、高等学部（1912-21）の部長 5 人の内、野々村戒三*を除いて外国人宣教師であった[24]。

大阪のメゾヂスト監督教会で 1888 年 O. A.デュークス[25]から洗礼を受け、1898 年から 8 年間にわたりアメリカに留学し、セントラル・アカデミーとヴァンダビルト大学で学んで帰国した西川玉之助は、当時の関西学院の英語教育について、以下のように書いている。

「関西学院が常に英語教育に重点を置き、･･･〔生徒たちが組織した作文、演説、読書、討論を行った〕英語会を盛んにやつた他に、もう一つ奇抜で大胆な試みをやつたのは、教員間の申し合わせで、国語漢文を除く他の学科の教科書を全部英書にした事である。･･･ 最初のうちは、理科や数学の時間に、英文和訳の稽古をしてゐるようで、どうなる事かと心配したが、しだひに平気で読むやうになり、案ずるは産むが易いと大いに安堵した。たしか神崎〔驥一〕君だつた思ふが、幾何三角などは英語の方が簡潔正確で日本語より解りやすいと、宿題など英文で書いてゐた」[26]。

この神崎驥一（きいち）*は、1901 年に普通学部卒業後、英語専修科に在籍し、1903 年に渡米し、カリフォルニア大学に留学、同大学院を終えて、在米日本人会書記長となり、日米摩擦解消のために渋沢栄一に協力した。その後、高等学部が文学部と高等商業学部に分離された際に、後者の初代部長となり、C. J. L.ベーツ第四代院長帰国後（1940）、第五代院長となった。また、同期の乾精末も神崎と同様、普通学部卒業後、英語専修科に在籍し、1902 年にミシガン大学に留学、在学中から北米の日本人雄弁家として名を馳せ、卒業後は平和運動家として活躍した[27]。

科紀要』53 号、2007、396 頁）。

[24] 前掲書『関学事典』「歴代役職者」523-25 頁。

[25] O. A.デュークスはランバス親子と同様、南メソヂスト宣教師の開拓バンドの一人で、関西学院普通学部の教員でもあった（『関西学院七十年史』1959、638 頁）。宣教師を辞してのちも、神戸のさまざまな学校で教鞭をとり、神戸で昇天した。神戸修法ヶ原に埋葬されている（J. W. クランメル編『来日メソジスト宣教師事典 1873-993』教文館、1996、72 頁）。

[26] 『百年史』通史、Ⅰ、162 頁。「原田の森の学院を巣立った最後の卒業生の一人であった」萩田庄五郎（1928 年文学部卒）は、「原田の森 4 年間の思い出」の中で、当時の授業について、以下のように語っている。「4 年生の時の時間割〔によると〕･･･、教練と体操各 2 時間〔2 コマ〕を除きますと残る 21 時間〔21 コマ〕はすべて英語英文学に関する学科であり、その中の 3 人の外人の先生方が 2 時間宛担当されております。これ等外人の先生方の講義を筆記することはむずかしく、完全には出来なくて、講義が終わると友人達と空白になっている所をお互いに見せ合って、それを埋めるのに苦労したことを思い出します」と（関西学院同窓会『会員名簿（同窓会小史）学院創立 90 年記念版』1979、－（史 74）－）。

[27] 神崎驥一については、あしあたり『関学事典』および井上琢智「戦間期関西学院における『恒久平和』運動について－神崎驥一、乾精末と国際連盟協会、排日移民法、太平洋問題調査会、軍事教練－」（上［前］・中・下）『関西学院史紀要』24 号（2018 年 3 月、7-28 頁）、25 号（2019 年 3 月、39-81 頁）、26 号（2020 年 3 月、109-42 頁）を参照のこと。また、乾精末について

3. 高等学部（1912-1921）・文学部（1921-1950）

このように普通学部と神学部の２学部制で発足した関西学院は、その後、高等教育機関設置を構想し、1912 年に専門学校令による高等学部を新設した。この新学部は高等教育への展開としてばかりでなく、それまで学院が神学ないしは英語などの文科系教育を主としていたが、そこに商科という社会科学系の教育課程を採用したことにおいて画期的なものであった。新たに設置された高等学部（文科、商科）は、高等教育機関として、神学部とともに、関西学院は２学部制の学校となり、新設と同時に、専門学校令による徴兵猶予の特典が認められた。初代の高等学部長にはベーツが就任した。

このように、これまで専門学校神学部（1908）のみの「『専門一科』から『専門諸科』への歩みの第一歩」を踏み出した関西学院は、「きわめて高等教機関の少なかった京阪神地区の『実業青年』の教育需要を満たす」ために、初めて「商科」を設置したこともあり[28]、「商科」は、第一回の入学者は 39 名であった。それに対して、文科はふるわず入学者は３名のみであった。その改善のために、13 年９月、文科に東京帝国大学文科哲学科で学び海老名弾正の牧会する本郷教会で教会生活をし、卒業後毎日新聞社を経て早稲田大学講師となっていた小山（おやま）東助が科長として招聘された。彼は学科科改組を行い、15 年には英文学科、哲学科、社会学科の３学科制を採用し、カリキュラムを整備した。同年、この高等学部という名称に対応するために、普通学部は「中学部」と改称した[29]。

この学科改組段階で高等学部英文科の目的は『私立関西学院高等学部文科商科要覧』（1915 年頃）において、「英文学科ニ於テハ ･･･ 教育家ナラントスル卒業生ハ英語ニ於テ中等教員タルノ資格ヲ得シムベキヲ期シテ在学中特ニ優待ノ道ヲ講ジ且ツ中等教員無試験検定資格ニ就テ目下出願交渉中ナリ」[30]と書き、関西学院高等学部英文科は英語の中等教員養成を大きな目標とするようになった。しかし、実際に「中等学校英語科教員無試験取扱」申請をしたのは、1923 年 10 月であり、その年の 12 月 28 日に認可されると[31]、英文学科

は、「乾精末」（「関西学院の人びと」一〇）（高橋正・比留井弘司共著）、『関西学院史紀要』11 号、2005 年、289-99 頁）を参照のこと。また、平和運動家として海外で活躍した乾の活動については、M. N. レイセル「世界を跨ぐ平和演説家　乾精末の青年時代―誕生から一九一二年の一時帰国まで―」（『関西学院史紀要』第 27 号、2021 年 3 月刊行予定）をも参照のこと。

[28]「高等学部」『関学事典』、154-55 頁。

[29] この「中学部」という名称は、あくまでも中学校令にもとづく学校でなく、中学校相当であることを示すものである。このような例は、慶応義塾が大学に昇格する（1920）以前にも「大学部」と称する大学相当の高等教育機関をもっていた（1890-1920）ことにもみられる（『慶應義塾史事典』慶應義塾、2008、51-52 頁）。

[30] 田淵結前掲論文、77 頁。

[31] 井上琢智前掲論文「文部行政と関西学院」31 頁。なお、高等教育機関における「専門諸科」については、同論文［資料Ⅲ］①「私立専門学校の学科編成」および［資料Ⅲ］②「私立専門学校（専門部）の学科編成」を参照のこと。

入学志願者が「急激に増過」した。さらに、1925 年 5 月 12 日に高等商業学部の卒業生に無試験検定の特典が認可され、同年 8 月 18 日、文学部、高等商業学部の卒業生に高等試験令により、高等文官予備試験の外国語試験が免除されるようになっていった[32]。

なぜ、1915 年に設けられた英文学科が「中等学校英語科教員無試験」[33]の資格申請を計画してから認可までに 8 年もの時間が必要であったのであろうか。その理由は、教員構成と授業内容にあったからである。例えば、普通学部・高等学部で英文学（ラスキンやテニソンなど）を教え、竹友藻風に影響を与えた M. V. ガーナー（在任：1904-1909）教授[34]、1913 年に文科に就任していた佐藤清教授（在任：1913-1923）は英語・英文学（ブラウニング、キーツ、ブレイク、ダンテ）を、15 年に就任した教授池田多助（在任：1915-20）も英文学（ブラウニング）を、教授上阪泰造(在任：1916 -21)は英語・英文学を担当しており、アメリカに留学していたラトビア人講師で、思想的にも生徒に多大の影響を与えたオゾリン（在任：1918-21）もまた講義では“Problem of Change in English Poetry”、“An Introduction to English Poetry: A Syllabus of Talks on the Elements of English Poetry”[35]を教え、H. F. ウッズウォース教授*（在任:1913-39 死去）はブラウニングを講義し、スコットランドの国民的詩人ロバート・バーンズを試験問題に出したように[36]、まさに「英文学科」とするに相応しい授業内容であった。これらの事例が示すように、高等学部英文科・高等商業学部での授業は、実用英語ではなく、アカデミックな英文学研究・教育が関西学院の伝統になっていたからであった。さらにそれを裏書きするかのように学内外で講演会を開催した。京都帝国大学文学部英文科教授の厨川白村、ドイツ文学者で日本ゲーテ協会（1931）を設立した成瀬清（無極）などを演者に招き、さらに、1916 年 6 月 9 日に「沙翁〔シェイクスピア〕300 年祭」が学生会語学主宰で開催され、英語劇「シャクスピア劇　ジョン王」が公演された（戦

---

[32] 『開学四十記念　関西学院史』141、157 頁。また、前掲年表「文部行政と関西学院年表」（56-57 頁）を参照のこと。

[33] 「無試験検定」には「指定学校」（公私立の大学等）と「許可学校」の二種類があり、関西学院高等学部英文科は後者に属し、それゆえ、「スタッフ・設備・在校生および卒業生の成績・教育実習計画」等に対して文部省の詳細なチェックがあっという。その際、英語については、「英米人との対応可能な英語力を生徒に獲得させうるかどうかが重視され」、教員には高等学校あるいは中学校教員の免許状の所持」が問われた。つまり、「実用的・実際的な能力としての英語教育の成果」が求められ、教師の力量がアカデミズムに依拠するのではなく、教育者としての力量が審査の対象になったという（岩田康之他 11 名「無試験検定制度許可学校方式における認可過程」126-27 頁）。なお、注 23 を参照のこと。

[34] 「旧教職員表」『開校四十年記念 関西学院史』20 頁。

[35] 前者は『文学部回顧』（関西学院文学会、一九三一、22 頁）に紹介されており、後者は、1919 年春学期の授業のための 32 頁のシラバスであり、現在その草稿が学院史編纂室に保存されている。

[36] 「旧教職員表」『開校四十年記念 関西学院史』20-23 頁。

後も、この英語劇の伝統は続けられた)。1921 年の 2 月 23 日には、英文学会（文学部改組されて後、英語会が改称された）がキーツ記念講演会を開催し、同年 10 月 14 日「ダンテ 600 年祭」も開催するなど、文学への関心が広く関西学院に広がった。翌 22 年 6 月には「シェリー〔没後〕100 年祭」をも開催した。

しかし、「中等学校英語科教員無試験」制度の可否の基準が「実用的・実際的な能力としての英語教育の成果」が求められ、教師の力量がアカデミズムに依拠するのではなく、教育者としての力量が審査の対象になった」とすれば、「アカデミズム」に偏重していた関西学院高等学部英文科は、この制度導入の要件を満たしていなかったからだと思われる。その実現の環境整備もあってか、池田教授が 20 年に、上阪教授とオゾリン講師が 21 年に、英文科の中心人物であった佐藤教授が 1923 年に相次いで関西学院を去っていった。それに代えて英語担当の教授に招かれたのは中村為治（在任：1923-26）であったが、その中村もまた、短期間の在任で東京商大（現・一橋大学）専門部教授として転出した [37]。その教員構成と教育内容の改善もあって、1923 年 12 月 28 日には、1924 年 3 月以降の文学部英文学科卒業生対する英語の師範学校・中学校・高等女学校教員無試験検定資格が許可された [38]。
このような正課授業でのアカデミックな英語教育を補完するかのように、1896 年に英語会 [39]が設立され、第一回大会が開催された。この英語会は神学部、普通学部の学生全員を会員とし、英語の研鑽に努め、「英語の関学」の礎となったが、それに貢献したのが初代の顧問吉岡美国*第二代院長であり、私塾的な雰囲気の中で活躍して外国人宣教師であった。
このような「英語の関学」の醸成は、文学部だけでなく、高等商業学部においても実現し、同志社との高商英語大会でも関西学院は優秀な成績を収め、日本大学専門学校英語会連盟大会（英語弁論大会）では、1926 年から 3 年連続で 3 名の英語研究部（ESS）に属する学生が全国優勝するなど「アカデミズム」に加えてしだいに「実用英語」の能力向上にも努めるようになった[40]。

さらに中学部においても、1920 年 4 月 25 日に中学部英語会が再興され、1921 年の 2 月 11 日に再興後、第 1 回中学部英語会が開催された。この流れを受けて、関西学院英語研究

---

[37] 中村為治は、第一高等学校で川端康成と同級で、1923 年東京帝国大学英文科卒後、関西学院英語教授となったものの、1926 年には東京商科大学（現一橋大学）予科教授となった。専門はロマン派詩、ロバート・バーンズであったが、同校も 43 年に退職し、隠棲し翻訳に専念した。なお、すでに指摘したように、柳宗悦は 1926 年 4 月から 1929 年 3 月まで文学部に出講（講師）し、英文学を担当し、詩人竹中郁を教えている。それ以降、英語担当教員は新規採用されていない（前掲書「旧教職員表」、23 頁)。

[38]「年表」前掲書『百年史』通史、II、605 頁。

[39] 英語会の歴史については、丸茂新「戦前の ESS」（前掲書『関西学院大学英語研究部 ESS 100 年史』）を参照のこと。

[40]『開校四十年記念 関西学院史』143、180 頁および「関西学院史年表」。「英語研究部（E.S.S.）」『関西学院事典』（26-27 頁)。『関西学院大学英語研究部 ESS 100 年史』をも参照のこと。

部は、1928 年に第 1 回中等学校英語懸賞雄弁大会を開催し、中学・高等学校の生徒に英語弁論の機会を提供し[41]、1930 年「5 月下旬より 6 月上旬にかけ四国、九州英語講演会を行い、ミックル*教授以下」[42]5 名の学生が参加した。さらに、1931 年には独自の英語機関誌として *The Crescent* を刊行したが、同誌は 1934 年には英字新聞 *The Kwansei Observer* さらに 1958 年 *The K. G. Times*[43]となった。

戦後になって ESS は 1950 年に第一回京阪神中学・高等学校英語弁論大会を開き、次いで 1952 年にはその規模を広げて、毎日全国高等学校英語弁論大会となった。しかし、この大会を真の全国大会とするために青山学院の E. S. S.の協力を得ることで、関東の高等学校の参加を促すだけでなく、冠に W. チャーチルの名を付すために学生自らが尽力した結果、1958 年の第 7 回の大会からは、チャーチルの許可をえて、"The 7th Annual All-Japan Inter-Senior Hight English Oratorical Contest for Churchill Trophy"と称した[44]。

このような状況にあってブレイク研究者となった寿岳文章は、1919 年に高等学部文科英文科に入学し、23 年 3 月に卒業したが、在学中に中等教員英語科検定試験に合格し、すでに指摘したように、それゆえ同年 4 月から関西学院中学部[45]で教えることができた。さらにブラウニング研究者となった同期の曽根保は、兵役を終えて 1919 年に高等学部文科英文科に入学し、寿岳と同様、1922 年 10 月 12 日に中等教員英語科検定試験に合格し、23 年 3 月に卒業し、東京帝国大学在学中の 27 年には、さらに高等学校高等科検定試験合格した[46]。

---

(41) 『開校四十年記念 関西学院史』218 頁。

(42) 『関西学院 高等商業学部二十年史』1931、202 頁。

(43) 野村哲三「1958 年（昭和 33 年）卒業生　活動報告：日本の経済自立時代から高度経済成長時代を駆け抜けて」（関西学院大学英語研究部創部 100 周年記念事業委員会『関西学院大学英語研究部 ESS100 年史』88 頁）。なお、同誌 299 頁に *The K.G. Times*, no. 1 の写真が掲載されている。なお、英語会のカレッジ・パーパー *The Crescent* の前誌が一八九八年第一号発行の *The Maya Arashi* である（神崎高明「*The Maya Arashi* を読む ： 原田の森のカレッジペーパー」『関西学院史紀要』一一号、二〇七-七六頁、二〇〇五）。本資料は現存の内容が紹介している。

(44) 詳細な関西学院大学の ESS とチャーチル等との交渉のプロセスについては、神崎高明「チャーチル杯創設の経緯～ケンブリッジ大学チャーチル・カレッジの資料から～」（関西学院大学『学院史編纂室便り』No. 36, 2012, 11, 1. pp. 2-6. なお、この論文は *How the Churchill Trophy Came to the World* として英訳され、小冊子として 2013 年 2 月 22 日に学院史編纂室から公刊された。

(45)「旧教職員名簿」『関西学院七十年史』1959、642 頁。

(46) 曽根保前掲書『ある英語教師の記録』238 頁。前掲書『文学部回顧』の「関西学院文科の思い出」の中で、池田多助はこの「勉強家」の二人が「在学中文検に通った」ことが「無試験検定の特典にも浴する」ことになったと理解している（293 頁）。確かに、「卒業生の成績」が特典採用の可否の一要件であったからである（注 21 参照）。

なお、同書収録の芥川潤（第二回入学生、同書、9 頁）の「あの頃のクラス」は、当時の生徒と英文科の専任・非常勤教員とその家族との交流を活写しており、興味深い。

この寿岳文章と曽根保の在学中の 1921 年に、受験生数の増加もあり、1921 年高等学部文科は文学部として独立し、商科は高等商業学部（-1935）として独立した。文学部も定員が 200 名となり、社会の要請を受け、それまで商科の定員が 150 名であったが、学部独立の翌年には一挙 600 名へと定員増なり、関西学院が、学生定員の点では、神学・文学系の学校から、商経中心の社会科学系の学校へと変貌していった。それまで国内での大学進学の道が開かれていなかったため、関西学院の卒業生は主にアメリカの大学に進学したが、学部として独立してのち、1924 年に関西学院神・文・高商学部卒業生が東北帝国大学、次いで九州帝国大学の法文学部への進学の道が開かれ、昭和にはいると神戸高等商業学校が昇格して神戸商業大学が設立（1929）されると、同大学への進学も可能となった。また、実業学校、師範学校、中学校そして高等女学校への教員検定資格が認められるようになっていった[47]。

4. おわりに

戦前の関西学院の専門学校・実業学校は、戦後の混乱期の中で戦前の教育組織復興の声の高まりを受けて、46 年に高等商業学部、理工専門部、文学専門部（英文科、人文科〔社会科から改称〕）として改組された。

さらに関西学院は、1950 年 4 月、神崎驥一が主導したジュニア・カレッジ構想[48]にしたがって短期大学を設置した。そのため、高等商業学部は商科、理工専門部は応用化学科、文学専門部は英文科として、その短期大学の各学科となった[49]。その英文科は「専ら実用な英語を課」[50]すると規定したことにより、「アカデミック」な英文学教育は、新制文学部英文学科にその席を譲った。

【謝辞】
本稿の執筆に際して、NPO 法人向日庵理事長である中島俊郎甲南大学名誉教授に資料提供も含めてお世話になった。ここに記して感謝申し上げます。

---

(47)「高等商業学部」『関学事典』156 頁。

(48) 神崎驥一によるジュニア・カレッジ構想については、以下の研究を参照のこと。木田竜太郎「初期『短期大学』の成立と展開に関する一考察－神崎驥一と『関西四大学』の動向を中心に－」（『大学教育学会誌』第 37 巻第 2 号、2015 年 11 月）木田竜太郎「新制大学十二校先行認可問題に関する一考察－関西学院院長・神崎驥一と『関西四大学』の動向を中心に－」（『日本教育史学紀要』第 5 巻 pp. 48-68、2015 年 3 月）。

(49)「英文科」、「短期大学」、「文学部」（『関学事典』、30、333、415 頁）。

(50)『学生須知（すち）要項　関西学院短期大学』（田淵結前掲論文、78 頁）。

寿岳文章の「書物の共和国」——対話のある共同体を目指して

佐藤 光（東京大学大学院総合文化研究科教授）

薄青色のクロスの装幀の背に「書物の共和国　定版」の金文字が輝く。表紙には同じ文字列が型押しで配置され、感触が指に心地よい。花布は黄色で、しおりは青。寿岳文章（1900-92）の『書物の共和国　定版』は 1986 年に出版された。当初は『寿岳文章・しづ著作集』第六巻（春秋社、1970 年）として世に出たものであり、寿岳は「著作集第一巻が妻の書いたものだけで、そしてこの第六巻が私の書いたものだけで成り立っていることは、妻と私の本音を告げているようで、今となってはほほえましい」[1]と振り返る。寿岳は、さらに、著作集第六巻は『書物の道』（書物展望社、1934 年）と『書物への愛』（栗田書店、1958 年）を中心に「その他長短さまざまの諸篇を加えたもので、それらの選択や配列は、すべて春秋社編集部の林幹雄氏の考慮にもとづく」[2]と続けた。収録された論考は寿岳自身が選んだものではない、ということだが、刊行後 15 年を経て、著作集から独立させて『書物の共和国　定版』として再刊したところに、同書に対する寿岳の思い入れを見ることができる。

寿岳は「私のやってきた仕事は、大きく分けて三つになると思う」と述べ、「英文学を主軸とする外国文学の研究と翻訳」、「書物の美的ならびに社会学的機能の究明」、「愛着から来る和紙への学問的なとりくみ」[3]を挙げた。「外国文学の研究と翻訳」が書物の内容に関する仕事であり、「和紙への学問的なとりくみ」が書物の材質に関する仕事であるとすれば、書物論は両者を統合する仕事である。

1980 年代後半に刊行された三冊の書物——大久保久雄・笠原勝朗編『寿岳文章書誌』（寿岳文章書誌刊行会、1985 年）、『書物の共和国　定版』（春秋社、1986 年）、『寿岳文章書物論集成』（沖積舎、1989 年）——を並べると、『書物の共和国　定版』は小ぶりの部類に入る。大きさと厚さと重さにおいて圧倒的な存在感を誇るのは、クロス装で表紙に芹澤銈介作「紙障子」の図案、見返しに芹澤銈介作「和紙の漉所」全国地図を配置し、寿岳の著作物の書誌情報を 2912 項目にわたって収録した『寿岳文章書誌』と、表紙にマーブル模様があしらわれ、総頁数が 1088 で、厚さが 5 センチを超える『寿岳文章書物論集成』である。『書物の共和国　定版』に収録された論考のほとんどは、いくつかの例外を除いて、『寿岳文章書物論集成』に再録されており、その意味では『寿岳文章書物論集成』は寿岳の書物論の集大成と言えるかもしれない。一方、『定版』の書名に採用された「書物の共和国」は著作集第六巻の表題でもあり、寿岳の仕事を貫く重要な鍵言葉のように見える。この鍵言葉につい

---

[1] 寿岳文章「あとがき」、『書物の共和国　定版』（春秋社、1986 年）、459 頁。

[2] 寿岳「あとがき」、『書物の共和国　定版』、459 頁。

[3] 寿岳文章「和紙と私」、『日本の紙　解説編』（毎日新聞社、1976 年）、寿岳文章『わが日わが歩み——文学を中軸として』（荒竹出版、1977 年）、322 頁。

て、寿岳は著作集第六巻の「あとがき」に「総題の『書物の共和国』は、「出版界の現状と読者」の中で使った言葉であるが、背後にプラトンやトマス・モアを意識しての命名であることを知っていただければ幸甚である」[4]と記した。寿岳にとって、書物は対話や理想の共同体と結び付いていた。さらに 1986 年の「定版あとがき」には、次のような記述がある。

> 書物の世界を「共和国」の概念でとらえ、戦後、その世界像を私が一冊の本にまとめたことには、生涯の大半をその国の望ましいありかたの探究に専念してきた私なりの信念がともなう。書物にとって最大・最悪の敵である戦争とは、絶対にかかわりを持たぬとの国是を、憲法の根幹に据えたよろこびが、言わば共和国住民としての書物のあるべきようを、あの形で表白させた。そして表白の背後には、理想の書物共和国の建設にいそしんだ先人たちの知見がきらめく。(「定版あとがき」) [5]

「書物の世界」、「共和国」、「戦争」、「国是」、「憲法」という言葉の組み合わせは、寿岳が書物論を通して、社会のあり方について思索をめぐらせていたことを物語る。「書物の共和国」とは、大正と昭和の日本を生き抜くことによって、寿岳がたどり着いた思想的な到達点だったと言える。「書物の共和国」という言葉を用いて、寿岳は何を目指したのだろうか。本論では、『書物の共和国　定版』と『寿岳文章書物論集成』を中心に、寿岳の書物論について考えてみたい。

1 書物の定義

寿岳は「ある思想を発表するために必要ないっさいの手続を総称して、これを「書物」と定義したい」と述べ、「書物は二つの部分から成立している。第一には「どんなことをいわんとしているか」、第二にはその形体、その物的な存在である」[6]として、書物を内容と物体の両面から見ることを提案した。この提案をより厳密な言葉遣いで表現したものが、1939 年に刊行された百科事典の「書物」の項目に見られる。書物の定義として、寿岳は以下のように記した。

> 形態的には、自然のままの、または加工した適当な物質的材料を選び、その面の上へ文字や図様を筆写または印刷したものを有機的に配列し、保存または運搬に適するよう、その材料の性質が要求する方法でひとまとめにしたものをいう。内容的には、思想または感情の伝達を目的としたもののすべてが包含される。(「書物」) [7]

---

[4] 寿岳「あとがき」、『書物の共和国　定版』、462 頁。

[5] 寿岳「定版あとがき」、『書物の共和国　定版』、463 頁。

[6] 寿岳文章「光悦と書物道」、『谷島屋タイムス』92 号（1936 年 1 月）、『寿岳文章書物論集成』、413 頁。

[7] 寿岳文章「書物」、『大百科事典』11 巻（平凡社、1939 年）、『寿岳文章書物論集成』、177 頁。

形容詞や副詞の使用を控え、飾り気がなく、ぶっきらぼうな定義だが、書物の構造と機能を的確に示している。「自然のまま」の「物質的材料」とは、木簡や竹簡に使われた木や竹の板を指し、「加工した」材料は粘土板、パピルス、紙を含む。「文字や図様」という表現が選ばれたところにも、注意深い配慮が見られる。文字、図、模様を想定すれば、紙面に記されるものをすべておさえたことになる。「筆写または印刷」には、写本に始まり、木版印刷を経て、活版印刷に至るまでの複写の歴史が圧縮されている。「有機的に配列」という限定を加えることで、「文字や図様」の意味不明な羅列、乱丁、落丁が排除される。紙面に「文字や図様」が配されていても、それらが意味を生成しないのであれば、染みや汚れと同じであり、書物の構成要素にはならない。

「ひとまとめにしたもの」も慎重に選択された表現である。「ひとまとめにしたもの」には、古代中国で用いられた木や竹の札（「簡」）を編んでつなげたもの（「冊」）が書物として含まれる[8]。パピルスをつなぎあわせた巻物も書物である[9]。「ひとまとめにしたもの」は、なぜ作られるのか。「保存または運搬」のためである。「保存」とは、時間軸に沿って、書物が受け継がれることを意味する。「運搬」とは、書物が空間移動することを意味する。つまり、「保存または運搬」という言葉は、書物が時空を超えて人から人へと伝えられる可能性を表す。さらに、「ひとまとめにしたもの」を作る方法として、寿岳は「材料の性質が要求する方法」を掲げる。たとえば、粘土板文書を巻物のように横につなげることは可能だが、そのようにしてできあがった長い板状の粘土板文書は、巻くこともできなければ、折りたたむこともできない。粘土板は「火に燃えず、水におかされず、またパピルスや羊皮や紙と違い、動物からの害も受けず、土中に埋めておけば戦禍にも耐え、たとえ破壊されても、破片を集めれば、ある程度にもとの形が得られる」。したがって、保存という観点から見れば、粘土板文書は理想的だが、「重いため運搬が不便であり、またこの材料のために発生した楔形文字も、アラム文字に屈し、ついに粘土板文書は書物の世界から消えた」[10]。「材料の性質が要求する方法」という言葉には、「品物は正しい材料に依つてのみ正しい品物となるのです。材料を誤れば品物は其の機能の半ばを失ふでせう」[11]という柳宗悦（1889-1961）の工藝論に共鳴する響きがある。

書物の内容については、「思想または感情の伝達を目的としたもののすべて」が含まれる、と寿岳は定義した。「思想」に哲学と歴史、「感情」に文学を読みとるならば、「思想または感情」という言葉で人文学を表している、と言えるのかもしれない。しかし、この定義では、

---

[8] 寿岳「書物」、『寿岳文章書物論集成』、178 頁

[9] 寿岳文章「欧州活字本の源流」、『同志社文学』6 号（1929 年 11 月）、『寿岳文章書物論集成』、252 頁。

[10] 寿岳「書物」、『寿岳文章書物論集成』、180 頁

[11] 柳宗悦「工藝の性質」、『工藝』80 号（1937 年 9 月）、『柳宗悦全集』（筑摩書房、1980-92 年）、9 巻、112 頁。

たとえば、六法全書、相対性理論の解説書、将棋の入門書、そしてそもそも寿岳が「書物」という項目を執筆した事典類は、書物の枠からこぼれ落ちてしまう。規則や体系や事実に関する説明は「思想または感情の伝達を目的としたもの」とは言えないからだ。これらを書物に含めるためには、「思想または感情」に加えて、たとえば「情報」という言葉を追加する必要がある。

なぜ、寿岳は書物の内容の定義として、「思想または感情の伝達」という表現を選んだのだろうか。おそらく、ここには寿岳独自の書物観が潜んでいる。寿岳は、情報や知識を収録した事典類を、書物とは別の範疇でとらえていた節がある。自宅の書斎の様子について寿岳が語った言葉に、次のようなものがある。

> 北向きに机をすえた私の書斎兼書庫の、左手の壁面は、天井から床まで八段の書棚となっており、そこにつまっている本の半分は、さまざまな字書や事典だ。語学関係のもののほかに、宝石事典だの、いろんなのがある。中には一年に一度引くこともないまま、いたずらに埃をかぶってゆくのも少なくないが、手に入るだけの字書や事典を座右にそなえつけておかないと、安心して本が読めないというのが、私の因業な生まれつきらしい。(「字書と薬と」)[12]

寿岳によると、「字書や事典」は「本」を「安心して」読むために必要不可欠な資料であり、「本」とは異なる性質と用途を備えたものである。寿岳は、事典類を並べた書棚に常備薬を置き、薬を「字書や事典」と結び付ける。

> 何もわざわざ字書専用の書棚のまん中を薬入れにしなくても、と家人さえ思うらしいが、これには私なりの理由がある。大体、薬というものも字書と一緒で、いざの時すぐ座右になくては役に立たない。(「字書と薬と」)[13]

薬は体調不良を改善し、平常時の新陳代謝を回復する。同じように、「本」を読んでいて、見慣れない固有名詞や難解な抽象概念で理解が阻まれる時、「字書や事典」が思考のもつれを解きほぐす。「思想または感情の伝達」の障害に対して、新たな「思想または感情」をもって対処しようとすることは、酔いを醒ますためにウィスキーをあおるようなものである。言葉や表現についての明晰な定義と論理的な説明が、混乱を整理し、理解を促す。ちょうど、寿岳自身が書物を説明するために、形態と内容の両面に関して客観的な定義を用意したように、「字書や事典」の記事は事実を淡々と述べ、華麗なレトリックを用いて読者を感化したり、感動させたりはしない。「字書や事典」の目的は事象の解説であって、「思想または感

---

[12] 寿岳文章「字書と薬と」、『白石ニュース』47 号（1959 年 5 月）、『書物の共和国　定版』、399 頁。

[13] 寿岳「字書と薬と」、『書物の共和国　定版』、399 頁。

情の伝達」ではないからである。その意味で、寿岳の「字書や事典」のとらえ方は、寿岳の専門分野の書誌学に通じるところがある。寿岳によると、「書誌は思想伝達の波紋を告げる無言の記録であると共に、また研究者にとつて不可欠の指針となるべきもの」[14]である。また、書誌学とは「最も簡明に記述するならば、それは「書物に関する科学」（the science of books）である」[15]。書誌が「思想伝達の波紋を告げる無言の記録」であるように、事典類は、いわば、事実の記録である。それは「思想または感情」が醸成される基盤であり、「いざの時」に立ち戻って思考を整理するための薬としての役割を果たす。寿岳にとっての書物とは、あくまでも、「思想または感情の伝達を目的としたもの」だったようだ[16]。

2 書物の効用

寿岳は書物や人を語るにあたって、思想という言葉を好んで使う傾向がある。英国の詩人であり、芸術家であり、寿岳の研究対象であったウィリアム・ブレイク（William Blake, 1757-1827）が、理解を拒むかのように複雑怪奇な神話を作り上げたことについて、寿岳は「独自の思想を盛るためには、独自の形式——神話を作らねばならぬ必然の要求が彼に存してゐた」[17]と説明した。また、寿岳は若い頃を振り返って、「自分でも変な象徴詩風の詩を作つて校友会の雑誌などに寄せてゐた私は、ブレイクの思想をよくも知らずに、たゞその特異な表現法ゆゑに、‘病める薔薇’などを愛誦してゐたのであらうと思ふ」[18]と述べる。寿岳によると、「ブレイクが私の心を惹く第一の点は、彼の思想が甚だしく東洋的、殊に大乗仏教的であること」に由来し、「ブレイクの思想は‘罪の赦し’と‘我の寂滅’とを基調とする大悲の仏心

---

[14] 寿岳文章「ブレイク研究への序説」、『ブレイクとホヰットマン』1 巻 1 号（1931 年 1 月）、38 頁。

[15] 寿岳文章『書誌学とは何か』（ぐろりあそさえて、1930 年）、『寿岳文章書物論集成』、648 頁。

[16] 『書誌学とは何か』（1930 年）で、寿岳は書物を「人間の行為や、知識や、便宜や、必要や、信仰や、思想や、失敗や、成功や、希望や、想像や、悲みや、歓びや、憧れなどを、さまざまの形式に盛って、なんらかの物質的な材料にたよりつつ、表現したものである」と定義した（『寿岳文章書物論集成』、648 頁）。これをより厳密で、簡潔かつ精確にしたものが、「書物」（1939 年）で示された定義である。後に、寿岳は『図説本の歴史』（日本エディタースクール、1982 年）で、「思想」を「知識」に置き換えた定義を示す（「つまり現在の時点だけに限っても、本の機能と形態はきわめて流動的であり、まして過去や未来のさまざまな本に思いをはせると、結局「知識や感情を伝達するために人間が工夫した物質的なしかけの一つ」とでも定義するほかはあるまい」、3-4 頁）。しかし、書物とは思想を発表するための一切の手続きである、と定義した「光悦と書物道」は『寿岳文章書物論集成』と『モリス論集』（沖積舎、1993 年）、書物を「思想または感情の伝達を目的としたもの」と位置付けた「書物」は『寿岳文章・しづ著作集』第 6 巻、『書物の共和国　定版』、『寿岳文章書物論集成』に繰り返し収録されており、寿岳の書物論において「思想」の伝達が重要視された、と考えられる。

[17] 寿岳文章「ブレイク神話の輪廓」、『英語青年』57 巻 11 号（1927 年 9 月）、375 頁。

[18] 寿岳「ブレイク研究への序説」、『ブレイクとホヰットマン』1 巻 1 号、30 頁。

に昇華して已む」[19]。寿岳のブレイク理解において、芸術や詩や個性よりも、価値観の体系としての思想が大きな意味を持ったことがわかる[20]。

書物を通して様々な思想に触れることの効用とは、何だろうか。書物の使命について、寿岳は次のように言う。

> 頑迷とは、自分の立場だけを絶対のものと考え、高くても低くても、それ以外の次元をいっさい認めないことです。そして思想、言論、出版の自由のにない手としての書物は、そういう頑迷を、人類の間から無くするための使命をもって生まれたのです。(『書物への愛』) [21]

ある考えや価値観に執着すると、状況に臨機応変に対応することが困難となり、しばしば判断を誤る。ものの見方を相対化し、再点検するためには、異なる意見に耳を傾けることが必要である。多種多様な著者が著した書物には、多種多様な思想が宿っており、思想の多様性の中に身を投じることによって、人は頑迷な状態から抜け出すことができる。書物の定義において、寿岳は「保存または運搬」を書物の形態が備える特徴と位置付けた。書物を通してであれば、時間と空間を隔てて、多種多様な著者との対話が可能になる。寿岳は、読書を著者と読み手との対話とみなして、読書の意味を次のように説明した。

> ですから私たちはいつも著者と向かい合い、長い年月をかけて、向こうは死んでいるもの、あるいは目の前にいないものであっても、絶えずお互いに語りかけ語り合いしながら、諒解点に達したものを自分自身の果実として再生産していくということ、そこに、いちばん大きな読書の意味があるということになるでしょう。(「読書体験を語る」) [22]

寿岳が用いた「諒解点に達したものを自分自身の果実として」という表現には、「諒解点に達したもの」、「諒解点に達しないもの」、「自分自身の果実」、「他人の果実」という四つの要素が含まれている。書物を読んで、考えて、「諒解点に達したもの」がある、ということは、一方に「諒解点に達しないもの」がある、ということでもある。「諒解点に達しないも

---

[19] 寿岳「ブレイク研究への序説」、『ブレイクとホキットマン』1 巻 1 号、31、32 頁。

[20] 鶴見俊輔は「思想」という言葉について、「思想はまず、信念と態度との複合として理解される」と述べ、宮崎芳三は「思想」を「自分のしていることを意味づける一定の見方」と定義した。鶴見俊輔『共同研究・転向』、『鶴見俊輔集』(筑摩書房、1991-2001) 4 巻、11 頁。宮崎芳三『太平洋戦争と英文学者』(研究社出版、1999 年)、121 頁。どちらの定義も、寿岳の「思想」という言葉の使い方を理解する上で、指針として有効である。

[21] 寿岳文章『書物への愛』(栗田書店、1959 年)、『寿岳文章書物論集成』、768-769 頁。

[22] 寿岳文章「読書体験を語る——人間形成に果たす書物の役割——」、『文化評論』118 号 (1971 年 6 月)、『書物の共和国　定版』、442 頁。

の」がない読書とは、読み手自身の価値観と極めて相性のよい内容が述べられていて、すべてに賛成できるという場合である。全くその通りだ、と頷きながら読み進めて、全くその通りだ、と同感して読み終わった時、読み手の中でおそらく何も変化は起きていない。読後感は爽快かもしれないが、価値観の相対化もなければ、新しい発見もない。耳に心地よい意見だけに耳を傾けていると、頑迷は強化される。寿岳は「世の中に自分の考えている思想や真理と全く反対の立場にある書物も多い」と述べた上で、「しかしその中にはその世界では一応読まなければならないとされている書物もあるわけです」[23]と指摘する。そして、それらを読むことの意義について、次のように続ける。

> それを読んでいくうちに、それがまがいものであるかどうかということを見分ける批判的精神が養われていくことにもなりますし、また場合によっては、そういう自分と対立するような書物の中からでも、あるいはとるべきものがあるかも知れません。たとえばそれが思想そのものでなくても、論証の方法とかいろいろあると思います。ですから結局書物を読んで人間形成をしていくためには、かなり抱擁的な、包含的な態度が要求されますし、そうした作業が多い人ほどその人の思想がふくらみを持って、何ものに対してもびくともしない堅固さを持つようになると思います。(「読書体験を語る」) [24]

「自分の考えている思想や真理と全く反対の立場にある書物」を読むことに、寿岳は積極的な意味を見出す。寿岳の「人間形成」論に、「対立なくして進歩なし」や「よどんだ水には毒がある」というブレイクの言葉を重ねることができるかもしれない[25]。寿岳は、さらに、「その世界では一応読まなければならないとされている書物」の具体例として、和辻哲郎と亀井勝一郎の著作に触れ、どちらも奈良の歴史と古寺に関する必携の手引き書であるが、取り扱いに注意が必要である、と言う。

> 注意しなければならないことは、その場合にもその古寺巡礼をしているのはあくまでも和辻哲郎さんであり亀井勝一郎さんであって、自分ではないということです。ですからあのように主観的な案内ぶりをした書物に対して、それにこちらが引きずり込まれてしまうということは絶対さけるべきことであって、逆に申しますとそれと反対の見方ができないものだろうかという、意地が悪いといえば悪いのですが、そういう姿勢をほかの読書体験などから援用してやってみるというようなことも、自分を形成する場

---

[23] 寿岳「読書体験を語る」、『書物の共和国　定版』、449 頁。

[24] 寿岳「読書体験を語る」、『書物の共和国　定版』、449 頁。

[25] 'Without Contraries is no progression'; 'Expect poison from the standing water' (Blake, *The Marriage of Heaven and Hell*, E34, E37). 本論においてブレイクのテクストは *The Complete Poetry and Prose of William Blake*, ed. by David V. Erdman (New York: Doubleday, 1988)より引用し、E とともに頁数を記す。

合の一つの大切な事柄ではないでしょうか。(「読書体験を語る」)[26]

著者の見解を受け売りするのであれば、それは「他人の果実」である。「反対の見方ができないものだろうか」という寿岳の提案は、書物から受け取った内容を「自分自身の果実」にするための一つの工夫である。この工夫を通して、「諒解点に達したもの」と「諒解点に達しないもの」も切り分けられる。寿岳は「思想の人格的形成にとって何よりも大きな役割をはたすのは、すぐれた内容の書物の熟読である」[27]とし、「どこまでも自分自身をはっきりと確立していくための読書だという根本態度を、いつも反省して心の中に持ちつづけていくのが、何にもまして大切なことになる」[28]と述べた。書物を読むことの意義は、寿岳の次の言葉に集約される。

本を読むとは、そこから喜びや楽しみを得るとともに、なにものにもとらわれない自分を確立させるための工夫でなくてはならぬ。批評精神をつちかうことでなくてはならぬ。(「読書週間の課題」)[29]

つちかわれた「批評精神」は、寿岳によると、日々の生活の中で実践されるべきものである。寿岳は『ブレイクとホヰットマン』1 巻 1 号の「雑記」に「私は‘思想と生活’と云ふ個人雑誌を出したいと思つてゐた」と書き、「私は知識の伝達者であるよりも前に、一個の厳正な生活者でありたい」[30]と記した。寿岳にとって、思想は生活に反映され、生活は思想に支えられており、両者は表と裏のような関係にある。たとえば、寿岳は、ウィリアム・モリス（William Morris, 1834-96）の友人であり、製本師でもあったコブデン＝サンダスン（Thomas James Cobden-Sanderson, 1840-1922）の日記を高く評価する。なぜなら、「このすぐれた先覚者の生活や思想から教えられるところは、じつに多い」[31]からである。逆に、米国留学中にエマソン（Ralph Waldo Emerson, 1803-82）の講演会に出席した神田乃武（1857-1923）については、「しかし神田は、エマスンの胚種の強力な培養土ではなかった。その後のかれの生活や思想に、われわれは、さほどエマスン的なものをみとめることはでき

---

[26] 寿岳「読書体験を語る」、『書物の共和国　定版』、453 頁。

[27] 寿岳文章「柳宗悦と装幀」、『暮しの創造』13 号（1980 年 6 月）、『寿岳文章書物論集成』、537 頁。

[28] 寿岳「読書体験を語る」、『書物の共和国　定版』、453 頁。

[29] 寿岳文章「読書週間の課題」、『神港新聞』（1958 年 10 月 27 日）、『書物の共和国定版』、409 頁。

[30] 寿岳文章「雑記」、『ブレイクとホヰットマン』1 巻 1 号、47 頁。

[31] 寿岳文章「美しい書物について——座談風に」、『東京堂月報』23 巻 5 号（1936 年 5 月）、『寿岳文章書物論集成』、702 頁。

ない」[32]と指摘する。書物が伝えるべき内容として思想を想定しただけでなく、思想と生活を一体のものとしてとらえたところにも、寿岳の書物観の特徴が見られる。

3 物としての書物

寿岳は書物の二つの側面に注目した。

> 書物は二つの部分から成立している。第一には「どんなことをいわんとしているか」、第二にはその形体、その物的な存在である。(「光悦と書物道」)[33]

第一の部分は「思想または感情の伝達」に該当する。既に見たように、伝達された「思想または感情」を通して、読み手は新たな知見を得て、多角的に考える力を身に付ける。第二の部分として寿岳が挙げるのは、書物の「物的な存在」としての側面である。「書物の「精神的本体」に重きを置く人々」から軽蔑されるだろうが、と断りながら、寿岳は、書物が書物であるのは、書物という外形を持つからである、と述べる。

> 一千枚を重ねても、一万枚を重ねても、新聞紙はついに新聞紙である。すなわち知る、書物が書物であるためには、一定の外形を、――用紙、手書、印刷、製本などの外在的条件を必要とすることを。さらに語を換えて言うならば、外形が書物を成立させるのであって、内容が書物を要請するのではない。(『書誌学とは何か』)[34]

「書物の「精神的本体」に重きを置く人々」には、書物の外形に重きを置く寿岳の書物論は、奇異に聞こえるかもしれない。言論と思想の統制下で発売頒布禁止処分になった書物が裁断され、燃やされたとしても、その精神まで焼き尽くすことはできないではないか。獄死した者の思想を受け継ぐ者は、必ず現れるではないか。物質と肉体は滅んでも、精神は不滅ではないか、という反論が容易に予想できる。しかし、寿岳の書物論は、この反論がレトリックに過ぎないことを明らかにする。焚書や投獄によって思想の取り締まりが行われても、その思想が地上から消し去られることがないのは、なぜか。焚書を免れた僅かな部数が秘密裏に流通したり、複写がなされたり、あるいは、そのような思想の弾圧そのものが、歴史的事件として、記録と記憶に残るからである。精神は不滅である、という表現で語られる現象を、実情に即した形で言い換えるならば、精神は新たな物質的材料と肉体を得て、それによって受け継がれる、ということになる。人が精神と肉体から構成されるように、書物は内容と外形から構成される。後継者がいない限り、肉体が滅ぶ時、その精神も滅ぶ。同じように、

---

[32] 寿岳文章「エマスンと日本」、『英文学研究』16 巻 1 号（1936 年 2 月）、寿岳文章『英文学の風土』（大修館書店、1961 年）、233 頁。

[33] 寿岳「光悦と書物道」、『寿岳文章書物論集成』、413 頁。

[34] 寿岳『書誌学とは何か』、『寿岳文章書物論集成』、649 頁。

書物が裁断され、焼却される時、複写が作られていない限り、その内容は失われる。「人のむくろは亡びても思想は残るというが、それを残す主要な媒体は書物であり、書物の主要な存在条件は紙である」[35]と寿岳は述べ、書物の定義に「保存または運搬」という文言を注意深く組み込んだ。時間軸と空間軸の両方で思想が伝達されるためにも、書物は「保存または運搬」に適した外形を必要とする。

思想が残るためには媒体が必要である、という寿岳の書物観は、精神と肉体とを同等に扱ったブレイクの人間観に通じるところがある。ブレイクは精神を肉体の上位に置くということをしなかった。ブレイクの『天国と地獄の結婚』に次のような言葉がある。

> Man has no Body distinct from his Soul for that calld Body is a portion of Soul discernd by the five Senses. the chief inlets of Soul in this age（原文ママ）[36]

> 人は精神を離れて別に肉体を有たない。肉体とは五つの感覚によって識別される精神の一部分、現代に於いては精神の主要な入口である。（寿岳文章訳）[37]

> 人は霊魂と区別されるような肉体を持たない、というのは、肉体と呼ばれるものは、現代における霊魂の主要な入口である五つの感覚によって識別された霊魂の一部であるからだ。（拙訳）

寿岳訳には問題点が二つある。一つは理由を表す前置詞‘for’が訳出されていないことであり、もう一つは「肉体」が「精神の主要な入口」と読めてしまうことである。原文では、‘the chief inlets’は複数形であり、直前に置かれた‘the five Senses’の言い換えである。つまり、複数形で表記された「精神の主要な入口」は、複数形で表記された「五つの感覚」に対応しており、単数形で表記された「精神の一部分」、すなわち「肉体」と結び付けることには無理がある。「人は精神を離れて別に肉体を有たない」という言葉に感銘を受けたあまり、寿岳はその勢いで「肉体」を「精神の主要な入口」と解釈してしまった、と考えてみたくなるが、もちろんこれは憶測の域を出ない。ただ、思想とその媒体とを等価に置く寿岳の書物観が、精神と肉体とを一体のものと見るブレイクの人間観と同じ構造を持っていることは明らかである。逆の言い方をするならば、内容と外形をあわせて考える書物観を持っていたからこそ、「保存または運搬」の重要性が寿岳の視野に入り、思想の伝達に不可欠な媒体として書物をとらえることが可能になった、とも言えるだろう。

思想の伝達が書物の役割である以上、「書物は元来一部でも多く、一銭でも安く出版され

---

[35] 寿岳文章「愛書経序品」、『京わらべ』1 号（1932 年 10 月）、『寿岳文章書物論集成』、677 頁。

[36] Blake, *The Marriage of Heaven and Hell*, E34.

[37] 寿岳文章訳『ブレイク詩集』（岩波文庫、2013 年）、150 頁。

て、能うかぎり大勢の人々に読まれるのが望ましい」[38]。そのような意味で、寿岳は、英国のエヴリマンズ・ライブラリーや日本の岩波文庫に価値を認め[39]、表紙を紙で作った手軽で安価な紙装本の役割を評価する[40]。一方で、「保存」を意識すると、「書物は美しいものも醜いものも、条件さえよければ相当に長い時間的生命を持つ。この意味で、書物を建築物になぞらえることもまた可能であろう」[41]。寿岳の出版物に、しばしば特装本が見られるのは、「保存」に重点を置いたためかもしれない。建築物としての書物について、寿岳はさらに次のように述べる。

> 所論を明白にするために、私はまず装幀の意義を簡単に規定しておこう。装幀という言葉の内容についてはいろいろの説が行われているが、語義はどうであろうと、これを「書物に物質的形態を付与するいっさいの条件」と定義するのが、工芸的な立場から見て一番いいと私は思う。しばしば私が言ってきたように、用紙、印刷、挿絵、製本などが密接につながりあって構成される書物は、土台や笠石や屋根や垂木や壁などから成り立つ一つの建築物に、あるいは各種の楽音の諧和から生ずる一つの交響楽になぞらえることができるであろう。(「作家と装幀」）[42]

書物を建築物に見立てた時、装幀が重要な鍵言葉になる。書物は、紙、インク、字体、行、空白、余白を構成要素として成り立っており、「装幀とは、書物に付与されたいっさいの物質的条件の総括」[43]である。装幀の原理として、寿岳は用と美を挙げ、用を美よりも優先する。なぜなら「工芸の世界では元来用と美とは離して考えるべき問題ではなく、すぐれた作品ではそれが無理なしにじつに自然に結びついている」[44]からである。用と美の有機的な一体化が「正しい美しさ」をもたらし、「正しい美しさとは生活に即して生きる美しさであり、書物の外装の正しい美しさとは書物の生活に即して生きる美しさである」[45]。強くて破れに

---

[38] 寿岳文章「限定版雑記」、『明治大正文学書目』（大阪万字屋書店、1958 年）、『寿岳文章書物論集成』、604 頁。

[39] 寿岳文章『書物の世界』（朝日新聞社、1949 年）、『寿岳文章書物論集成』、28 頁。

[40] 寿岳文章「変質する読書を憂える」、『産経新聞』東京夕刊（1964 年 9 月 13 日）、『書物の共和国　定版』、429 頁。寿岳文章「出版学とは何か」（日本出版学会創立記念講演、1969 年 6 月 28 日）、『寿岳文章書物論集成』、801 頁。

[41] 寿岳『書物の世界』、『寿岳文章書物論集成』、90 頁。

[42] 寿岳文章「作家と装幀」、『新潮』31 巻 6 号（1934 年 6 月）、『寿岳文章書物論集成』、596 頁。

[43] 寿岳文章「モリスの装幀」、『東京堂月報』21 巻 4 号（1934 年 4 月）、『寿岳文章書物論集成』、432 頁。

[44] 寿岳文書「装幀問答」、『工藝』44 号（1934 年 8 月）、『寿岳文章書物論集成』、609 頁。

[45] 寿岳文章「装本について」、『愛書』4 輯別冊付録（1935 年 9 月）、『寿岳文章書物論集成』、614 頁。

くい紙、読みやすく印刷された文字列、堅牢な装幀が「書物の外装の正しい美しさ」[46]を生む。

装幀をめぐる寿岳の言葉の裏側には、柳宗悦の工藝論を見ることができる。柳は「工藝の美は奉仕の美である。凡ての美しさは奉仕の心から出る」と言った[47]。同じように、ウィリアム・モリスの書物論も透けて見える。頁上の活字と余白の配置を論じるにあたって、モリスは「建築的な配列」[48]という表現を使った。書物を建築になぞらえる寿岳の発想は、モリスに由来するのかもしれない。また、モリスは、紙、活字、字間、語間、行間について、その理想的なあり方を具体的に語った。頁の余白については、次のような助言がある。

> 最後に、これも大事なことだが、ページ上の版面の位置が問題になる。これは常に、内側の余白を最も狭くし、天をそれよりいくぶんか広くし、外側（前小口）をそれよりさらに広く、そして地を一番広くとるようにするべきである。中世の書物では、写本であれ印刷本であれ、この規則からの逸脱はまったく見られない。(「ケルムスコット・プレス設立趣意書」）[49]

雑誌『ブレイクとホヰットマン』1 巻 1 号の「雑記」に、寿岳は「なぜこんな贅沢な紙を使ふかと怪しむ人には、ヰリヤム・モリスが‘ケルムスコット・プレス設立の主旨’中に述べてゐることがよき答へとなるだらう」[50]と書いた。寿岳がモリスの「ケルムスコット・プレス設立趣意書」を参考にしたのは、紙に関する部分だけではない。『ブレイクとホヰットマン』の余白の取り方は、内側が狭く、天も狭く、外側が天よりも広く、地が最も広くとられている（図 1)。これは、「ページ上の版面の位置」について、モリスが提案した様式と一致する。

図 1 『ブレイクとホヰットマン』1 巻 1 号（1931 年 1 月)、4-5 頁、筆者所蔵、筆者撮影

このように、寿岳がモリスから影響を受けたことは明らかだが、「自分自身をはっきりと確立していくための読書だという根本態度」を、寿岳はモリスに対して持ち続ける。書物のあり方について考えるための手掛かりをモリスから受け取りつつも、寿岳は「ケルムスコット・プレスの刊本の最もあきらかな欠点は、うるさくまたしつこく施されたあの縁飾りや花

---

[46] 寿岳「装本について」、『寿岳文章書物論集成』、615 頁。

[47] 柳宗悦『工藝の道』（ぐろりあそさえて、1928 年)、『柳宗悦全集』8 巻、76 頁。

[48] ウィリアム・モリス「理想の書物　一八九三年の講演」、ウィリアム・モリス『理想の書物』ウィリアム・S・ピータースン編、川端康雄訳（晶文社、1992 年)、147 頁。

[49] ウィリアム・モリス「ケルムスコット・プレス設立趣意書　一八九六年発表のエッセイ」、『理想の書物』、162 頁。

[50] 寿岳「雑記」、『ブレイクとホヰットマン』1 巻 1 号、47 頁。

文字模様にある」[51]とモリスを批判した。モリス考案の活字は読みやすいものではなく、「彼の作った書物は活字に比して装飾図様が多すぎはしないか」と寿岳は指摘し、「モリスが真に偉大な工芸家となるためには、家具の場合と同様に印刷においても、その夢を、その情熱を、その主観性を、そしてそのロマンティシズムを、もっと謙遜な形に盛らねばならなかった」[52]と述べた。
印刷は思想や情報を伝達するための手段であって、読み手にとっての読みやすさが最も重要である。「すなわち、活字印刷の世界では、印刷者自身の個性は厳重に排除される」[53]。この要件を満たすのが、寿岳によると、明朝体であり、「明朝字体が無難なのは、個性が少いからである」[54]。寿岳は言う。

> しかし本当に書物が美しくあるためには、ただに活字だけでなく、挿絵だけでなく、いわんや表紙だけでなく、隅から隅まで美しさが行きわたっていなければならない。言い換えれば、どこもみな美しいために、一部分の美しさがちっとも眼に立たぬ書物でなければならない。さらに砕けた言葉で申すなら、表紙や見返しや活字などが、めいめい見てくれがしに、どうだ、おれは豪勢だらう、と肩をそびやかしたり、わたし綺麗でしょう、と媚態を作ったりしているうちは、だめなのである。一方で金持がどんなに贅沢な暮しをしていても、他方に貧民窟があれば、その社会は、けっして美しい社会と言えないのと同然である。(「美しい書物について」) [55]

寿岳のモリス批判には、自己顕示欲をものづくりの敵とみなした柳の工藝論に通じるものがある[56]。また、それぞれの構成要素がそれぞれの機能を果たし、そうすることによってそれぞれが美しくなり、書物全体も美しいものとなる、と論じながら、比喩として社会のあり方に言及するところに、思想と生活とを結び付けて考える寿岳の書物論の特色が垣間見える。特定の個人や集団がその力を誇示して全体を支配するのではなく、構成員が対等に運営に参画するのが共和国という体制の特徴であるとすれば、「書物の共和国」を構成するそれぞれの書物それ自体が、寿岳の書物論においては、「表紙や見返しや活字など」から構成される一つの共和国のようなものだった。

---

[51] 寿岳文章「書物工芸家としてのモリス」、『モリス記念論集』(川瀬日進堂書店、1934 年)、『寿岳文章書物論集成』、455 頁。
[52] 寿岳文章「近英の私版」、『英語研究』300 号（1933 年 10 月)、『寿岳文章書物論集成』、264 頁。
[53] 寿岳『書物の世界』、『寿岳文章書物論集成』、107 頁。
[54] 寿岳『書物の世界』、『寿岳文章書物論集成』、112-113 頁
[55] 寿岳「美しい書物について」、『寿岳文章書物論集成』、700 頁。
[56] 「私はその敵を二つに数へる。一つは主我の念、一つは主知の心。前者は自我や個性の跳梁により、後者は意識や作為の超過による」。柳『工藝の道』、『柳宗悦全集』8 巻、136 頁。

4 「書物の敵」に抗するために

書物には敵が存在する。英国の印刷業者であり、書誌学者でもあったウィリアム・ブレイズ（William Blades, 1824-90）は『書物の敵』を著し、書物に害を及ぼすものを十項目にまとめた。寿岳は、同書が出版された 1880 年という時代を考慮に入れる必要があるだろうが、と断った上で、これらの十項目を「書物人の誰もが心得ておかねばならぬ良識」と位置付け、『書物の世界』（1949 年）で詳しく紹介した。

> さて、同題の書物の中でブレイズがあげている書物の十敵とは、（一）火、（二）水、（三）ガスと熱、（四）塵となおざり、（五）無知と頑冥、（六）紙魚、（七）その他の害虫、（八）製本師、（九）蒐集家、（十）下婢と子供たち、である。（『書物の世界』）[57]

「火」には火事や戦争が含まれ、「水」には洪水や船舶事故に加えて湿気が入る。「ガスと熱」は、当時はまだ電灯が普及していなかったことが背景にある。同じように、読者は仮綴じの状態で書物を購入し、「製本師」に製本を依頼する時代であったために、粗雑な仕事で書物を台無しにする「製本師」が、「書物の敵」の一員に数えられた。そのような意味では、「下婢」という項目も、英国の階級社会を前提としており、その構造的問題に触れないまま、ブレイズの主張を受けて「婦人に対してはいささか酷にすぎる批評である。しかし、書物の世界では、古今東西、どうも婦人の評判はよろしくない」[58]と一般化したのは、寿岳の議論の進め方も性急でよろしくない。

寿岳は『書物への愛』（1959 年）で再びブレイズの『書物の敵』に言及する。『書物の世界』で紹介した時とは論調が異なり、「婦人の評判」云々の部分は姿を消した。その代わりに、宗教や政治が世界各地で行ってきた禁書や焚書の具体例が列挙され、最大の「書物の敵」として、次のような見解が示された。

> 直接書物とは関係がないとしても、アメリカの裁判官ホームズの不滅のことば、「思想の自由とは、われわれの同意する思想の自由ではなしに、われわれの憎悪する思想の自由を保障することだ」は、そういう自由が保障されなかったために亡びて行った多くの書物の身の上を思うとき、いよいよ重みを加えましょう。治安維持法という稀代の悪法が、権勢の座にある頑迷な内務官僚どもによって、最大限に拡張解釈されていた戦前の日本では、内務官僚が書物の最もにくむべき敵であったこと、申すまでもありません。（『書物への愛』）[59]

---

[57] 寿岳『書物の世界』、『寿岳文章書物論集成』、72 頁。William Blades, *The Enemies of Books* (London: Elliot Stock, 1880).

[58] 寿岳『書物の世界』、『寿岳文章書物論集成』、84-85 頁。

[59] 寿岳『書物への愛』、『寿岳文章書物論集成』、769 頁。

書物は「保存または運搬」に適した形でまとめられた物体であり、したがって、時間と空間を隔てて、読み手は様々な著者と対話をすることができる。読書とは、思想と感情の多種多様な表現に触れ、批評精神を育み、価値観を鍛える営みである。その時、著者の主張を鵜呑みにするのではなく、著者の主張とは異なる見方はないだろうか、と別の角度から考えることは、既に見たように、自己を確立する上で重要な姿勢である、と寿岳は言った。この文脈で、寿岳は「自分の考えている思想や真理と全く反対の立場にある書物」を読むことを推奨した。思想的に似通ったものばかりを読むと、偏見や思い込みが強化され、心が頑なになり、独善的に振る舞うようになるからである。なお、「アメリカの裁判官ホームズ」とは、最高裁判所判事を務めたオリヴァー・ウェンデル・ホームズ（Oliver Wendell Holmes, 1841-1935）を指す。寿岳が引用したホームズの言葉は、異論や反論に価値を認めることの重要性を述べており、思想の自由の本質を表現したものして名高い。[60]

現状を的確に認識するためには、都合の悪い事実に目を向け、耳の痛い意見に耳を傾ける必要がある。そのためには、禁書や焚書の歴史から、思想や言論の弾圧とはどのようなことなのか、それらはどのように行われ、どのような害を社会にもたらしたか、を学ぶことは有益である。「治安維持法という稀代の悪法」に支配された時代を教訓として活用するために、寿岳は「発禁本図書館」の設立を提唱する。

> 館内には、人類が書物を思想伝達の手段とするようになってから、たとえ一度でも、時の為政者や権力によって頒布を禁止された書物を、ひろく各国から集める。原物の収集はおそらく不可能だろうから、複製でも、翻刻でもよい。それも無理なら翻訳でもかまわないし、翻訳すらない場合には書名と解題だけででも我慢しよう。大切なのは、その書物のどのような箇所が、または全体が、どのような理由によって、誰の手で頒布禁止処分を受けたかの詳しい説明である。（「発禁本図書館」）[61]

---

[60] 原文は‘United States v. Schwimmer, 279 U.S. 644 (1929)’の判決に含まれており、ホームズの伝記では、必ずと言っていいほど、引用される（‘[…] if there is any principle of the Constitution that more imperatively calls for attachment than any other it is the principle of free thought—not free thought for those who agree with us but freedom for the thought that we hate’）。たとえば、Silas Bent, *Justice Oliver Wendell Holmes* (New York: The Vanguard Press, 1932), pp. 331-332; Catherine Drinker Bowen, *Yankee from Olympus: Justice Holmes and His Family* (Boston: Little Brown, 1944), p. 405; Francis Biddle, *Mr. Justice Holmes* (New York: Charles Scribner's Sons, 1946), p. 165 を参照。その影響力は、ホームズの言葉の一部が、アメリカにおける言論と思想の自由の歴史をたどった書物の表題に用いられたところにうかがえる。Anthony Lewis, *Freedom for the Thought That We Hate: A Biography of the First Amendment* (New York: Basic Books, 2007).

[61] 寿岳文章「発禁本図書館」、『書林　高尾彦四郎書店古書目録』（1959 年 4 月）、『書物の共和国 定版』、391 頁。

船が進んでいる時、その針路に氷山があることがわかれば、乗組員は進路の変更を船長に具申するだろう。しかし、そもそも船長が乗組員に発言することを許さず、指示に従うことのみをもって良しとするような運営をしていたならば、必要な時に必要な報告をする乗組員はいなくなる。異論を封じるとは、軌道修正の可能性を、自らの手で放棄することを意味する。「中山昌樹訳・ダンテ『神曲地獄篇』が発禁になった」ことや、「『白樺』に載った長与善郎の「誰でも知っている」が筆禍を買った」ことに触れながら、寿岳は「明治も大正も暗黒な時代であった」[62]と述べる。その「暗黒な時代」を生き抜いた寿岳は、思想の自由について楽観視しない。

> 明治の末から数十年、愚かな軍人や政治家のもとで私が自分のものとした知恵は、疑えるだけは疑え、昔のギリシア人のように、と私にささやく。「集会、結社および言論、出版その他一切の表現の自由はこれを保証する。検閲はこれをしてはならない。通信の秘密は、これを侵してはならない」とはっきり規定した憲法が、いつまで私たちのものであるだろうか。健忘こそ長生きの奥の手だと心得ている日本人は、あまりにも現実的、眼前的でありすぎる。未来へも過去へも、巨視のレンズを向けようとはしない。だからこそ私は、発禁本図書館をあちこちに作って、なによりもまずその研学を公務員に義務づけることにより、再びくりかえしてはならない悪と愚行の反省としたいのである。（「発禁本図書館を作れ」）[63]

寿岳は、出版するという意味の英単語 publish について、その語源はラテン語の動詞にさかのぼると述べ、「人の前へ「これは今まで私がもっていましたが、どうぞご自由にお使い下さい、さしあげます」と言って、何かもち出す場合に使いました」[64]と説明する。共同体の構成員が、それぞれの思想や感情や情報を「どうぞご自由にお使い下さい」と互いに差し出して、互いに助け合う空間が「書物の共和国」である、と言えるだろう。読書を通して、読み手が著者と対話をし、さらに読み手同士が対話をする。そのような対話を妨げる力があるとすれば、それこそが最大の「書物の敵」である。寿岳は『英語青年』に連載した「私の戦中戦後史抄」で、英国の駐日外交官ジョン・ピルチャー（John Pilcher, 1912-90）との交流が 1941 年の夏には難しくなったこと、関西学院文学専門部の配属将校が傍若無人に振る舞ったこと、市電で英書を読んでいたら「大丈夫ですか、車内でそんなのを読んで」と声を掛けられたことなどを当時の思い出として語った[65]。「発禁本図書館」設置という提案には、

---

[62] 寿岳「発禁本図書館」、『書物の共和国　定版』、393 頁。

[63] 寿岳文章「発禁本図書館を作れ」、『中部日本新聞』（1959 年 7 月 10 日）、『書物の共和国　定版』、395 頁。

[64] 寿岳「出版学とは何か」、『寿岳文章書物論集成』、796 頁。

[65] 寿岳文章「私の戦中戦後史抄 2——増幅する軍部の英米文化排除」、『英語青年』129 巻 9 号（1983 年 12 月）、『寿岳文章書物論集成』、984-986 頁。

思想統制の時代の記憶を教訓として活用しようとする冷静な姿勢とともに、そのような時代が存在したことそのものに対する寿岳の熱い怒りが感じられる。

5 「書物の共和国」

寿岳の書物論にしたがえば、「書物の共和国」という言葉には、過去と現在と未来において、著者と読み手と読み手同士が、書物を媒介にして、対等に意見を交換する場という意味が込められている。読書行為そのものは孤独な作業である。しかし、「そうした個人の、著者対自分という関係を、こんどは多く持ち寄ることによって、互いに比較し、私がこう読んだところをきみはそう読んだのかといったぐあいに違った読み方があったことを反省し、なるほどその方がその場合正しいだろうという納得をするとしたら、それはその人にとってはやはり飛躍であり成長です」[66]と寿岳は言う。その時重要なのは、「私がこう読んだ」、「きみはそう読んだ」という主体性であり、当事者として意見交換に参加することである。当事者意識が「共和国」というあり方を支える。それは、思考を停止して、大勢に迎合することに対する解毒剤でもある。

> もしも著者が、自分のいわんとする独自の見解を没却して、つまり個性ある人間ではなくなって、国家の主権者が強制する方針にのみ忠実な、型にはまったことを書き著したらどうであろう。そのみごとな例を、私たちは過去において軍部独裁の日本に見、ファシズムのイタリアに見、ナチズムのドイツに見てきたではないか。そして現在もなお、ソビエト連邦に見ているではないか。永遠に残る書物というものは、そんな境位からはけっして生れない。［中略］学者や芸術家を機械化して国定イデオロギーの代弁者としてしまうほど、書物の世界においてみじめな、また滑稽な光景はない。(『書物の世界』)[67]

意見交換をして、進むべき方向を探る。進んでいくなかで、違和感があれば、立ち止まって、進むべき方向を再検討する。対等な対話が成り立つ時、忌憚のない意見交換によって視野は広がり、ものの見方は多面化する。複数の人々の間で意見を出し合って、議論をしながら考える方が、状況にそぐわない不適切な判断をする確率は低くなる。信頼関係があれば、危機に際して、相互に支え合うこともできるだろう。「寿岳夫妻の家庭は、一つの小さい共和国として、それをおしつつむより大きな日本帝国を内側から見かえすことをやめなかった」[68]という鶴見俊輔の言葉は、「書物の共和国」の本質を言い当てている。

「一九八六年五月十二日　向日居にて」と日付のある「定版あとがき」に、『書物の共和

---

[66] 寿岳「読書体験を語る」、『書物の共和国　定版』、457 頁。

[67] 寿岳『書物の世界』、『寿岳文章書物論集成』、33-34 頁。

[68] 鶴見俊輔『柳宗悦』（平凡社、1976 年）、『鶴見俊輔集』（筑摩書房、1991-2001）続 4 巻、94 頁。

国　定版』は、書物のあるべき姿についての「表白」である、と寿岳は記し、「表白の背後には、理想の書物共和国の建設にいそしんだ先人たちの知見がきらめく」と続けた。寿岳の書物論を踏まえるならば、「先人たち」には、寿岳が「書物の共和国」の由来として挙げたプラトンやトマス・モア以外に、ジャン・グロリエ、ブレイク、ラスキン、モリス、光悦、柳などが入るだろうし、粘土板文書、竹簡や木簡、パピルス、紙を製造し、書写と印刷と製本に携わった無名の人々も含まれる。また、「知見」とは、彼らが考案し、改良し、伝承した本造りの技術のみならず、書物と社会との関わり方や思想と政治とのせめぎ合いをめぐって蓄積された数々の叡智を指す。寿岳は 1932 年に発表した「向日庵発願記」で、「著者に諂ふことなく、読者に阿ることなく、射利主義の流れから高く遠く離れ、ただただ良心の声のみに耳を傾け、すぐれた内容に美しく正しい装ひを与へ、思想と工藝との二つの世界を密に結び合はせようとするのが私の願ひである」と述べ、「茶の実の紋が、今後向日庵私版本の題扉に、装幀に、また新しく紙が漉かれる場合にはその漉入に用ゐられる標識である」[69]と記した。「茶の実の紋」は、その後、1980 年代に刊行された『寿岳文章書誌』と『寿岳文章書物論集成』の背表紙に型押しであしらわれ、それぞれの外函にも印刷された。寿岳の著作に刻印された「茶の実の紋」は、「向日庵発願記」の宣言が 50 年以上にわたって実践され続けたことを象徴する。

『書物の共和国　定版』が世に出てから、四半世紀の時が流れた。「定版あとがき」を書いた時、書物を通して社会のあり方を考え、社会のあり方を通して書物を考える営みにおいて、寿岳は歴史の最先端の位置にいた。現在の読み手にとっては、寿岳その人が「理想の書物共和国の建設にいそしんだ先人たち」の一人である。寿岳は 1939 年に発表した事典の項目記事「書物」を、「今後の書物の運命は、ひとえに、人間がどんな社会を作るかにかかっている」[70]という言葉で結んだ。冷静で静かな言葉遣いではあるが、1939 年という時代を考えるならば、たぎりたつ感情を抑えつつ、検閲に掛からないぎりぎりの線を見極めて、寿岳がこの表現を書き記した、と推測できる。言論と思想の自由が奪われた時代を体験したからこそ、寿岳は上意下達型の意志決定がもたらす災厄について敏感であったし、そのような意志決定のあり方そのものを災厄と見る視点を持ち続けた。「書物の共和国」とは、対等な話し合いによって運営される共同体を求めて、寿岳が未来に託した希望であり、寿岳の書物論が読み継がれる意義はそこにある。

---

[69] 寿岳文章「向日庵発願記」、『ブレイクとホキットマン』2 巻 11 号（1932 年 11 月）、裏表紙。寿岳は京都の向日町について、「この私版の名にゆかり深き京都西郊向日町——そこにはいたるところに茶の樹が見出される」という言葉を残している。寿岳文章「向日庵私版発願記」、『書物の道』（書物展望社、1934 年）、『寿岳文章書物論集成』、911 頁。「茶の実の紋」は、本誌『向日庵』の表紙に受け継がれた。

[70] 寿岳「書物」、『寿岳文章書物論集成』、188 頁。

宗教的真理の探究

中島 俊郎（甲南大学名誉教授）

「あるとき私は、柳における神秘主義思想の価値観について質ねたところ、正しい宗教的思惟にも往々にしてとりつく『我執』や『我見』、つまり教相判釈的価値観の誤りを正して、宗教的真理の正しい水平化を実践させる道が神秘主義思想だとの答えが返ってきたが、これは全人的な思想家としての柳を理解評価するのに極めて必要な思索過程だと思う。」[1]

はじめに　異分野を統合する力

ルネサンス期の芸術家のごとく多分野に業績が重なる寿岳文章のような人をどのような範疇に分類し、いかに呼称すればいいのであろうか。まず文化人、知識人、もしくは人文主義者、ユマニスト、モラリストなどの呼称が浮かぶが、そうした名称が意味する含意におさまらない部分が多分にありそうである。

寿岳はブレイク研究を中心とした英文学研究で学界を牽引し、英文学者として国際的な名声を博している。また、英国の書誌学会に入会しわが国へ初めて学問的な書誌学を導入し、『キルヤム・ブレイク書誌』および『日本におけるエマソン書誌』を世に問い、前者については高名な書誌学者ジェフリー・ケインズから「ロンドン以外の地でこのような業績が達成されるとは想像すらできなかった」[2]とまで吐露させた。中学時代から世界文学の重要性に注目し、早くもブレイク以前にダンテに親しみ、『神曲』を独自の視座から解釈し、通読させる文体で翻訳してみせた。

思索と実践　さらに書物好きが昂じて造本の妙味を心ゆくまで追求した向日庵本という私家版制作に着手し今日においても変わらない高い評価を得ている。ほぼ同時に開始した和紙研究は戦時中、残存する紙漉き村を探査し、『紙漉き村旅日記』に結実する。これは美意識から発した和紙への愛着にとどまらず、戦時中を通じて滅亡しつつある紙漉きという零細業を丹念に観察した社会学的な記録でもあった。晩年に自らの業績を総括して、「一つは、英文学を主軸とする外国文学の研究と翻訳。次の一つは、書物の美的ならびに社会的機能の究明。残る一つは、愛着からくる和紙への学問的な取り組みで、和紙学とでも名づくべきか」[3]といみじくも規定したが、「文学は、私にとって、思考や研究とだけに結びつくものではな

---

[1] 寿岳文章「柳宗悦と英文学とのかかわり」『柳宗悦全集著作篇』第 5 巻（筑摩書房、昭和 56 年）, p. 626.

[2] Geoffrey Keynes's letter to Professor Jugaku dated on August, 21, 1929 [向日庵資料]

[3] 寿岳文章「和紙と私」『わが日わが歩み』（荒竹出版、昭和 52 年）、p. 322.

い。人生のほかのもろもろの事象と同様、行じてこそ意義をもつ」といった付帯条件がつくように、机上の学問、研究に終始するのではなく、何らかの行動にうつし、たえず研究に社会との連関を求めたのであった。

戦後の寿岳はこうした学問知を基盤として社会問題、政治的状況についてジャーナリズムを通じてさかんに発信していく。生涯にわたり三千をこえる多様な発言が新聞、雑誌の記事にとどめられているが、いずれもただひとつの声へと収斂されていく。それは戦争を憎悪し一途に平和を希求する声である。

統合する力　では、寿岳のなかで英文学、和紙、書物研究を一体となって活性化させ、統合していく原動力は何から生じ、何を生み出していったのであろうか。こうして問いに対して、寿岳自身が明確に応えている――「ダンテと紙と、どういう関係があるんだ？と聞かれることもあるんですけどね。そもそも趣味と本職とを別物と考えることが間違いなのです。何にでも興味を持てばそれは百％の力で実行することを要求されている。･･･すべて、趣味でも何でも、己を活性化させることにつながらなくては、生きている人間とはいえません。人が事を思えば、それは実行に移す可能性を持つ―これが、私の生き方の根本に、変わらずにある信念です」と。生きることとは、自己を活性化することであるという提言には大きな意味があるのでなないだろうか。

さらに人が生きるうえで対象を統合していく努力を忘れてはならないと寿岳は強調する。「いまは学問の専門が細分化されて、全体を見る視野がせばめられている。あれで何が楽しみかと危ぶまれます。一方で地球そのものが小さくなって、科学の先端部分に地球の運命がゆだねられているといってもいい。このままでは、科学の負の方向に片寄っていきはしませんか。ものを全体的に見る視野が現代には意味をもつのですが、実際には統合していく努力をしなくなりました」[4]と今日でも問題となっている研究、学問の専門化による弊害、没人間化、人文科学の危機が先鋭化されてここに議論されている。

本稿は寿岳がみずからの人間性を確立するうえで立脚することになった精神的基盤である「宗教的真理」の形成と解明を目的としたものである。

Ⅰ　精神の形成

1967 年、自然作家リチャード･ジェフリーズの自叙伝に倣って書かれ[5]、神戸新聞に掲載

---

[4] [寿岳文章]「『今』を語る―英文学者　寿岳文章氏」『朝日新聞』(1983 年 12 月 10 日)

[5] *Cf.* "'The Story of My Heart' is a confession, a description, of the stages by which he reached the ideas of his later life. He has erased from his mind the traditions and learning of the past ages, and stands 'face to face with the unknown.' His general aim is 'to free thought from every trammel, with the view of its entering upon another and larger series of ideas than those which have occupied the brain of man so many years. He believe that there is a whole world of ideas outside and beyond those which now exercise us.'" Edward Thomas, *Richard Jefferies: His Life and Work* (London; Hutchison, 1909), p. 181.

された『わが心の自叙伝』は寿岳文章の精神形成を知るうえで必読の文字である。[6]そこには仏教徒がキリスト教との相克をえて、確固たる自らの宗教的態度を確立していく過程が詳述されているからだ。「東寺中学（洛南高校の前身）ですごした四年間をふりかえってみると、現在の私とつながる三つの太い線が指摘できる」と自我・人格が形成される途上に蒙った影響を述べているが、寿岳のいう「三つの太い線」とは、仏教・文学、生物学、そして社会学からの影響である。

仏教　まず仏教的な教えとして、「そこで『八宗綱要』や『天台宗四教儀』『弁顕密二教論』など、仏教の基本知識を供給してくれる宗乗余剰[余乗]の書物を学んだこと」という仏典からの教示をあげている。そして感化を及ぼすことになる教師陣として長谷宝秀、栂尾祥雲など、「宗内トップ・クラスの学者」である高僧との出会いに恵まれたという。ただ経典を祖述するだけの地味な教授法であったが、ありのままの「伝統的な教学の輪郭を身につけられた」ため、恣意的な解釈がほどこされず、かえって資するところになったという。

こうした仏教的な教育は、ふたつの大きな力を与えた。後年の生きる推進力となる「宗教的真理への関心」という精神力と、日本文化、文学の精神的支柱ともいうべきものを示唆されたのであった。つまり、「『源氏物語』や『梁塵秘抄』以降の日本文学の水脈となっている仏教を、知識としてではなく、受肉した内部経験として、そのまま理解できるというのも、中学の頃宗教の門をたたいたおかげである」[7]と感謝をもって述懐している。

百瀬清志　ただ、こうした仏教につかえる高僧以外の、数学、英語の教師は「実にひどいものだった」という。「数学をきらいにさせるために数学を教えていたとしか考えられない」数学教師に遭遇した文章少年は数学から離れてしまった。[8] そして英語の教師も定冠詞（the）を「トヒー」と読むような真言宗の僧がつとめていたので、文章少年に限りない幻滅を与えた。そうした苦境から少年を救い出したのは、学資かせぎに京大から来ていた上田敏の門下生であった。百瀬清志という学生であったが、授業中に『海潮音』を話題にし、敏から直伝による海外の文学思潮などを少年に伝え喜ばせた。百瀬は将来、小説家になるほどの文学青年であった。京大の卒業論文に詩人ダンテ・ガブリエル・ロセッティを選ぶのだが、寺で習字をしていて能筆であったため、文章少年に卒論清書を依頼するところなり、ふたりは急速に昵懇となった。下鴨にあった百瀬の家で文章少年は、生れて初めてライスカレーを食したという。ただ、この未知の食体験は文学においても新たな窓となったのである。[9]　卒業論文『D.G.ロセッティ私考』の筆写から英文学の作品になれ親しむようになっていき、「近代英文学とダンテの血縁的とも称すべきつながりの深さ知るに及んで、中学を了えたらいつか

---

[6] 寿岳文章『わが心の自叙伝』（神戸新聞社、昭和 40 年）、pp. 31-44.

[7] *Ibid.*, p. 39.

[8] 寿岳文章「私の英語開眼 数学教師への反抗心から」『高校英語研究』（1972 年 2 月号）、pp. 32-33.

[9] 寿岳文章「ダンテ『神曲』はおとなの遊園地」『青春と読書』（集英社、1987 年 6 月号）、pp. 12-13. 寿岳文章「邦訳『神曲』への道」『現代詩手帖』29 巻 7 号(思潮社、昭和 61 年 7 月）

は上田敏について学ぼう、との私の英文学志向は決定的となった」という。ここでもロセッティからダンテを結ぶ糸が見えてくるのである。つとに上田敏は、「[ロセッティは]『神曲』地獄界第五の翻訳は原詩を直訳することロングフェロウのに劣らず、しかも「テルザ・リマ」の押韻法を厳守しても毫も拘束せらるることなく、古今の絶唱を翻して婉美の調を伝えたるは驚嘆の他なしというべし」(「ロセッティの詩篇」『文芸論集』所収）のなかで、というようにロセッティのダンテ翻訳を推称していたのである。

書物の道につらなる志向は中学時代に確立していた。洋書専門店の丸善、大黒屋の番頭に名前と顔をおぼえられ、新刊書では東枝[書店]や若林[春和書店]の常客となり、加えて古本屋では当時河原町通丸田町東にあった国井の主人と親しくなっていった。[10] 東寺中学校の上級生となった文章少年は、寄宿舎の生徒監督に給与とされる月額 3 円の手当てを懐に古本屋回りをするのが無上の楽しみとなっていた。国井書店にはドイツ語の医学書、哲学、文学の古書が多く在庫しており、そこで「いつもたっぷり一時間」は過ごしたという。無口な主人は「中学生の私を、三高生や京大生なみに、客の一人として遇してくれた」ため、すでに英文学を志望していた「私はこの国井の主人からいろいろと洋書の知識を得たようである」[11]と後年、寿岳は回顧している。修学旅行で初めて上京した折、自由時間の合間に文章少年が真っ先に駆けつけたのは、丸善と神保町の古書街であった。

『神曲』との遭遇　後年の『神曲』翻訳にいたる始点とも言うべきことが東寺中学四年生のときに起きていたのである。それは文章少年の将来に決定的な影響を及ぼす文学的事件であった。上田敏の遺著『ダンテ神曲未定稿』が予約出版のかたちで刊行されたのである。郷里からの学費はとだえ、自力で経済的な自立をしていかねばならない境遇であった。幸い学校当局から舎長に任命され、月額 3 円の手当てが支給されるようになり、また雑誌の懸賞などに応募して購書資金に当てるようになった。月にほぼ 5 円の生活費で暮らすようになっていたが、2 円以上もする高価な、限定出版の形で刊行された『ダンテ神曲未定稿』は、とうてい少年の経済力に見合うものではなかった。出版の性質上かなり高価であった。そこで一計を案じた文章少年は、一応それを若林書店から買い求め、一晩で筆写し、翌日また若林へ持参し、口実を設けて返品するといった苦肉の策を講じた。おそらく書店側は少年の熱意にほだされて、このような行為を許したのであろう。60 年後、この少年は『神曲』を翻訳し、読売文学賞に浴すことになるのだが、『ダンテ神曲未定稿』の一件を覚えていた同書店の女主人は寿岳家を訪れ、祝いの品をたずさえ祝意を表わしにきたという。[12]

『詩聖ダンテ』この翻訳よりも早く中学 3 年生の頃、文章少年はすでに上田敏が明治 34 年

---

[10] 寿岳は東枝書店を通じて新刊書を注文していた。同書店から出ていた『類別図書目録』は、どのような本を寿岳が入手できたかを知るうえで有益な資料である。この貴重な目録を貸与して下さった桑原満氏に感謝したい。

[11] 寿岳文章「新風よ吹きおこれ」『京古本や往来』(昭和 53 年 8 月 25 日)、p.1.

[12]「ダンテ『神曲』はおとなの遊園地」pp. 12-13.

に出版した『詩聖ダンテ』を熟読していた。その序文冒頭に高らかに記述されていた「文藝の趣味は、広濶にして同情洽ねからむこそ望ましけれど、衷心の理想は、常に高遠雄大の傑作にむかいて、天才の鼓舞にみづからの進境を図るべきなり。南欧の詩聖ダンテ・アリギエリの閲歴は、後人の志を励すべき峥嶸の一生にして、述作、また詩文の高潮に達す。霊妙の詩才、雄渾の知力、牢乎たる道念、劇詩の力あり、抒情の熱あり、叙事の巧あるもの、真に万古の秀什なりかし」[13]といった文言は少年の琴線を打つものがあった。そして、その序文は、「著者、今淺を強いて、『神曲』の紹介を敢てするは、一代学風の枯淡、没趣味なるに激し、人心一般の萎靡を慨して、文藝の尊威を知らざる俗流を斥けむとしてなり」[14]と閉じられているが、まさかその当時、後年、みずからが畢生の訳業として『神曲』に対峙することになろうとは思わなかったであろう。ただ、翻訳が完成したとき、「詩聖ダンテの研鑽に精緻を尽くしたる基督暦第十九世紀を送りて、第二十世紀初年、はじめて絶東の文壇より遥に斯学の小著を捧ぐ」[15]という敏のことばが甦ってきたはずである。

研究の科学性　ダンテ受容に加えて、東寺中学校 5 年生のとき、文章少年はひとつの天啓にうたれる。それは「学問一般に通ずる科学的な研究方法とは何か」[16]といった、今後の諸活動すべてを統率する基準ともなるべき指針を見出したのである。「中学 5 年生のとき、市河三喜博士の『英文法研究』（大正元年）と、細江逸記博士の『英文法汎論』（大正 6 年）が私に与えた学問的興奮はかくべつである」と半世紀ふりかえって述懐しているが、こうした文法書はどのような知的興奮を少年に与えたのであろうか。

前者、市河三喜の『英文法研究』は、日本における学問的な英語学研究の嚆矢となった古典である。「英語に於ける種々の現象を総べてそのまま言語上の事実として受け容れ、これを公平に観察し、如何にしてこういう言い方が生じたかを、あるいは歴史的に上代に遡って、あるいは他の国語との比較研究により、あるいは心理学的の立場からして、不完全ながらも説明を試みてみたいというのが本書の趣旨である。一言にして言えば英語の言語学的研究である」(「序文」)、と結論づけた。ことに最後にあげられている歴史研究、比較研究の必要性こそ文章少年にコペルニクス的な転換を迫るものであった。

科学的研究法　文章少年が 5 年生になったときには『英文法研究』はすでに第三版を重ねていたが、その「序文」には「かくして語学の研究は単に記憶模倣にのみ拠するものではなく、立派に一個の科学としての威厳を有するものであって、これに対するにはもっとも厳格

---

[13] 上田敏「詩聖ダンテ」『上田敏全集』第 3 巻（改造社、昭和 3 年）、 p. 79.『詩聖ダンテ』（金港堂、明治 34 年）の構成は、「わかきダンテ」、「神曲序説」、「神曲地獄界の二絶唱」（上）小引（中）フランチェスカの悲恋（下）ウゴリノ伯の惨話、「神曲の自然叙景法」、「近代の神曲註疎」、「神曲梗概」（一）由来（二）題名（三）詩形（四）詩材（五）結構（六）趣旨（七）暦日（八）略界―地獄界、浄罪界、天堂界、となっている。

[14] *Ibid.*, p. 82.

[15] *Ibid.*

[16] 寿岳文章「私の英学事始」『ソニーLL 通信』31 号（ソニー、1970 年 1 月 5 日）

な科学者の態度を要するものであることが明らかになる」とうたわれていた。「厳格なる科学者の態度」という言葉に文章少年の目は釘づけになったはずである。寿岳の仕事は後年に「歴史地理的研究」を実践した『紙漉村旅日記』から未完の著述『和紙の歴史事典』まで、この序文にうたわれている「科学的態度」でつらぬかれている。

これらの文法書から学んだ科学的研究法は、たとえば『書誌学と何か』のなかで、「厳格な科学としての書誌学」とは「書物に関する科学」であるとして、科学的なアプローチでもって展開していく。中学時代に文章少年が開眼した「科学的な研究法」は、後年、書誌学の分野において明瞭に結実する。寿岳によれば、文学作品並びにその他の文献の物質的伝統を研究し、書物の伝達に際する物質的手段手段を細微周到に検討し、起源、歴史および本文に関する諸問題を解決することを書誌学の目的とした。そしてその論を実践してみせたのが書誌学の記念碑的な大著『ヰルヤム・ブレイク書誌』（1929）であった。[17]

英文法の研究書によって与えられた科学性を寿岳は書誌学によってさらに補完していく。一冊の本との出合いがあった。ロナルド・マッケロウの『文学研究者のための書誌学』である。すでに 1927 年に初版が出ていたが、訂正がほどこされた再版（1928）を入手し、耽読するところとなった。[18] 1930 年 7 月 13 日に読了し、巻末に英語で、「これよりも魅惑的な本に出会った経験は一度もない。書誌学への私の興味は、このみごとな本によって、消すべくもなく燃え立たせられた」と興奮して記している。結果、「事実、この本との出会いが、書物への私の愛と理解を決定的なものとした」[19]という。書誌学への開眼は、宗教的真理を求める過程での科学的な手続きとして大きな意味をもったのである。

---

[17] 「わが国のブレーク研究者を鼓舞するとともに書誌研究上精密にして科学的な記述の最高水準を示しその後の書誌の発展に寄与した。」弥吉光長『世界名著大辞典 1』（平凡社、1961）ただ、書物の読みやすさ、美しさを求めるゆえ、活字の種類、組み方、本文用紙、製本技術など多岐にわたる理想を求める過程で最初に手がけた『ブレイク書誌』は、理想の実現化以上に多くの疑問、課題を残した。「用紙の厚薄色彩が不同である点において、字母の形体において、活字の配列において、印刷インキの濃度において、また製本において、そこには多くのみたされざる要求がうっ積している。私の書誌が日本における最も芸術的な書物のひとつであるかのごとくに評せられることは、すなわちわが国の書物芸術がいかに低劣なものであるかを証明することにほかならない。」寿岳文章「総合芸術としての書物―拙著『ヰリヤム・ブレイク書誌』について」『宗教と芸術』10 巻 3，4 号（宗教と芸術社、昭和 4 年）

[18] “But it still retains the original idea of a help-book for literary students. I wish there to be no misunderstanding about this. It is not a hand-book for students of printing or of general bibliography. Still less is it intended for book-collectors. I have not concerned myself in the least with the rarity or beauty or commercial value of the products of the printing-press, but have kept before me throughout the problem of the relation of the printed book to the written word of the author.”Ronald B. McKerrow, *An Introduction to bibliography for Literary Students* (Oxford: Oxford University Press, 1927), p. vi.

[19] 寿岳文章「ほんとの出会い　英国書誌学会の会員に」『毎日新聞』（1973 年 1 月 15 日）

魂の彷徨　文章少年は関西学院高等部へ進学する前に精神の危機に瀕していた。情緒不安定のため半年間、休学していたにもかかわらず、岡本慈航校長の配慮で、1918 年 3 月、文章少年は東寺中学校を卒業した。その夏、三高を受験したが数学ができず落第の憂き目にあう。焦燥感がつのり、淡路島、美作の寺の住職になっている同窓生を訪ね歩いたが、放浪の旅は道頓堀近くにあった真言宗の法案寺南坊にて終止符をうつ。父が長崎通詞であった院主、和田達源 (1876-1944) の知遇をえて、ほぼ 1 年間も食客になったからである。達源は真言宗僧侶でありながらミッション系の青山学院を卒業し、寺で講習会を開きエスペラント語普及に挺身していた。「子供の純な生命を一人でも理智一遍より救い、一般民衆に正しい理解を与えるために子供の坊さまになっているので個性に任せて遊ばせたり教えたりしています」というのが達源の教育方針であった。周囲には進歩的思想をもつ人々が集り、盲目の詩人エロシェンコ、大逆事件の関与容疑をうけたが釈放された小説家沖野岩三郎もそうした人々であった。エロシェンコは、早大在学中の失明の打撃からようやく立ちあがろうとしていた岩橋武夫の家の客人となっている。岩橋家では兄と妹がエスペラント語で会話を交わしていて、やがて自宅に点字文明協会を設立し、点字の辞典、学習書を出版するようになる。文章はこの法案寺ですでに関西学院高等部へ進学していた達源の弟子八田昇岳や、やがて同級生となる岩橋武夫と知己になった。

エスペランチスト　この法案寺における体験は精神的な彷徨にさらされている文章の将来に大きな意義をもつことになる。法案寺は青年にさしかかろうとしている者に対して、まさに梁山泊のような場を与えたからである。達源に加えて、後年、南禅寺派管長の柴山全慶 (1894-1974) とも親しく交わるようになるのだが、いずれもエスペラント語を媒体とする平和思想に文章は深く感化されていく。全慶によれば、エスペラント語の提唱者であるユダヤ人の眼科医ザメンホフ (1859-1917) は少年時代にポーランド語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ロシア語などの多言語の環境を強いられ、言葉の疎通が民族間で不和を起す起因になることを痛いほど実感する。結果、ザメンホフはわれわれ人間が本当に仲良く共存していくためには、まず何よりも言葉が通じ合わねばならないと痛感していた。このように全慶はエスペラントという国際共通語が生み出された契機を知るようになった。さらにザメンホフによれば、人間は国家、人種、宗教、そして習慣をも越えて、ひとりの人間として愛し合い、尊敬しあわねばならないと主張する。[20] 文章は言語としてのエスペラント語を深く学ぼうとはしなかったが、その背後に流れる平和思想には限りない共鳴を寄せていく。

柴山全慶　大正 15 年 7 月、寿岳一家は南禅寺北門僊壷庵に移ったが、そこで後の南禅寺管長・専門道場師家、柴山全慶と知り合い、「慶さん（ケイッサン）」と呼ぶくらい親しくつき合うようになる。全慶は花をつける植物が好きで、自坊の庭には数多くの被子植物を栽培していて、季節の花を愛でていた。大輪の真っ白なユリの花が咲くと、「ユリが咲くからユリーオ（julio）だ」と言って寿岳家へユリの花を持ってきた。この口上から分かるように、7

[20] 「社会人としての和田達源師」『六大新報』第 1003 号（1923 年 3 月）、p. 8.　柴山全慶『命を生きる』（筑摩書房、1972 年）、pp. 161-63.

月をユリと呼称する全慶師は熱心なエスペランチストであった。[21]　1931 年 10 月 15 日、愛媛の浄土真宗万福寺住職浅野三智（1912-92）らと日本エスペラント協会を結成した。第一次大戦後のヨーロッパ、とりわけソ連へエスペラント語を用いて旅行したい希望をいだいていて、本山当局との間に確執が生じ、全慶は僧階を最下位に落とされた。第二次大戦後、鈴木大拙の要請でアメリカの諸大学で禅を教える機会を得たが、帰途、ヨーロッパへ立ち寄り積年の望みを実現するところとなった。バチカン宮殿で教皇と一対一の平常心でもって対面し、「私もこれで一城のあるじ、何も遠慮するところない。それに南禅寺の方が教皇庁より広大である」[22]と堂々と胸をはったという。こうした日本のクェーカー教徒のようなエスペランチストの思想が寿岳の思想形成に通奏低音のように流れているのを看過してはならない。

関西学院の青春　やがて大正 8 年 4 月、寿岳文章は関西学院高等部英文学科へ入学した。仏教徒の前にはキリスト教という新たな地平が拓けようとしていた。入学の主たる動機としては、法案寺にいた弟子のひとりがすでにこの創設されたばかりの学院へ入学していたこと、加えて英語雑誌『英語の日本』に載っていた在校生による快活な学園の雰囲気を伝える学校案内を読んだことからであった。中学を卒業する前後、寿岳はすさまじい神経衰弱に襲われ二年ほどはまったく勉学にも手がつかいない状態であった。ただ、こうした状況を打開せざるをえないほどの厳しい現実が目前には横たわっていた。入学直後、経済的自立をえるため、同期に同学院社会学科に入学していた山本利寿（のちの衆議院議員）の推薦により、神戸市立葺合実業補習学校に教員として雇用され自活の道にはいる。午後 4 時から 11 時頃まで英語を教え、事務をとったりする実務につき、月俸 25 円が給与された。[23]

時代　すでに 1918 年、鈴木商店による米の買占めにより神戸では米騒動が起きていた。そして 1921 年、学院から遠からぬ場所では川崎、三菱造船争議が激化し、7 月 29 日、川崎争議団 1 万 3 千人が示威運動のため、川崎造船所前で警官隊と衝突し、負傷者が続出する。文章の教室にも造船所、神戸製鋼所で働く勤労学生が多く出席しており、避けがたい時代の息吹を皮膚で感じていた。それは前年 10 月、学校に近接する地域が舞台となり、その貧民窟を描いた賀川豊彦の小説『死線を越えて』が改造社から出版され、発売後 1 ヵ月にして 210 版を数え、燎原の火のごとく日本国中を風靡していた時代でもあった。

抒情精神　傷つきやすい文章の胸を占めていたのは抒情の精神であった。旅と人生をうたった同じ郷土の詩人、有本芳水を愛読してやまなかった。[24]　手紙にも人生を旅にたとえ、人生を必死に模索しようとする文章の姿をうかがうことができる。「人生は旅であります。旅に死なんとした芭蕉や、西行は最も人生に徹した人であります。人生に対する自然のまま

---

[21] 寿岳文章「＜私の会った人＞　宗門・国境を越えて　エスペランチスト」『朝日新聞』（1978 年 7 月 10 日）

[22] *Ibid.*

[23] 『わが心の自叙伝』p. 43.

[24] *Ibid.*, p. 38.

の哀楽と同情の念がなくては、どうしてこの『奥の細道』のような純真な涙のにじみでも文字ができましょう。かさねて言う。私は日ならずして旅に鹿島立とうとしています。さらに私の思うのは、人の世を人故の旅にすごしたキリストの心であります。私は今旅にたとうとして、かの『旅のためには何をも持つな、杖も袋も糧も銀もまた二つの下衣を持つな。いずれの家に入るともそこに留まれ。そこより立ち去れ。人もし汝らを受けずは、その町を立ち去るとき証のために足の塵を払え』と仰せられたイエスのお言葉を思い起こすのであります。『夕を思い旦（あした）を思う』――私はいつもこの言葉を思っています。そうして旅に出ようとするのであります。過ぎ去った過去はいざしらず、これから生きながらうべきあけくれを、人生の旅に出ようとするのであります。」[25]　ただここで見逃してはキリスト教の影響である。この手紙の後半には新約聖書「ルカ伝」第 9 章からの引用が見られるように、キリスト教の感化がみられよう。

宗教の真理　1919 年 5 月、文章は満 19 歳の春をむかえていた。大乗仏教の漢訳大蔵経を日本語訳した『国訳大蔵経』が 1917 年から和綴本 12 帙 48 冊で国書刊行会から出版されつつあり、法華経三部と浄土三部経を収めた国訳大蔵経の第一巻が出版されていく。この叢書の心をひいた箇所に赤鉛筆で傍線をほどこし熟読していくうちに文章青年は、仏教への理解が深まり、逆に寺における信仰の矛盾に苦しめられるようになっていく。再度山大龍寺における寄宿生活の限界が見えてきたのであった。そして同時にキリスト教の世界を模索しようとしていた。いずれの信仰にもつきかねる葛藤が日記には生々しく残されているが、その葛藤を通じてより広義な信仰心を深めていったことには注目すべきであろう。「当時、神戸市の東はずれの原田の森にあった関西学院神学部の玄関には、たしか『真理は汝をして自由ならしむ』という意味の扁額がかかっていた。法華経や無量寿経を読み進む私には、その扁額の示すことが少しも違和を感じさせなかった」[26]というように、仏教かキリスト教かというような二者選択ではなく、宗教的な真理を把握するように信仰心は傾いていった。この一節には明確にそうした態度がにじんでいる。

キリスト教と英文学　では、寿岳にとってキリスト教とはどのような意味を発していたのであろうか。「京都大学文学部に進む前の四年間を、メソジスト派のキリスト教学園に学生として送ったことは、いまふりかえってみると、大きな意義をもつ。ここで私は、はじめてキリスト教への道を教えられた。英文学は、キリスト教への理解と経験なしには、むなしい知識にすぎぬであろう。現在の私が、仏教へと同程度のキリスト教（もちろんカトリシズムを中心として)への理解をもっているのは、心が若くてやわらかな時代を関西学院ですごしたからである」[27]と関西学院で育まれたキリスト教の精神性を指摘している。この精神性を無視した文学理解などありえないと考えたのも当然である。だから、作家、夏目漱石には満腔の尊敬を捧げるのでが、この精神性の欠如ゆえに英文学者としての漱石を全面的に首肯

---

[25] 岩橋武夫宛寿岳文章書簡（大正 9 年 7 月 19 日）[向日庵資料]

[26] 寿岳文章「読経隋筆」『清水』第 10 号(清水寺、1967 年 7 月)、p. 15.

[27] 『わが心の自叙伝』p. 44.

できなかったのである。「私が異様に感じたのは、漱石山房の蔵書に、…歴史に関する本格的な書物が欠落していること、特にイギリスにおけるキリスト教の屈折の多い浸透を主題とした書物が、一冊も見当たらないことである。歴史的感覚のなかでキリスト教とイギリス文化に触れる―この作業を抜きにしては、英文学の *genius loci* の initiation を得ることを望めまい」[28]とかなり痛烈な評価を下している。

卒業論文　寿岳がブレイクに惹かれた大きな要因はブレイクの詩に仏教的な表現が強く見られたためであった。第 2 学年の頃に構想されていた卒業論文の題目は「ウィリヤム・ブレイクの思想に見出される華厳思想の用語」であった。仏教思想に依拠してブレイク詩を解釈しようとしたのである。最終的に佐藤清が審査した卒業論文は、「ウィリヤム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究」と題されていた。その内容は「第 1 章序説、第 2 章『ジェルーサレム』の生るゝまで、第 3 章『ジェルーサレム』の内容、第 4 章ブレイクの『想像』について」と章立てされている。

だが、当初の構想は大きく異なっていた。「大正 11 年の春頃には、私の心は人としてのブレイク、芸術家としてのブレイクを、彼の全生涯を通じて書きたい願いに燃えていた。彼が世に残した多くの絵画に就いても言うつもりであった。しかるにそれは限られたる卒業論文の内容としては余りに多くの紙数を要するのみならず、日日に多くの時間を夜学校の机の前に送って生活の資を得るべき境遇に置かれている私には到底みたされぬ望みであった」[29]と構想を変更せざるをえなかった事情を卒論冒頭で断っている。当初、寿岳がブレイクを全体像として把握しようとしたのは、柳宗悦の大著『ヰリヤム・ブレーク』に対抗しようとする気概があったにちがいない。

卒業論文の規模はいきおい縮小化されてしまったが、内容を深化させて欠を補うかのように、寿岳はブレイクの作品のもっとも難解な予言詩の解釈に挑んだ。「何の拘束もなく自由なる心のさまを歌い出でたるブレイクを読んでこれを讃むる人も、多くは彼の預言詩の前には眼を反すのがつねである。しかしながらこれは、果たしてブレイクを真に愛するものの取るべき途であろうか。深く彼の思想に探り入らんとするものの習うべき業であろうか。否、私はそう思わない」[30]と学問的態度を決然と表白している。卒業後、京都帝国大学文学部英文科へ進学して、変わらずに予言詩の研究を続行し、「ウィリアム・ブレイクの神話体系」と題する卒業論文を書きあげる。この論文は 3 回にわたり『英語青年』に掲載されるところとなった。

---

[28] 「漱石と英文学のつながり」『英語青年』（1966 年 7 月号）、p. 471.

[29] 寿岳文章「ウィリヤム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究」、p. 7.

[30] *Ibid.*, p. 8.　「畏怖すべき深遠な預言者の相貌を徐々に露にしたこと」こそ、寿岳のブレイク研究への貢献である。上杉文世「荒野の使徒を惜しむ」『すばる』（1992 年 4 月号）、p. 204.

ブレイク『大帝』(『ヨーロッパ』口絵)

ブレイクの臨終　卒業論文の最終部には仏教的な基盤にたちブレイクを解釈していこうとする寿岳の態度が鮮明に出ているので注目に値する。「こは華厳経不思議法品に説いて、『長劫を以て短劫に入れ、短劫を長劫に入れ、或は百千の大劫を一念と為し、或は一念を即ち百千の大劫となす』と言い、『一微塵の中に普く三世の一切諸佛の佛事を現ず』と言い、或は樗伽の無常品に、『其夜に正覚を成じてより、其夜に涅槃するに至るまで、この二の中間に於いて、我、すべて説く所なる』と言う隔法異成の認識である。ここに彼[ブレイク]の想像の最後があり、到着がある。芸術と宗教とを一つに結び、楽園と地獄とを婚姻の筵に招く相即無蓋の縁起がある。彼はこの境地に到り得た。千八百二十七年の夏八月十二日、恋人の如く彼の愛した『想像』の絵『天帝』に最後の筆をそめて、生と死の交響楽の中に、彼はあこがれの都ジェルーサレムを眼のあたりに見ながら、高らかにハレルヤを歌いつつ永遠の懐に抱かれて行った。その死を飾る法悦のよろこびは、伝記記者がいずれも聖者の死を叙する敬虔な筆を以て美しく描いている。」[31]むろんブレイクがこの絶筆に意図したことは、寿岳が説くほど単純ではない。ブレイクは創造に歓喜するだけではなく、同時に人間の堕落という悲惨を描いているからである。

ブレイクと信仰　寿岳のなかで仏教を根底としてブレイクを読解していくと、新しい宗教的な態度が生じてきた。それは仏教をもっとも尊しとすべし、またキリスト教が絶対的である、といった二者択一ではない。むしろ自らのなかで新しい信仰心を生んでいくものであった。たとえば、聖書を読むにしてもきわめて自己本位に読み込んでいった。「コリント人への手紙・第二に、『文字は殺し、御霊は生かす』とのパウロの有名な言葉がある。文字にとらわれた読み方をしていては、真理の生命を得ることはできない。文字の奥底にある精神を読みとらねばならない。『生かす御霊』によらず、『殺す文字』をたよりにしていては、折角のすぐれた経典も、かえってつまずきとなるであろう。よみ方が間違っていたために、経典の文句につまずき、経典を捨ててその宗教を捨てた人も多い。直感と想像にめぐまれたブレイクは、決してとらわれたよみ方をせず、自分自身の直観にたよって、知られる限りの聖書や経典を読んだ。その結果、『あらゆる宗教は一に帰す』との命題が生まれた。」[32]　これこそが寿岳がたどり着いた信仰であった。だから、関西学院に在学中、多くの教師から仏教からキリスト教への改宗を求められたのが最大の不満であった。「ただ私がにがにがしく思うのは、文学科に関する限り、ただ一人の先生を除いて日本人も外国人も、私にプロテスタント・

---

[31]　*Ibid.*, pp. 140-41.

[32]「読経隋筆」p. 15.

キリスト教への改宗をすすめたことである。仏教への真理をいつくしめばこそ寺を捨てた私が、キリスト教徒に改宗するためには、キリスト教の真理を、仏教のそれにまさるとするだけの強い理由がなければならない。私に改宗をすすめる宣教師たちは、当時の私の貧しい理解をもってしても、ほとんど仏教を知っていなかった。仏教を知らないのは、キリスト教を知らないのと真理の前では同意語ではないか。そのときも今も、私は自分をよい意味でのアグノスティックス(不可知論者)の一人だとする立場にむしろ純粋なよろこびを感ずる」[33]というように、真理の前にはすべてがひれ伏すのである。つまり誤解してはならないのだが、宗教の優越論ではないのである。

世界宗教への道　さらにこうした宗教的な対立をブレイクによって乗り越え、真の信仰とは何かを希求していこうとする。「将来の世界宗教を考える場合に、特に二つのことが注意されねばならぬ。一つは、キリスト教か仏教かのどちらかが、他に抹消すべきだとの思いあがりであり、他の一つはいかにもキリスト教と仏教とを一つに結びあわせたかによそおう浅薄な疑似宗教が実は本質的にキリスト教や仏教と何のつながりもないことである。･･･大切なのはそれぞれ正しい信仰をもつということであり、宗教は一つではない。獅子と牛とをひとつの法則で律するのは暴圧だとのブレイクの言葉は、信仰の場合、とくによくあてはまる」[34]という見解に見られるように、ブレイクは宗教的真を理解するうえで多大な影響をもった。

さらに寿岳は宗教的真を得るためには何が必要であるかを具体的に解説している。「[キリスト教徒]の欠点は今世紀に入ってから急速に進んだ比較宗教学の成果に耳を傾け、目をみはろうとせず、キリスト教のみを考えて、宗教そのものは考えなかったところにある。外国宣教師の質は今は幾分か向上しているけれども、まだまだ迷妄からさめていない者が多い。そういう状態がいつまでも続く原因の一つは、日本を例にとると、仏教を代表とする宗教界が殆ど全く生命を失っていて、キリスト教徒と出会う相互批判の場が欠けていたからだと私は考える。宗教はその性質上他の何ものよりも、共通の広場を持たねばならぬはずのものである」[35]という一節に見られるように、宗教的真に至るためには「共通の広場」という開かれた場が必要であった。つまり寿岳が展開したジャーナリズム活動はこうした精神的な支柱に支えられていたのである。こうした宗教観を寿岳自身がいみじくも要約してみせている――「宗教への傾斜は、年を重ねるにつれていよいよ強まってゆく。これからさき、私の一番やりたい仕事は、『世界の聖典』とでも名づける一冊の本を編み、仏教･キリスト教･ヒンヅー教･イスラム教などの経典から、知恵なる真理の言葉を摘録することである。人間が、個々の生命を全宇宙的な絶対者へ直接に結びつけ、それによって本当の意味での人間らしさを求めるようになってからおよそ二千五百年。地域や民族や言語の相違は、それぞれのいわゆる高次の宗教を持ってきたが、それらの宗教が伝承する聖典を虚心に読むと、差違よ

---

[33] 『わが心の自叙伝』p. 44.

[34] 寿岳文章「＜宗教＞　将来の世界宗教」『山陽新聞』（1956 年 11 月 29 日）

[35] 寿岳文章「私の信条」『新中外』第 7 号（中外製薬、1956 年 9 月 11 日）

りは相似の方が目立つ。いま人間は、分立よりも協和の方向へ志しているし、またそれが人類に課せられた大きな使命であろう」[36]と。この一文が発表されたのは、1967 年で清水寺が刊行している機関誌においてであった。寿岳が仏教界に何を発信しようとしていたかは自明である。

仏典の読み方　さらに仏典の奥義を理解すためには尋常な読み方ではとうていかなわないと説き、「原始仏教の経典は、歴史上の実在覚者としてのゴータマ自身の教説であるが、大乗の経典では、ゴータマ自身を内包する永遠の生命を教主として、時間や空間をつきぬけた巨視的な世界観が説かれる。法華経に例をとれば、久遠実成の仏、すなわち、永遠の昔から実存して、今も実存し、いつまでも実存するであろう仏が教主である。そして、仏陀の真精神を表現するために、詩、譬喩、象徴など、高度に文学的な手法が用いられている。小乗、すなわち型にはまった微視的な読み方をしては、とても永遠の生命に触れることはできない」[37]と文学的な読解の必要を強調する。そして、「法華経もそうであるが、大乗の経典はなべて文学的な構成をとり、特に戯曲の要素に富んでいる。吠舎離の富豪・維摩詰を主人公とした維摩経などは、在家も出家も、仏陀の悟りを得るのに何の先後もないとの真理を、脇役の文殊師私や、挿話の仏弟子たちを次々に登場させ、たくみにさばいてゆく上乗の喜劇である。華厳経に至っては、一即一切･一切即一の世界観を展開する壮大な宗教的叙事詩と言うべきであろう。私は世界文学に志したおかげで、何のこだわりもわだかまりもなく型破りの読経法を体得することができた。そして、みずみずしい宗教的精神をいつも燃焼させていたら、在俗の身であっても、あの維摩居士のように、仏の常恒説法の座につらなれるものと信じている」[38]とここまで読んでくれば自ずと『神曲』読解と重なってこよう。世界文学の読み方をもってこそ仏典理解に導かれるというのである。

II　戦中・戦後の態度

続いて戦時中の寿岳の動静を追っていこう。昭和 17 年 3 月 5 日から 8 日にかけて、『都新聞』に掲載された寿岳の「時局と英文学者」という一文は、戦時中の英文学者のひとつの態度を旗幟鮮明にした一文として注目を集め、大修館書店から出た『資料　日本英学史』第 2 巻『英語教育論争史』（1978）に再録された。

戦時中の英文学者　対英米との雲行が険悪になってきた昭和 16 年夏頃から、「お困りでしょうな」と英文学を専攻している寿岳に憐れみともつかない同情の声が寄せられるようになったという。「対米英戦争が酣（たけなわ）となった今日、英文学者などは身の置き所もなくなりかね」ず、「英語や英文学の研究をまるで敵性行為の一種であるように称える人があるとしたら、英文者にとって迷惑この上ない」と寿岳は皮層な見解を一蹴する――「英語や英文学をやれば英国くさくなるという考えはパンを食えば西洋くさくなると言う考えとあま

36　「読経隋筆」p. 14.

37　*Ibid.,* p. 16.

38　*Ibid.*

り変わらぬ。近頃では神主さんでもパンを食っている」と。英文学を専攻する真意は、「自国の歴史内容を少しでも豊富にしたい一念から」生じているのだと明言し、民芸運動への参加、向日庵本出版などの行動も、「その情熱がさせた」という。そして、最近数年間、自らの尽力を捧げてきた和紙の歴史研究について縷説する。

寿岳には「英語が習得に値する立派な言語であり、英文学の研究が日本をよりよくする役割を果す」という確固たる信念があり、揺らぐことはなかった。それは寿岳の外国文化、文学研究が自国である日本文化、文学の上に立脚したものであったからである。だからある外国文学研究者たちに対して、余りにも自国の文化に無関心、無知である傾向をいさめる――「マグナ・カルタの内容を知っていても神皇統記は読んだことがないとか、フロアサールの年代記は知っていても、歴代寶案は名さえ知らぬと言うのでは困る」と。「外国文学の研究者は、外交官以上に自国の文化に愛着と理解とを持つのが当然である」という寿岳の発言には、自らが立つ外国文学研究者としての自覚がうかがえよう。戦禍による文化の断絶は、外国の知人、研究者との交流を閉ざされ、学問の孤立をまねくが、寿岳はここで「杉田玄白の蘭学事始の苦心」を想起し、「玄白の苦心に比べたら、今のわが国の英文学者が蒙っている不便など、物の数にも入らぬだろう。少しはこのような目に逢うのも、物の有難さがわかっていいのだと、この頃の私は負惜しみでも何でもなくそう思っている」と自戒をこめて、現状を是認しようとする。

時局　そして、研究者として、「このような時局には、つとめて平常心に安住するのもまた文学者に負わされた責務ではあるまいか」と、およそ時流におもねることはない態度を表明する。これは寿岳の文学研究、強いては人生観の礎におかれる態度にほかならない。文学、とくに現代文学は「今」という一瞬を切り取るが、それがどんなに強烈な「今」であっても、「より高次な、より大きな歴史のなかに摂取されて、研究の対象である国民性や民族性の面の一部を構成」しているからにほかならない。例としてヴァージニア・ウルフの作品をあげ、「その作品の背後に暈をつくる複雑な国民性を、歴史的に把握することなのである」と解釈の要諦を示す。ここで「暈をつくる」という形容から寿岳がウルフの有名な文学論「現代小説」(1919) を踏まえていることを理解でき、今日のウルフ研究にも十分に耐えうる提言である。そして今日こそ英文学徒が「平素の腕によりをかけて、アングロサクソン民族の正体をつかむ絶好の機会」であり、この戦争がどんな影響を研究に与えるかなどは全く問題外である、と結論する。

そして最後に、これは後年の寿岳が何度も繰返す態度であるが、対象を見極めるには、「不易」と「流行」の二相のもとで観察しなくてはならないと強調し、文学作品を例にしてそれらの様相を明確に提示している――「ユリシーズは、ホメロスが原型を示して以来、ダンテも、テニスンも、ジェイムズ・ジョイスもこれをとりあげて、それぞれの時代の衣を着せた。その衣の生地や織目や色彩や仕立てや着こなし方をとりあげるのが流行の面において文学を見ることであるなら、何枚かの時代の衣を脱ぎ去ってホメロス以来の裸体のユリシーズを取り出すのが、不易の側からの文学の見方だ。英文学に現れた国民性にも流行と不易との二面があり、そのどちらを疎かに考えても英文学の完全な理解は成立たない。そして特に大

事なのはその不易の様相であろう」[39]と示唆する。こうした見解は、寿岳が T.S.エリオットの有名は論説「伝統と個人の才能」(1919) を熟読している傍証ともとれるが、同時に日本古典、とりわけ芭蕉に通じていることをも明らかにしている。

『紙漉村旅日記』　寿岳は高松宮家から有栖川宮記念学術奨学金を下賜され、日本に現存する手漉紙業地の歴史地理的研究に着手することになった。『紙漉村旅日記』を一読すると無計画に紙漉村に赴き、調査を断行したような印象を与えるが、きわめて周到な準備のもと、調査は施行されていたのである。

農林省農務局発行の『副業参考資料』(昭和 3 年 6 月) のなかに所収された手漉製紙に関する資料を精査し、現存する紙漉村をまず同定することにした。そうした作業のなかで、内閣統計局労働課長である水谷良一からの多大な尽力があった。水谷は民芸の会員であり『工藝』誌上で多くの和紙に関する論考を発表していたが、寿岳夫妻への支援も惜しまなかった。まず、寿岳は主要な手漉紙業地がある町村へ数百通の協力依頼の手紙をしたため、そこの　村長、組合長から紙漉きの現状を知らせてもらう依頼をした。だが、「もう紙を漉いていない」という返事が多々あった。つまり副業としての製紙は刻々と滅びつつあったのだ。寿岳のなかで調査を一刻も早く着手しなければならないあせりと苛立ちが募ってきた。

そこで陸地測量部の五万分の一の地形図で所在地を確認し、目的地に関する旅行案内を参照し、日程を決めていく。紙漉きは農閑期の副業であり、晩秋から早春への冬場に行われるのが一般的で調査期間も限定されていた。日本全国をいくつかのブロックに分け、寿岳の原案を二、三ヶ月前に水谷統計課長を通じて各府県の統計局へ依頼状を送り、宿舎、交通の便など現実に即した日程をつくりあげていく。統計局の協力はもとより、まだ地域社会が役所を中心として機能していたため調査の下準備に役人の助力が不可欠であった。

戦渦の影　『旅日記』には戦争の影が色濃くきざまれている。年若い出征兵士、傷痍軍人、戦死した英霊などが何度も言及されている。寿岳自身、特高から追尾をうけたことも何度かあった。舞鶴が軍港であるため綾部と舞鶴の中間にある黒谷村では写真撮影の許可が必要であり、撮影できても公表は不可能であった。ごく小部数部しか作製されなかった向日庵版『紙漉村旅日記』でさえ黒谷村の写真掲載はかなわなかったのである。ある意味で『旅日記』は戦争の日々をつづった記録でもあるのだ。『紙漉村旅日記』には、就寝するまえにその日のことを日記につけることが何度も言及されている。見聞してきた事柄、一日の出来事は必ずその日のうちに書きとめられた。これは観察してきたことを客観的に記録するための必須の作業であった。だから『旅日記』には記録のいちじるしい粗密の差がない。鉛筆で筆写されたノートの原記録は、ほぼそのままのかたちで本文になっている。[40]　幾日分をまとめて記録

取材ノート

[39] 寿岳文章「時局と英文学者」『都新聞』(1942 年 3 月 5 日、6 日、8 日)、「時局と英文学者」『資料日本英学史 2　英語教育論争史』(大修館、1978 年)、pp. 648-51.

[40] 寿岳文章・静子『紙漉村旅日記　取材記録ノート』[寿岳文庫資料]

し、公開を前提にした潤色もいとわなかった荷風の『断腸亭日乗』を、寿岳は記録文学として認めようとはしなかった。[41]

訪問していたが、『旅日記』には登場しない紙漉村もある。たとえば、寿岳は奥州白石の紙漉家を訪ねているが、「熱塩から日中へかけての途中で、ふと訪ねてみた何でもない紙漉農家の風景が、私には忘れられない」といった印象深い思い出だけが残されている。

寿岳がもっとも好んだ和紙は、富山県の八尾町奥にある野積谷で漉かれた紙であった。薬の包装紙、行商人が用いる薬売りの袋にその紙は用いられていた。だが製薬業の洋風化にともない和紙を用いた伝統はついえたであろうと寿岳はあきらめの境地になった。「にもかかわらず私は行きたいのである。一軒でもよい、亡霊でもよい、昔からの手法で、楮の白皮を雪にさらす風景にであえたら、私は満足する。だが私はすでに老いた。行ってみたいと思うばかりで、身をおこすことはむつかしかろう」[42]という嘆きのなかに、かつて探訪した紙漉村の光景が強くよみがえっていた。

『紙漉村旅日記』は戦争の足音をたえず聞きながらも、いささかも乱されない清明な記録の書である。そこには稀有なことが達成されていた。

仏教とキリスト教　向日庵本『日本におけるエマスン書誌』は戦争のために刊行の遅延を余儀なくされ戦後に出た。「エマスンと日本」ほど、寿岳の宗教観を示す一篇ははない。ラルフ・ウォード・エマスンはコンコードの哲人としてヴィクトリア朝英国では本国アメリカ以上に諸手をあげて歓迎されていた。明治期日本でも例外ではなく、牧界の先覚である植村正久、内村鑑三、また『国民之友』の主筆であった徳富蘇峰などがこぞってエスマンに心酔したが、ただ糟粕をなめたに過ぎないと寿岳は指摘する。エスマンを温床として文学活動を展開した北村透谷、国木田独歩にしても観念的な言辞の羅列ばかりで、その真髄をくみとれていないと退けられる。また、エマスンの東洋的側面に惹きつけられた網島梁川、岩野泡鳴、田中王堂などは「小乗的な無余涅槃をかえりみなかった」ためエスマンを理解できなかったと示唆する。表層的にはロマンチックであるが、中核はきわめて堅実な古典主義者であるエマソンの本質を把握できたのは、結局、服部他之助以外にないと寿岳は結論づける。翻れば服部以外の先人たちがなぜエスマンを理解できなかったのか。合わせて西洋文化の移入に関して寿岳はきわめて重要な指摘をする――「いわゆる西洋的なものをとりいれるさい、私たちの態度についての根本的な改訂を示唆する。それはかれらのうちに自己を見いだすことであってはならない。私たちのうちにないかれらを、見いだすことでなければならない」[43]と。西欧のキリスト教的基盤を夢々看過してはならないと寿岳は強調し、宗教を生活と結

---

[41] 「世評の高いのは永井荷風の日記だが、これは人に見せることを意図しており、そのソフィスティケーションが鼻につき、私は嫌いだ。荷風文学に帽子を脱いでいる限り、日本文学の体質改善は不可能であろう。」寿岳文章「日記」『越後タイムス』（1968 年 1 月 21 日）

[42] 寿岳文章「紙漉村旅日記回想」『民芸手帖』第 20 号（1960 年 1 月）、p. 9.

[43] 寿岳文章「エマソンと日本」『英文学の風土』（大修館、昭和 36 年）、p. 239.　Bunsho Jugaku, *A Bibliography of Ralph Waldo Emerson in Japan from 1878 to 1935* (Kyoto: The Sunward Press

びつけようとしないわれわれ日本人の習性は、仏教僧侶の怠慢、無気力が元凶であると厳しく批判する。仏教徒として立ち、キリスト教的信仰をうちに入れ西欧文化を理解しようとした寿岳の真骨頂がここにみられよう。

点字と平和活動　寿岳にとって、人との出会いにおいても関西学院は人生の分岐点となっている。同じクラスに属していた盲目の学生、岩橋武夫と妹、静子の出会いは、「愛こそ人生の燈火である」という深い認識を得たのである。それは人生の伴侶となる静子との結婚だけにはとどまらなかった。岩橋は不屈の精神で何事も肯定する愛盲福祉事業家であった。岩橋の没後、寿岳は遺志をつぎ、ヘレン・ケラーの通訳をする一方、点字を媒介として盲目者に視覚を与えようとした。「戦後間もなく、私の願いが聞きいれられ、各地の刑務所で、長期や無期の受刑者に点訳奉仕の作業を課してもよいこととなった。それは長い間私の胸の中で暖められていた夢の一つであったが、講演を頼まれて広島の刑務所へ行き、もと特攻隊員であった多くの無期受刑者から、点訳奉仕により初めて生きる尊さと喜びを知ったと告げられたとき、私は私で、夢のふくらみの快さを感じた」[44]と寿岳自ら述べているように、社会的な広がりを見せていったのである。

生きている点　やがて岩橋が立ち上げたライトハウスに点字図書館が完成した。「ライトハウスの中央図書館にある点字図書館では日本一大きな書庫を建てた。･･･この図書館に納められている図書のほとんどは六百三十名にのぼる点訳奉仕者の手で作られたもので、なかには大阪の刑務所の受刑者の奉仕になるものも沢山ふくまれています」と『朝日新聞』昭和32年10月11日付けの紙面には報じられている。この図書館の設立に尽力した寿岳は、「生きている点」という題目で点字図書の意義を韻文でつづった。

ライトハウスの図書館に贈られた一千冊の書物
十三万五千七百六十四頁
一頁を平均千二百点とすれば
点の数の合計は一億六千二百六十万一千二百有余
一億六千二百六十万一千二百有余
それは今ここで私と向いあっている人たちの
二十の手がこつこつと一つづつ並べつらなり
あたかも無窮から無窮へのような
長く長く続く胡麻つぶの行列
美しいものの形をいつでも見られる人の目には
およそ単調きわまる無意味の連続
ぎこちないざらざらの感触[45]

[向日庵], 1947), pp. xi-xix.

[44] 寿岳文章「ふくらむ夢」『近畿』（近畿電気通信局文書広報課、1972年3月1日）

[45] 寿岳文章「生きている点」『点訳の窓』（大阪ライトハウス、1956年7月1日）

あえて韻文のかたちで表現したのは、指先に触れる点字の触感をあえて訴えようとしたからである。さらに行文は、「友よ忘れるな/点は生きているのだ/そのつぶつぶが紙の上に残る限り生きているのだ/そして眼の見えぬ人の手が触れる日を待っている/暖かく呼びかけようと　いのちにみち溢れて待っている」と続き、点字はたんに記号ではなく、命ある存在であると認知している。「時間と場所を貫いて　指から胸へ/ひしひしと伝えるだろう」[46]という言葉こそ寿岳にはまさにもうひとつの文学のあり方であった。

III　平和をもとめて

寿岳は戦時中における自らの態度についてあまり発言は残してないが、戦争協力者ではなかったと断言している。「細かく自分の行動を振り返ってみますと、その当時の事情が許さなかったとはいえ、いまから考えれば、言わずもがなというふうなことも私自身の発言にあるんじゃあないか、ことに若い世代の私の娘あたりからは、あのときにはもうちょっと態度をはっきりさすべきではなかったかと言って責められますし、また私自身もそういうことの責任は感じるんですが、しかし配属将校ともの凄くやりあったり、気持の中で、戦争協力者で自分は断じてなかったということははっきり言えると思うんです。」[47]戦争は知識人がいかに対処したかの試金石になろうか。

柳宗悦　寿岳は自らが実践してきた活動において柳宗悦とは不即不離の関係にあった。軍人を親族に持ちながら徹底して軍人嫌いであった柳に終生かわらない友情を感じていた。関西学院高等部の学生であったころ、卒業論文の指導を仰ぐため柳にはじめて会ったが、寿岳はそれ以前に柳の宗教的哲学書『宗教とその真理』を熟読していた。文字通り「愛読書の随一」であったという。そこに説かれていた宗教とその真理のあり方は柳にとってのみならず、寿岳に対しても人生を切り拓いていく共通の問いかけが提示されていた。[48]　とりわけ柳は民芸運動を邁進していったが、同時に宗教的世界への探究も深めていった。だが、ある人はそうした柳の態度が横道にそれていると思い、そうした宗教的な追究に邁進しなければ民芸運動ははるかに深化したのではないかと疑問視する声があった。しかしながら、寿岳はそうした見方を断固として退けている。むしろ、それはまったく逆であり、柳に宗教的な真を求めるという核があったからこそ民芸運動は存続したのであったと考えた。つまり柳は宗教的真理を探究しつつ庶民の暮らしのなかに美しさや、正しさを探求したと寿岳は結論づけるのである。だから、閉鎖的で偏向したものの見方しかしない、ある宗派が他の宗派を否定するといった宗教的な優劣観を、寿岳は終生にわたり厳しく断罪した。

民芸運動と平和　寿岳は民芸運動と平和という問題を論じているが、美と平和という問題にも還元できよう。「そこで私はいいたい。民芸運動は、それを支える堅固な土台として、平和を守りぬく強い信念に徹しなくては、本物にならないのではないかと。日本が再軍備を

---

[46] *Ibid.*　「点字で役に立ちたい」『中国新聞』（昭和 33 年 5 月 19 日）

[47] 寿岳文章「柳宗悦を語る」『柳宗悦と共に』（集英社、昭和 55 年），pp. 231-32.

[48] 寿岳文章「宗悦・柳さんのおもかげ」『柳宗悦と共に』pp. 249-50.

始めても、それは一向苦にならないで、いわゆる民芸品をせっせと集める人。戦争を必要悪だと認め民芸品の蒐集に何の矛盾も感じない人。そういう人は、徹底した民芸運動には無縁であるばかりでなく、民芸の理念を混乱にみちびく実証者の役目さえはたすことになるだろう」というように、寿岳には戦争否定を無視した美などありえなかった。だから、「さらに一歩進めていえば、民芸品の美しさはわからなくても、全身全霊を平和の確立にささげている人があれば、私はその人を、民芸品の美しさはわかっても、平和の確立に無関心な人よりも、はるかに高く評価し、はるかに深く尊敬する」[49]と寿岳にとって平和を希求しない人間は最下位に置かれるのである。

文化と平和 文化と平和という問題についても寿岳は平和を前提とせずには考えることができないと指摘している。「日本各地の文化財が守られる第一条件は、平和憲法のゆるぎなき施行だと私は考える。万が一にも再び日本が武装し、戦力をもち、戦争の渦中にまきこまれるような事態がおこったら、文化財などあっというまに吹き飛ばされてしまう。･･･戦争は絶対に文化財の敵であることを忘れない。これが文化財を守る最初にして最大の心構えであろう」[50]といった寿岳の平和主義は自らの書物論にも通底している。

寿岳の平和論はむろん痛烈な戦争体験から発していた。「(軍国主義を教育の中心とする)結果が、どんなに恐ろしく、悲惨なものであったかを、たとえ戦争体験者の大半がけろりと忘れてしまおうとも、また必ずしもあやまちではなかったなどと、おろかな強弁をくり帰そうとも、私は忘れない。絶対に忘れない」[51]と強く主張するのであった。

そして、「過去八十年間に、戦争のむごさ、醜悪さをこの目で見てきた私は、戦争とそれに関連するすべてのものを、徹底的に憎み、糾弾し、告発する」[52]といった戦争への糾弾が戦後のジャーナリズムに対して寿岳が接した基本的な態度であった。

民間外交 向日庵本『絵本どんきほうて』を契機にして寿岳は終生にわたりカール・T・ケラーと交渉を続けた。その交誼は往復書簡となって向日庵資料として保存されているが、ひとつの友情が文化を形成していく過程をつぶさに示唆している。「…彼［カール・T・ケラー］から私への書簡数百通は私の手もとにある。世界的に有名な彼の『ドン・キホーテ蒐集』は、死後ハーバード大学へ寄贈されたが、中でも異彩を放つと記録されているその日本部のどこかに、彼への私の書簡数百通も保全されているなら、両者[ケラー=寿岳往復書簡]の公開によって、真の文化交流は、戦いを越え、戦いを否定してはじめて可能な事実を明確にすると私は思う」[53]と戦争を否定してこそ文化は存続すると明言する。

ヒロシマ 壮絶な惨禍がきざまれた広島は寿岳にとって忘却に追い込んではならない地で

---

[49] 寿岳文章「私の民芸教室」『柳宗悦と共に』p. 88.

[50] 寿岳文章「文化財を守るには」『鑑賞』第 4 号（新潟文化財鑑賞会、1967 年 4 月 1 日）

[51] 寿岳文章「『いのちあるものを殺すな』という黄金律の徹底」『総合教育技術』第 26 巻，第 11 号(1972 年 2 月 1 日)

[52] 寿岳文章「人類の英知」（山陰新聞[1981 年 1 月 7 日]）

[53] 寿岳文章「向日庵本の思い出」『別冊太陽 本の美』第 53 号（平凡社、1986 年）、p. 13.

あった。千里丘で開催された万博の日本館から原爆の遺品が撤去されるという事件が起きた。「人類の混乱と退歩を示すおろかなショーにすぎない万国博に、私が足を向けない最大の理由も、太陽の塔と称するものよりもっと大きく強烈に掲げられねばならないヒロシマ被爆の厳粛な事実が、日本館の展示から故意に骨抜きされたことに求められる。ヒロシマの地から土くれや石塊の一つ一つは、今もなお声をあげて泣き叫んでいるのではないか。…戦後、私はイギリスの詩人エドマンド・ブランデンやエンライトの、広島鎮魂賦を訳しまた何回か広島を訪れ、大原さん始め『広島通信』の同人のかたがたにも会った。然し一番わすれられないのは、一夜を広島刑務所に宿り、受刑者の全部に講話をし、とりわけ私の主唱で点訳奉仕にはげむようになった十名あまりの無期または死刑確定の若い青年たちと、親しく語りあった思い出である。この青年たちのほとんど全部は、かつての特攻隊員であり、敗戦時の心身の混乱から、想像される限りのありとあらゆる重罪を犯していた。獄舎に生きているとすれば、もう頭髪に白をまじえる中年者となっていよう。この人たちも、原爆とは別な形での戦争犠牲者なのだ。広島への私の思いは深い。1970・4・15」[54]という発言に見られるように、寿岳にとって、広島は戦争の刻印が重層化されている地であった。

ダンテ　敗戦後、ちょうど 1 年が経つ頃、寿岳は戦争に何ら反省もない無節操なジャーナリストに対して憤りを抑えがたかった。ここで批判のなかでダンテを強く喚起しているのは注目に値しよう。「『愛別と公憤と』の一文を送ってから満七年。あの中で私が憂慮したことはまさに現実となり、無欠と称せられてきた金甌は互全することさえできずにもろくも壊れ去りました。絶対とか永遠とかいふ美辞麗句は思いあがった日本国家至上主義者の頭の中でのみ通用する不渡手形であったことを今にして悟っても後の祭りなのです。…書いてゆけば数限りもありませんが、私のもっとも不愉快に思うことは、支那事変以来いい加減に軍部のお先棒をかついだ出たらめな無節操なジャーナリストが、いまだに図々しく物を書いたり座談会に出たりしているのに、日本人はにやにや笑うだけで、これを看過している不可思議な光景です。獅子身中の虫とは、彼らの如き俗物をこそ言うのでしょう。もしダンテが日本の悲劇をもその神に入れたと仮定したら彼らをどんな地獄に追い下しただろうかと時折私は神曲のあちこちを物色しているのです。ダンテで思い出しましたが日本には峻烈な批判の精神が恐ろしく欠けていますね。にやにやと笑ってすませる日本人の態度ほど不愉快なものはないと、よく西洋人は申します。…私の住むこの小さな向日町にも、戦争から敗戦一年の今日にかけて、小は小なりに、日本の縮図のような馬鹿げた過程が、町長だの何々会役員だのを中心にくりひろげられてゆきましたが、そんなことを真顔して書き立ててみる暇も興味も今の私にはありません。十年の空白を一刻も早く充たして、良識に目覚めた日本を見たいと思うのです。(8 月 15 日)」[55]と主張しているが、寿岳自身は戦後いかに生き抜いていったのであろうか。

---

[54] 寿岳文章「私とヒロシマ―二十年の年輪を重ねた『広島通信』に寄せる」『広島通信』第 20 号（『広島通信』の会、1970 年 4 月 15 日）

[55] 寿岳文章「終戦一年」『越後タイムス』（1946 年 8 月 25 日）

凡聖不二　戦争を忌避する態度を根底において、戦後の寿岳は文化活動を邁進していった。それは専門的な知に閉塞することをよしとせず、自らの全人的な英知を傾注した活動になっていったのである。「私は芸術家のジャンルには属せず、文学や工芸など、広い意味で美がかかわ る諸般の現象を「美しく生きる」のに必要な条件として作業を続けてきた一凡人である。し かし私は従がっている作業に意義を見いだしたら、それに全力を投下せずにはおれない。滅亡の危機にある和紙の現状を見ると、それをよみがえらせるために、歴史的な研究の領域に閉じこもるだけでは腹の虫が治まらず、その復興運動にも積極的に乗り出してゆく。書物にしても目まぐるしく現代の先端工業の影響の犠牲になりつつある姿を見ては、「書物とはどうあるのが美しいか」の問題と四つにとりくみ、いわばその帰正運動に情熱を注がずにはおられない。従って私には、何が専門で、何が余技かなどという問題は全く存在しない。価値ありと認めた仕事には、すべて全く同質同量の意欲をそそぐからである。ダンテの『神曲』翻訳へと私を駆り立てたのも、全く同じ動機からである。彼はいったい何が専攻なのか。これほど私にむなしく響く問いはない。それは、誰でも全力投球すればその領域の専門家になれるからである。」[56] 畢生の訳業になった『神曲』翻訳もこのような全人格をささげる態度に支えられていたのである。

だから寿岳が成しとげた多様な仕事はその人生観、というより正確にいえば、まがうことなき宗教的真理への探究から生まれてきたのであった。

自己を生かす燃料　「私は紙の研究だけを専門とする者ではないのだ。英文学へも書誌学へも情熱をささげてきたし、今もささげている。また行動よりも存在を、ある意味では重要と思う私にとって、どうあるか、どう生きるかの問題は、いつも念頭をはなれない。文学、美術、工芸、これらすべての問題とからみあって、私の生活内容となる。社会協同体の一員であってみれば政治や経済への強い関心なしにその日その日はすごせないし、世の中をみにくくする事件がおこればむしょうに腹も立つ。ことに宗教的真理へのあこがれは、日ましにはげしくなってゆく。私は生まれつき欲が深いのであろうか。ひそかに反省して、自分でうれしく思うのは、私の場合、あらゆる情熱、思慕、研究が決して孤立してはおらず、密接につながり、全人的に私を推進してくれることだ。ことし一年も紙を科学することに私のエネルギーは少なからず費やされるだろうが、その消費は、私を生かす重要な燃料だと思っている。」[57]これはきわめて重要な見解である。「あらゆる情熱、思慕、研究が決して孤立してはおらず、密接につながり、全人的に私を推進してくれることだ」という言葉こそ、人格と仕事が不可欠な関係を証しているからである。

一事専念　寿岳は全力を傾注してひとつの目的に向っていく重要性を何度も説いているが、その成果がもっとも十全としたかたちで開花したのは、晩年に挑んだダンテ『神曲』の翻訳であった。それは病床のなかでも中断されることなく継続され超人的な持久力により成し

---

[56] 寿岳文章「私を育てたひとこと―凡聖不二」『月刊教育の森』第 6 巻 12 号（毎日新聞社、1981 年 12 月 1 日）、p. 21.

[57] 寿岳文章「和紙を科学する仕事」『読売新聞』（1965 年 1 月 9 日）

遂げられたのである。「一事専念といえば、私もこの七年間、ダンテの『神曲』完訳にわきめもふらず精進してきた。それがやっとできあがり、私なりにいま感慨無量である。質も量も世界文学の最高峰であるこの作品に、欠陥老残の七十歳台となってよじ登り、美しい日本語へ精魂こめて山容の全部をくまなくうつしとる作業は、不可能に近いのではないかとあやぶまれた。事実、イタリア以外の西欧の著名なダンテ学者で、私と同じ試みの途中、志業の完成を見ずに斃れた人も一、二にとどまらない。それを思うと、病体ながらこの難事業にともかくも耐えきれたわが身の幸運に感謝するが、しかし余事はできるだけ切りすて、ただこの一事にのみ専念してきたことが、今日この喜びを自嘗できる最大の要因であったに違いない。『百里を行く者は九十九里を以て半ばとする』との戒めをつねに忘れず、第百歌の最後の一行を訳了するまで、寸善尺魔の世に住む者として、一刻も私は気をゆるさなかった」[58]という。まさに徹頭徹尾、努力の人であった。

結びにかえて　非戦の誓い

仏教徒であり東京大学教授であった花山信勝は、戦犯が収監されている巣鴨拘置所に出入りを許された唯一の日本人教誨師であった。その著書『平和の発見』(朝日新聞社、1949) の読後感として発表された寿岳の社会時評「平和は見出されたか」は、仏教がいかに平和を実現する上で必要かといった、寿岳の姿勢が具体的に説かれた重要な論考である。

戦争と仏教　みずから進んで教誨師を志願した花山の態度を尊いとしながらも、『平和の発見』は「文化の基盤としての宗教の社会性からずれてしまっている日本仏教の盲点を、自覚していない」ゆえに、寿岳にはあきたらなかった。花山によれば、巣鴨の受刑者は、「個性もない平等の平和を発見して、きわめて心ゆたかに、安らかに生涯を終え」、さらに「受刑者の到達した高い境地は、無言の光となってその家族たちをうち」、処刑された人々の家庭に、「以前には見られなかった感謝と平和の生活が営まれている」と結論づけられる。「有限な人生の対立抗争を超えた彼岸に存在する光明無量、寿命無量の無碍の世界の風光」という、花山の浄土真宗的な言辞に理解を示しつつも、寿岳は「こうした平和への意志のみが、･･･万世の太平をひらき、世界の永世平和への道をひらくであろうか」と、祈念や想念のみに平和をたくす態度に多大なる疑念を覚えずにはいられなかった。

再び戦争が起きようとしている今 (1949 年)、寿岳は「平和への意志は、何よりも強烈に表現されねばならない時期」であるとして、花山のいう「個人の救霊が、そのまま社会連帯性のたくましい基盤となって」、はたして戦争を阻止できるのか、と疑問をつきつける。

寿岳には仏教界がこぞって戦争を正当化し、戦争協力に加担した事実に対する強い反省がないのが不満であった。だから、「戦争や対立は有限なこの世の常であって、それを越えた光明無量の世界から見れば、勝つも負けるも、戦うも和するも、どちらでもたいした変わりはない」というような一般の仏教者の間に広がっている安易な傾向を寿岳は強く排する。

まず寿岳は「個人の平和が、社会の平和となる前には、花山博士の論理に現れていない多

[58] 寿岳文章「一事専念の功徳」『柳宗悦と共に』pp. 202-3.

種多様の難問題を解決せねばならぬ事実」を心しずかに反省せねばならない、と提言する。「私は日本仏教研究の一学究であって、何らの政治的立場をもつものではない」というような「高踏的な立場」にとどまらず、仏教者こそが政治的、社会的、経済的立場を旗幟鮮明にしなくてはならない、と寿岳は主張する。さらに相変わらず仏教界に蔓延する旧弊こそが社会正義を破り、平和への歩みを妨げているのでないかと、寿岳は指弾する。[59]

知識人の職能　戦後、寿岳は自らの職能を文化人、知識人と任じていたようだ。では知識人のあるべき姿をどのように想定し、何を見すえていたのであろうか。知識人の在り方を問うている――「何よりも大切なのは歴史的事実の観察と分析において真の知識人の眼は、あくまでも公正誠実であらねばならない。これを踏み外せば、必ずしも行動人ではあり得ない知識人は、その聖職者的権利を喪失してしまうであろう。そして彼がその機能を停止したとき、一体誰が真実なるものの守り手となるのだ」[60]と知識人の職能を説いている。

そして知識人にとって不可欠なものは強靭な理性であると寿岳は強調する。「知識人を支える背骨は、冷静な批判精神を培養土とし、ただ真実だけを追い求めるたくましい理性である。右にせよ左にせよ、ゆがみがあってはならない」[61]と何よりも理性を優勢させる。戦後、とくに 1950 年代から 70 年代にかけて展開された寿岳のジャーナリズム活動はこの理性に支えられていた。『神曲』の翻訳を短歌誌『コスモス』に掲載していた 1970 年、寿岳は年間 100 篇以上の記事を物している。9 月 28 日付の『毎日新聞』に「英語が多すぎる」という、日本語への英語の「浸透」を論じた寿岳の一文は、たちどころにロンドンの『タイムズ』紙が注目し、即座に新たなコメントを求めてくるほどの論客になっていたのである。[62]

英文学徒の手紙　無名の英文学徒が寿岳にしたためた書簡は、1960 年代から 70 年代にかけてジャーナリズムのなかで活動していた寿岳がどのように受けとめられ、評価されていたかを如実に示している。「拝啓　[昭和 39 年 12 月]　9 日、10 日の両夜[午後 11 時 30 分より]、NHK[第 1 放送]夜の随想[京のすすはらい]を拝聴し、御便り[12 月 11 日付]をしたくなりました。英文学者としての先生の御専攻の御業績は余りにも高く、ただ仰ぎみるばかりですが、折にふれて書かれる随筆、偶感を目にふれる限り愛読し尊敬しております。古い伝統、エトス、秩序に対する希求とともに、身近な事物への愛着を通して、新しいものを発見して行こうとされる精神の躍動が底に流れている先生の文、そして生き方自体をじつに尊く感じております。両夜のお言葉にも、粛然と襟を正さずには聴けぬような厳しさと、なつかしさを感じました。私事にわたりますが、私は四年ばかり前、大学を出たばかりで NHK 京都局に在勤し、大遠忌についての録音をいただきに向日町の先生のお宅に伺ったことがございます。録音が終りましてから、静かな応接間で、先生のお話を伺わせていただき、心がすみわたってくるように思いました。当時は安保闘争がはげしい時代で新聞はこぞって

---

[59] 寿岳文章「社会時評　平和は見出されたか」『ニューエイヂ』(毎日新聞社、1949 年 6 月 1 日)

[60] 寿岳文章「知識人の職責」『甲南大学新聞』(1953 年 11 月 21 日)

[61] 寿岳文章「知識人の限界」『産経新聞』(1957 年 5 月 3 日)

[62] Michael Hornsby's letter to Professor Jugaku dated on October 5, 1970 [向日庵資料]

右傾化になだれ込んでいく中で、先生が京都新聞に載せられる文章[夕刊「時のことば」(5月 20 日、仏教の政治感覚)]だけは私を非常に感動させました。身近な問題を取り上げつつ、語られる政治、権力者批判の鋭さは、それまでブレイク研究に造詣深い、学問と美の使徒という、先生に対する私の見解を修正し、勇気のある、どこまでも筋の通った方という印象を加え、ますます敬愛の念を深めました。そういう先生の生き方は先生自ら生み出されたもので、主にモリスなどから学ばれたものかとも思われます。その後、私は NHK をやめ、東大英文大学院に入りました。来春には修了し、幸い都内の大学に就職が内定しております。英文学徒として、この一筋につらなるにあたりまして、先生のような方を先達として、はるかに仰ぎみつつ進む光栄を身に沁みて感じております。折しもこの放送を伺い、お礼を申し上げたく筆を執った次第でございます。失礼をおゆるし下さい。京都の冬は一入寒いことと存じます。ご自愛くださいますようお祈りします」[63]とこの英文学徒は自らの人生を切り拓いていくときの導師として寿岳を仰ぎ見ている。「身近な問題を取り上げつつ、語られる政治、権力者批判の鋭さ」こそ、市井から発される寿岳の鋭い声であった。では、寿岳の発言を具体的に追ってみたい。

僧侶と戦争　手紙に言及されている京都新聞の記事は、仏教徒が核武装に対して積極的に異を唱えないことへの苛立ちを表明したものであった。「戦後間もないころ、あなたに申し上げたように、こんどの敗戦を契機として、いかに鈍感な僧侶といえども、戦争への道にだけはわかれを告げ、新しい教育者たちと共に、平和の地ならしのはたらき手になってくれるだろうと、ひそかな期待を寄せていました。事実、核武装反対のための熱心な運動をおこしている少数の僧侶もいます。しかしかれらの大多数は、敗戦を契機とはしませんでした。『平和であるのにこしたことはないが、現実がそれを許さない以上、相当の武備をもつことこそ大乗仏教にふさわしい処置であろう』仏教の各宗派が出している定期刊行物には、こうした論旨さえまれではありません。あなたがたクェーカーの信仰をもつ人には想像もされないこの心情を除去するにはどうすればよいか、それは私からあなたに聞きたいところです」[64]と、イギリス人のクェーカー教徒である友人ロンズデールを想定し述べている。

衰えぬ意志　1980 年代に晩年をむかえた寿岳は自らが実践してきた平和を希求する声が身近なところからあがってこない現状に大いに不満を感じていた。「満 84 歳を迎えて、もの心がついてから英文学を自分の主な専攻題目にしようと決心してからの長い年月を振り返ってみて、現在のわたしより年少の、しかも英文学界で活躍しているような働き盛りの人々をみても、たとえばトマホークもいい例だけど、核というものに対して、どこまでも回避して、そういう核兵器が実際の場面にちょっとでも使われてはならないという決意を、ただ言葉だけでなしに実行に移すという気迫ないし見識をはっきりさせている人は皆無とはいわ

---

[63] 寿岳文章宛書簡（1964 年 12 月 11 日）[個人コレクション]

[64] 寿岳文章「〈時のことば〉仏僧の政治感覚―クェーカーである一英人の質問に答えて」『京都新聞』（昭和 35 年 5 月 20 日）、寿岳文章・章子『父と娘の歳月』（人文書院、1988）、pp. 118-19.

ないが、非常に少ない」[65]と学問だけに閉じこもり現状を甘受するだけの風潮を嘆きながらも、「反戦平和を貫かなければならない態度」を何度も強調している。

非戦の誓い　ドイツ文学者山下肇と「あの 15 年戦争」をめぐって対談した寿岳は、なによりも悔悟しているのは、「今も私が何よりつらく思うのは、教え子を戦争へ送り出さねばならなかったことです」といった学生の犠牲であった。よって、戦禍を忘却しないように、「あの戦争のとき、何をしていたか―私たちが一生忘れてはならんこと、語り継いでいくべきことだと思っています」といった覚悟を表明し、戦争を促がすような法を絶対に許してはならないとした。「私は戦前の治安維持法の犠牲になったおびただしい人々を知っています。それだけに国家機密法を押し通そうとする日本のただならぬ状況について、できるものなら、町や村々を一人でも多くの人に訴えて行きたい心境です。いまの私はほとんど歩くこともできないのですが、いざりの怒れる竜にでもなったつもりでね。のぼり旗を持ってでも、これがいかに悪法であるかをいい続けたいです」[66]――軍国化に憤るあまりいささか時代がかった言葉も混じるが、寿岳がこれほど感情をむき出しにするのは稀である。

信仰と墓　寿岳文章は、夫婦で話し合い京都東山南禅寺境内の一隅に生前から墓所を定めていた。親交のあった南禅寺の柴山全慶師が、仲の良かった友達は死んでからも一所へ集ろうではないかと誘った一言が機縁となったという。墓石はかたい質素な自然石をえらび、その表には夫妻の名前だけを彫り、裏には没年を西暦で記すことにした。つまりこの世に生きた証しとして墓石を立てるわけだが、そこで寿岳はあえて元号を避けてキリスト教暦を選択した。それは、日本人であると同時に世界人でありたいと願う意図から発していたのである。

1981 年 6 月 27 日、妻静子が逝去した。葬儀は行わなかったが、寿岳家には弔問客がたえなかった。ただ、故人の宗派がキリスト教か仏教かわからず弔問客を大いに戸惑わせた。一方的にキリスト教徒と想像してきた人も多かったという。だがこうした仏教徒かキリスト教徒かいずれの宗派に属するのか分からないという事態をまねいたことは、むしろ寿岳としては本懐であった。なぜならば両宗教にたいして、まったく偏見のない態度でその真理性を知ることのみにつとめてきたのであったから。寿岳は、弔問客のこうした当惑こそ自らの生き方が誤っていなかったという証左にほかならない、と心から喜んだ。

---

[65] 寿岳文章・山下肇「戦前のこと、文学のこと、そしていま…真実の情報を知らされないことの恐ろしさ」『赤旗』（1987 年 2 月 3 日）

[66] 「戦前のこと、文学のこと、そしていま…黙視できぬ国機法の危機」『赤旗』（1987 年 2 月 6 日）

壽岳文章とウィリアム・モリス

川端 康雄（日本女子大学文学部英文科教授）

もう 16 年前のことになるが、2005 年にロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館で「インターナショナル・アーツ・アンド・クラフツ」展と題する特別展が開かれた。たまたま私は 7 月 7 日のロンドン同時多発テロ事件の直後に見学したものだから、そのときの市内の騒然とした状況が附随的に脳裏に浮かんでくるのだけれども、展覧会自体はたいへんに意欲的で充実したものであった。ウィリアム・モリスの実践を主たる影響源として 1880 年代以降イギリスで展開されたアーツ・アンド・クラフツ運動を一国のデザイン史に限定せず、それが国外にどう展開されていったかに注目し、アメリカ、ヨーロッパに加え、日本の民藝運動に独立したセクションを設けて、柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司といった人びとに光をあてていた。

これを民藝運動の担い手が見たら、イギリス起源の運動の派生物であるかのようなデザイン史観に異議を唱えたかもしれないが、工芸運動を国際的に捉えようとする視点は重要で、そこで民藝運動の作例が展示されたことには大いに意義があると思った。ただし、いまふりかえってみると、同展の「日本におけるアーツ・アンド・クラフツ」（第 4 部）セクションで、出品物にも図録にも壽岳文章の名前はいっさい出ていなかった。スペース上の制約ということがあるにせよ、この遺漏は国際的に壽岳の仕事がほとんど顧みられていないという事実を間接的に証すものと思われた。逆に言うと、民藝運動はもとより、日本におけるモリス受容に果たした壽岳の貢献、そしてモリスの書物道を範としての向日庵本の制作という、両面の仕事を国際的に再評価する余地が大いに残されているということであろう。それは私自身の課題でもあることを自戒の念を込めて言っておかねばならない。モリスを研究対象の主要な柱にしている私にとって、日本におけるモリス研究の先人たちの仕事に関心があるのは当然で、本間久雄、大槻憲二、小野二郎といった学者について論じたり発表したりしたものの、壽岳については――とりわけモリスと書物というテーマでは大いに学恩を蒙っているのにもかかわらず――多少拙論で言及することはしても、しっかりと取り組めてはいなかった。

その学恩ということで若干例を挙げるなら、私が最初に公的な場で発表したモリス論（「タピストリの詩人」『英語青年』1990 年 11 月）は壽岳の論考「ケルムスコット・プレス」（『英米文学史講座 9 十九世紀Ⅲ』研究社、1961 年、所収）を援用することで書きだしていた。20 世紀のモダニズム文学の興隆とともに詩人モリスの評価は下落し、1960 年代初頭はまだ本格的な再評価も始まっていない時期であったのだが、モリス商会で制作した室内装飾品に寄せた詩にむしろモリスの真価が発揮されていると壽岳は見る。モリスは「布を

織り、草を染めるように、ステインド・グラスを焼き付け、煉瓦をつみあげるようにして詩をつくった」のであること、「工芸的な立場からモリスの詩を読みなおすと、感銘もまた別のものとなる」こと、「これは詩人モリスに近づく重要な参道の一つであろう」という指摘は私にはたいへん示唆的であった。工芸家としてのモリスと詩人モリスを別個のものせず、その全体性においてとらえる（そしてそこには社会主義運動、古建築保護運動の活動家としてのモリスもふくめる）、そのようなアプローチを私は直接的には小野二郎から、また書物をとおして寿岳から学んだのだと思う。

それから、モリスの書物論をまとめた『理想の書物』（ウィリアム・S・ピータースン編、晶文社、1992 年、ちくま学芸文庫版、2002 年）の翻訳でも壽岳の仕事は支えとなった。「ケルムスコット・プレス設立趣意書」（1895 年）については、壽岳自身の全訳が論文「書物工藝家としてのモリス」（『モリス記念論集』川瀬日進堂書店、1934 年、所収）に引かれているのだが、新訳を作る際、とくに紙の製造工程や細部の名称についてはさすがに和紙の研究の第一人者だけに訳語を決めるのに大いに頼った。「紙の材料は全部リネンを使い･･･礬水（どうさ）が充分に引かれているものでなければならない」の「礬水」、また紙は「織目型」でなく「簀目型」でなければならぬというくだりも、壽岳の訳語を踏襲したのみならず、訳注でそれらの語についての壽岳の詳細な説明を引用したのだった。

私にとって、モリスを訳したり論じたりするのにはかなりの緊張をともなう。壽岳、小野ら先人の仕事が折りにふれて脳裏に浮かぶからである。1900 年生まれの壽岳と 1929 年生まれの小野では一世代分の年齢差があるが、1970 年代にモリス研究を進めて 1979 年に『装飾芸術――ウィリアム・モリスとその周辺』（青土社）を上梓した小野を壽岳は面識がないものの高く買い、同書の贈呈を受けての礼状で賛辞を送り、モリス研究という「後事を託する」のに最適の人が現れたと喜んだのもつかのま、小野は 1982 年に 52 歳の若さで急逝し、壽岳を大いに悲しませた。翌 83 年に晶文社から非売品で出た追悼集『大きな顔――小野二郎の人と仕事』に寄せた追悼文「小野二郎君の思い出――逢わで別れしくやしさ」のなかで、壽岳は「その急逝がとりわけて惜しまれる故人への手向けの花一輪」として、「私がなぜ小野君に、モリスとの関連で後事を託そうと思い定めたかを語っておこう」と断って、「名をあげることはひかえるが、東京に住み、日本の代表的な書物通と自認し、何かと言えばモリスを口にするのみならず、モリスの文体や本質をまるでわきまえもしないで、軽々しくモリスの金玉の文字を翻訳したりする人物がいる」と書いている。その人物がもし『装飾芸術』所収の論文を読んでいたのであれば、「モリスを正しく理解するためにはどのような心くばりが必要かがわかり、その心くばりもなしに、結果はモリスを冒瀆するに等しい歯のうくようなモリス論を書き散らしてきた自分への、慚愧の念に耐えられないはずである」と壽岳は難ずる。「しかし彼の今までの言行から見て、そうした自責や反省を彼に期待するのは、百年河清を俟つに等しいかも知れぬ。それに、彼の亜流は、軽薄なジャーナリズムの尻馬に乗って、近時、蠢動どころか、跋扈し始めた徴候がある」と手厳しい。こうしたなかで、モリス研究の担い手として、「重厚で周到」な学風をもつ小野に（「桃李もの言わねど下おのずから蹊をつくる」新進気鋭のモリス学徒として）大きな期待を寄せていたというのである。

当時これを読んだ読者の多くは、ここで名をあげずに壽岳が非難した相手が庄司淺水（1903-91）であるのを容易に理解したことであろう。私はといえば、当時大学院生であったのだが、庄司の本はろくに読んでおらず、壽岳の激烈な糾弾口調がピンと来なかったことを覚えている。だがその後モリス研究を進め、1990 年代の初めに前述の『理想の書物』の翻訳作業に当たっていたときに庄司自身によるモリスの翻訳を見る機会があって、そこで初めて壽岳の言わんとしたことが理解できた。もっと具体的に書くと、庄司は 1951 年にウィリアム・モリス『理想の書物』の翻訳を細川書店から刊行している。収録内容はモリスの「理想の書物」「印刷について」「ケルムスコット・プレス設立の趣旨」の 3 本の翻訳で、最後に庄司自身の長文のエッセイ「造本家ウィリアム・モリス」を「あとがきに代えて」として収録している。私の所蔵している普及版は四六判で「本文に上質紙 B 判八拾斤を用い、布背、紙装、上製本四百拾部」の一冊、特製本 90 部は「本文の雁皮紙を用い、口繪（關野準一郎刻のエッチング）」をふくみ「皮背、クロース装」であると巻末に説明書きがある。普及版でもケルムスコット・プレス本の表紙でよく使われた青い厚紙で背にリネンを貼った「クォーター・ホランド装」を想起させる装幀自体は好ましく思えるものであるのだが、中身はどうか。

壽岳はこの訳本の書評を『日本読書新聞』1951 年 5 月 30 日号（第 595 号）に寄稿している。これは書物にかかわる一文でありながら『壽岳文章書物論集成』（沖積舎、1989 年）に収録されていない。なので（500 字にも満たない短文でもあるので）ひとつの文献資料として、ここでその全文を引用しておいても無駄ではないだろう。

名を口にするだけで一向に実を取ろうとしないわが国通有の悪弊が、書物文化の面でもまた、今日の低調と卑俗を招いているようである。だから、モリスの代表的な書物論三篇を収めた本書の刊行はまことに意義深く、訳者の労は多とされてよい。

たゞ本書が、このような内容をもち、内容にふさわしい造本を志しているだけに、普通の本ならば見て過ごされる欠点も大映しとなる。誤植は絶対にあってはならぬ書物なのにそれが散見するのは第一の遺憾である。モリス自身の註が、訳者の註となっているような不注意も、厳に避けられるべきであろう。

翻訳についても、高度に良心的であるとはいえず、活字体を示す場合には必ず「プリマ」と読まれねばならぬのが「プライマー」と読まれていたりするのも、物が物だけに気にかゝる。「遺鉢を継ぐ」などと書かれると訳者の良識が問題となり、所々に施されているルビは訳者が果してモリスの真意を理解しているかどうかを疑わしめる。つまりそれほどまでに、モリスの歩んだ書物の道は困難なのである。

この書評を私は先日入手して読んだばかりなのであるが、どちらかと言えば批判的な論調とはいえ、先の（1983 年発表の）小野追悼文のくだりと比べるとトーンはそれほど強くないのが意外に思えた。あるいはこの書評を書いた時点で庄司の訳文を細かく検討する時間がなかったのかもしれない。というのも、肝心な個所での誤訳がひどいもので、「モリス

の文体や本質をまるでわきまえもしないで、軽々しくモリスの金玉の文字を翻訳したりする」という非難はこの訳書の評価としては妥当と私には思えたからである。一例を挙げると、「印刷について」の冒頭の段落で、「一四五五年頃はじめて活字で印刷された書物、『グーテンベルク聖書』又は『四十二行聖書』といわれるものは、美術印刷の標本としては、決して好ましいものでなかつたことを、述べておく必要がある」と訳しているのは、原文と意味が正反対で、英文読解能力は擱いても、近代の活版印刷の質的低下を嘆いたモリスがグーテンベルク聖書をそのように評価するはずがないのにこう訳していることに私はわが目を疑ったのだった（ちなみに拙訳ではここは「美しいタイポグラフィの見本として、可動活字で印刷された最古の本である『グーテンベルク本』、つまり一四五五年頃制作の『四十二行聖書』をしのぐ本はこれまでひとつも出なかったという事実は、指摘しておく価値がある」と訳した）。

じっさい、「書誌学者」という肩書きでは壽岳と庄司が昭和期において比肩する代表的人物とみなす向きがあったのは事実であろう。壽岳の場合、英文学、和紙研究、またダンテ『神曲』の翻訳ほかの広がりをもつが、庄司と同様に本の歴史に関わる著作も多く出している。後期の著作で例を挙げるなら、壽岳が 1982 年に『図説 本の歴史』（日本エディタースクール出版部）を上梓した一方で、1984 年に庄司は吉村善太郎との共著で『目でみる本の歴史』（出版ニュース社）を刊行している。前者は四六判で 200 ページ、後者はＢ５版で 540 ページの書物だが、外見のみならず中身も大違いで、壽岳が近代以降の本に対して（また「書物愛好家」に対しても）批判的な記述をしているのに対して、庄司・吉村のほうは、インキュナブラほかの古今東西の貴重書を嘗めるように愛でながら概観するという趣向になっている。ドイツ文学者の種村季弘は「二人の書誌学者の業績めぐって」と題する読書エッセイ（『讀賣新聞』1984 年 2 月 21 日朝刊）でこのふたつの書物を取り上げて、「若年時から徳富蘇峰の愛書ぶりに傾倒」した庄司と、「柳宗悦による白樺派＝民藝運動の一環として独自の書物哲学を形成してきた」壽岳の業績を比べてみている。「国家主義者であってエピクロス派的に書物を外在的に愛する蘇峰と、反軍国主義者であってストア派的に書物を内在的に生きた柳とのアイロニカルな対照は、そのまま、二人の巨人の衣鉢をつぐ当代最高の二人の書誌学者の業績に、すなわち『定本 庄司浅水著作集』（出版ニュース社）と『寿岳文章・しづ著作集』（春秋社）に映し出されている。集書はもとより出版にいたるまで、近代日本の書物世界は、ほぼ右の車の両輪によって形成された、といって過言ではあるまい」と種村は壽岳と庄司の業績を相対化して評価している。

この「両輪」というのは種村らしい見立てであるとは思うが、この両極の車輪を同等とみなすことには私はどうしても違和感を覚える。なによりも、本の歴史を扱って、一般的に美書であるとか稀少ゆえに貴重とされる初版本を（『不思議の国のアリス』だろうが『資本論』だろうが）時系列でほとんど脈絡なく並べてそれぞれの来歴を表面的に語る本と、歴史的社会的観点を手放さず、書物と社会の関わりをつねに問題にする批評的な書物とでは、対照というよりは非対称が際立つので、「両輪」という表現が妥当であるとは思われない。『目で見る本の歴史』の「解説編」中の「プライベット・プレス」でのモリスとケルムスコット・プ

レスの記述などそうした批評精神が欠如した文の典型である。別の言い方をすれば、欠如しているのは、ケルムスコット・プレス研究の第一人者であるウィリアム・S・ピータースンが『理想の書物』（拙訳の前掲書）の編者序論（1982 年）で述べているつぎの観点である。

モリスが単に書物の印刷の改善だけを望んでいるのではないということを認識しなかったら、タイポグラフィについての彼の著作のもつ倫理的な強さは理解できない。実際（これは彼が生涯に果たした活動全体に当てはまることだが)、彼は西洋史の方向を変えたいと思っている。･･･モリスは、芸術作品たる書物を生み出したいと切に願っているのではあるが、さらに一層彼の頭を占めているのは、近代世界における人間的な価値全般の喪失という問題なのだ。この点でもまたモリスはラスキンに似ている。ラスキンのめざしたのは、ゴシックの大聖堂それ自体よりは、大聖堂の背後にある芸術的、社会的、経済的価値をよみがえらせることだったのだから。･･･版面に秩序を与えることがモリスにとっては究極的に人間存在に意味を与えるためのひとつの方途なのだということを忘れてしまうなら、彼がこちらに語りかけていることの半分しか私たちの耳に届かないだろう。

これはまさしく壽岳が書物芸術にとりくむ際の観点であり、またモリスを範として自身の研究と実践の基本としたポイントであったのだと私は見る。壽岳自身も「近代世界における人間的な価値全般の喪失」への問題意識は深く、とくに戦前戦中に壽岳が取り組んだ二大プロジェクト、すなわち妻しづと共におこなった全国紙漉村の調査と向日庵本の制作を促す動力になったのではないか。後者に関連して 1951 年に壽岳は「わが国でも、モリス以後の近英私版家たちの作った美書を云々する者はいる。しかし、中世の工芸を理想とするこれら一連の私版家たちの世界観を理解せず、美書美書と連呼することに、はたしてどれだけの意味があろうか」と疑問を投げかけた。モリスやコブデン・サンダスン、エマリー・ウォーカー等々を「理解することは、近代イギリスの社会構造を理解することでもある。私の関心は、強くこの事実にひかれ、むしろそれを中軸として、私の私版理論はうち立てられているのに、この肝要な事実を認めようとする人がほとんどいない」と諦念を交えた口調で書いている（「なぜ向日庵私版を復興しないか」)。

だがいま壽岳文章の問題意識と批評精神（そして反民主主義的な政治勢力に対する粘り強い抵抗精神）を再評価する動きが徐々に出て来ているのが感じ取れる。特定非営利活動法人向日庵に関わる方々はこれに大いに貢献しておられると拝察する。私自身、この偉大な先人に学ぶところがまだ多くあるし、彼が生涯に果たした仕事の意義について論じてみたいことが多々ある。本稿はその手始めの拙文として受け取っていただければありがたい。

寿岳しづ ―― 書いて、ともに生きて

長野 裕子（特定非営利活動法人向日庵理事）

寿岳しづ（本名静子 1901-1981）は、英文学者である夫の寿岳文章（1900-1992）とともに生き、文筆家、翻訳家として、市井の女性たちとともに行動したオピニオン・リーダーであった。外国文学を翻訳することを通して社会に人の生き方を問い続けた。しづの場合のように、いわば「アマチュア」である女性が「書く」ということは、とりわけ明治期、大正期の時代を生きた女性にとってどのような意味を持つのだろうか。

本論では、寿岳しづが執筆した文学作品に焦点をあててみたい。小説『朝』はしづの自伝的作品であるが、明治期以降の女性史の一端が読みとれる。『朝』からみえてくる大正期の恋愛観、職業としての文筆活動という観点から、ひとりの女性像をとらえてみたい。そして、しづが翻訳したハドソン著『はるかな国 とおい昔』は、イギリスの自然文学であるが、ハドソンの作品の魅力と視点は現代のわたしたちに何を問いかけるのか。寿岳しづの文筆活動の軌跡をたどり作品をひもとくことは、「いかに生きるか」という人間の普遍的な問題に向き合うことでもある。

Ⅰ．小説『朝』

生いたち、寿岳文章との出会い

岩橋静子は、鉱山技師の仕事に従事する父乙吉と母ハナの長女として、大阪に生まれ育った。兄の岩橋武夫（1898-1954）は、ヘレン・ケラーを日本に招き、「日本ライトハウス」を創立して視覚障害者の自立に貢献した人物として知られる。勉強好きで文学少女であった静子は高等女学校に入学するが、静子が 16 歳のとき、重い眼病を患った兄武夫の看病に献身することになる。家庭の事情が重なり女学校を中途退学して過ごす日々が続いた。武夫は、失明の苦しみから再起して関西学院に入学し、静子は介添えとして講義に同伴してノートをとり兄の勉学を助けた。静子は、武夫の学友であった寿岳文章とここで出会う。親友として武夫の家をよく訪れた文章と静子のあいだにやがて心が通い合い、二人は婚約する。静子 22 歳、文章 23 歳であった。

文章と結婚した静子は、兄の看病生活と文章に結婚の決意を伝えるまでの心の戦いを、小説『朝』に描いた。文章が関西学院を卒業した春に結婚して京都に住まいを移し、暮れには長女章子が誕生した。在学中に中等教員英語科の検定試験に合格した文章は、母校で英語を教えはじめていたが、京都大学選科に入学したばかりの学生の身であり、家庭を支える経済力には乏しかった。生まれたばかりの娘の世話をしながら、静子が『朝』の創作をはじめたのはこの頃のことである。

雑誌『生活者』と倉田百三

小説『朝』は、作家倉田百三（1891-1943）が創刊編集する雑誌『生活者』（1926 年創刊）に「磯長ぬい」のペンネームで連載されたもので、後にあらたに岩波書店から出版された。以降、静子は筆名を「寿岳しづ」としている。雑誌『生活者』は「生きる」ことを真摯に追求した文芸誌であった。「生命を愛するとは如何にすることであらう。生命を礼する心は何処から生ずるのであらう[1]。」と倉田は発刊の言葉をかかげている。この雑誌に強く共感した静子が作品を寄稿し[2]、これを読んだ倉田は「恋愛小説としてもこれだけ至純なものは少い気がする。今の女流作家に欠乏している、そして自分が最も望ましいと思う素質が多く備っている気がする[3]。」と注目した。文章が翻訳したチェルトコフ著『晩年のトルストイ』[4]をきっかけに、倉田と文章のあいだに文通が始まったという巡りあわせにも恵まれ、こうして寿岳しづの最初の作品である『朝』は出版された。しづが自伝的小説を書いた動機には、自己表現という文学的な目的と、家庭を支えるための経済的な目的とが考えられるが、とりわけ明治期から大正期において女性が「書く」ということの動機は、女性の歴史そのものを映し出している。

職業としての文筆活動

しづが生まれ育った明治期から大正期は、さまざまな女性の職業が生まれた時代であった。日露戦争による男手の不足が女性の雇用を生み、女性が自分で働き賃金を得ることができる仕事が登場した。軍需工場、製糸、織工の工場労働もその例である。またこのような家や親が契約する形をとる「女工」とは違い、高等女学校を卒業する女性の増加によって都市で働く「職業婦人」が注目を集めた。電話交換手、タイピスト、車掌、記者、販売員、教師、通訳など、戦争と女子教育の発展を背景とした女性の職業の多様化は、「断髪のモダンガール」のイメージをともなって欧米社会にも同時的にみられる社会現象であった [5]。

ここで、しづが『朝』を執筆した当時の女性の就業状況をみておきたい。昭和 5（1930）年の国勢調査報告[6] によると、当時の女性人口 3 千 205 万 9,850 人のうち有業者数はその約三分の一であり、そのなかでも「記者・著述家・文芸家」に従事する女性は 432 人である。これを有業者 1 万人あたりに換算すると、「記者・著述家・文芸家」に従事する女性は

---

[1] 倉田百三「発刊の言葉」『生活者』創刊号（岩波書店、1926 年 5 月）

[2] 寿岳しづ「『朝』を書いた頃」『英文法研究』1959 年 7 月号（研究社）、p. 34.

[3] 倉田百三「編集後記」『生活者』第 4 号（岩波書店、1926 年 8 月）

[4] チェルトコフ著、寿岳文章訳『晩年のトルストイ』（岩波書店、1926 年）

[5] アンジェラ・ホールズワース著、石山鈴子・加地 永都子訳『人形の家を出た女たち』（新宿書房、1992 年）、読売新聞生活部編『こうして女性は強くなった。家庭面の 100 年』（中央公論新社、2014 年）、磯山久美子『断髪する女性たち 1920 年代のスペイン社会とモダンガール』（新宿書房、2020 年）、p. 127. を参照。

[6]『昭和五年国勢調査報告』、内閣統計局、1935 年（『戦前期国勢調査報告集 昭和 5 年　2 職業及産業』、クレス出版、1993 年、pp.8-23. pp.160-175.）

1 人にも満たないという結果になる。女性従事者が最も多い職種を順に挙げると、「農業手助」5,270 を筆頭に、「主人ノ世帯に在ル家人使用人」632、「商業手助」361、「繰絲工」356、「物品販売業種」241、「機織工」217、「蚕業手助」206、「裁断工」118、「旅館料理店飲食店貸席業ノ番頭客引」112、「理髪師・髪結・美容師」92、「看護人」78、「娼妓」46、「電話交換手」34、となっている。昭和初期にはまだ女性の就業実態に大きな構図の変化は見られないことがわかる。文筆活動によって身を立てることができる女性は特別な存在であった。

時代はさかのぼるが、1889 年に「ヱリヲット女史」が書いた「女流小説」批判論（もみぢ「女小説家」152 号）によると「吾等は最初考へたり。凡そ世の女小説家なるものは貧乏なるゆへに作者とはなりなるなり、大方他に女らしき職業のあらざるより、彼の或る婦人が止むを得ずして下宿屋の主人となる如くに作者とはなりたるなり。」とあり、「抑も今の女小説家の多くは馬車の窓よりして町人を観察したる人なり。其の家来の外に働き手と云ふを見しことあらざる人なり。香よき墨に値高き筆を浸し、出版社の損益には無頓着にて奉書紙に原稿を認めし人なり。左れば此の方々は貧しき云えば考えの貧しきと云う他に経験したことあらざるべし。」と「女小説家」の実態を論じている。当時の女性作家といえば、女学校に通った一握りの特権階級に属する女性であり、作品は女学校や上流社会を題材にしたものであった[7]。

このような環境のもとで、女性が作家としての道を歩むためにはどのような方法があったのか。小説家の長谷川時雨（1879-1941）が主宰した文芸雑誌『女人芸術』（1928 年創刊）は、女性の団結、解放、才能の開花を目指して執筆、編集をすべて女性が行った。女性であれば無名でも書ける懐の深さがあり、林芙美子（1903-51）、円地文子（1905-86）、大田洋子（1906-1963）などを文壇に送り出した。新聞の懸賞小説への応募もまた女性作家への道に開かれた扉であった。プロレタリア作家の松田解子（1905-2004）は、1928 年に賞金目当てに応募した読売新聞の短編懸賞小説に入選し、雑誌『女人芸術』に発表した作品を契機に作家生活の道を歩んだ。秋田県の鉱山の鉱夫の娘として生まれ、高等小学校を卒業後、鉱山事務所の事務員として働きながら文学に接する。苦学して教師になり、女工の仕事を経て解放運動を続けた人物である[8]。著書『おりん母子伝』（1974 年）『桃割れのタイピスト』（1977 年）に自身の生活体験と労働者の苦難を描いている。

しづは、当時京都に住んでいた哲学者の土田杏村（1891-1934）から新聞の懸賞小説応募をすすめられた。しかし、「新聞小説には不適当に思い」、「大正十五年だったあの頃ちょうど倉田百三氏が雑誌「生活者」を発刊していたのを幸いに、またその主旨に共感したせいもあって、原稿を送ってみることにした [9]。」のである。のちに、『朝』によって「私には愛情

---

[7] 平田由美『女性表現の明治史 樋口一葉以前』（岩波書店、1999 年）、pp. 75-76.

[8] 岡田孝子『風に向かった女たち』（沖積舎、2001 年）、p. 163.

[9] 寿岳しづ「『朝』を書いた頃」（再掲）また、これを実証する資料として土田杏村からの書簡がある。（縄手通四條下ル大和町　寿岳文章宛、大正 15 年 5 月 25 日消印、向日庵資料）寿岳文章は「当時静子は、倉田百三が主宰する月刊誌『生活者』に処女作「朝」を連載していたが、完結

が書ける」と自負するしづは、「近代合理主義がそそのかす自由結婚、自由恋愛は本物の愛情ではない」「生きることの真実、純粋さ、そこからしか文学は生まれない。」と語る[10]。『朝』に描いた「愛」の世界は新聞読者の好みには馴染まないと考えたのであろうか、「新聞小説には不適当」とするしづの判断は、文学のありかたの本質を捉えたものであったといえる。

このことは、しづに宛てられた島崎藤村からの書簡からもみてとれる。「御稿只今別封にてお返し申上げておきます　もつと支度をしたのもが何か出来ましたらその時に　送つてよこして見て下さい。　十一月十日　東京麻布飯倉片町三三　島崎藤村[11]」という内容である。消印は、『朝』の執筆をはじめた大正 13 年であり、「島崎藤村の作品が好きで、『春』や『桜の実の熟する時』などをよく読んで[12]」いたしづが、創作の批評を島崎に仰いで草稿を送ったものと推察できる。なんとか自分の力で道なき道を切り開こうとする、しづの勇気と創作への熱意を感じ取ることができる。

こうして出版された『朝』の読者は、「かういふ深く見すゑた叙情的に清浄な眞摯な世界に住む人々の心を羨む。」（福原麟太郎）「おしんは所謂モダンガアルの型から最も遠い、純日本の女性のイデエに近い少女である。それは弱い女といふ意味ではない。（中略）うちあけて拒絶された時の心の持ち方を準備して、自分の心を練るような女である。」（土居光知）と評している [13]。「おしん」として描かれたしづは、ものごとに辛抱強く耐える献身的な女性であり、自由で奔放なイメージが強い「新しい女性」ではなかった。

「新しい女性」と大正期の恋愛観

ここで、女性史における転換期となった 19 世紀末のイギリス社会に目を転じてみたい。1860 年頃のイギリスに、世間の常識にとらわれない生き方をする若い女性たちが出現する。蠱惑的なファッションに身をつつんでタバコを吸い、ずうずうしく男性に交じって議論し、街なかを自転車に乗って移動する、そのような彼女らの「型破り」な行動を世間は ‘Girl of the Period（時代っ娘）’と称して揶揄した。恋愛好きで「結婚」を鼻であらしい、「女らし

すれば岩波で単行本化する話も出ていたので、新鋭の評論家土田杏村の批評を乞うべく、私たち夫婦は、大谷大学西の田圃続きの中にぽつんと立つ一軒家に、ある日約束の時間に杏村を訪うた。」と記している。（寿岳文章「尋源橋物語」『學鐙』81 巻 10 号、丸善、1986 年 10 月、p. 8.）

[10] 「“愛情が書ける”奉仕と犠牲の半生」『朝日新聞』（1951 年 10 月 19 日、向日庵資料「寿岳しづスクラップ帖」）しづはこのなかで次のように続けている。「林芙美子も苦労はしているが、作品は結局二つ三つでよい。作品にもっと休息を与えねば。」「恋愛とか結婚論をのぞいて平林たい子の評論が好き。平林や宮本［百合子］の知性を求めて私はこれから歴史や哲学を勉強、創意というものを追求してから創作したい。」

[11] 京都市縄手通四条下ル一丁目大和町　寿岳しづ子宛葉書（大正 13 年 11 月 10 日消印、向日庵資料）

[12] 寿岳しづ「『朝』を書いた頃」（再掲）

[13] 『英語青年』58 巻 6 号（研究社、1927 年 12 月）、p.208.に「F.R.[福原麟太郎]」「D.K.[土居光知]」による書評が掲載された。

さ」を失ったこのようなタイプの女性たちのなかでも、一定の教育をうけて文筆家、芸術家、政治運動家として活動する女性たちは、‘New Woman（新しい女性）’と称されて社会的地位を高めてゆく。男勝りで結婚から遠ざかり、官能的な魅力を失った女性像を誇張した‘New Woman’にたいする風刺には、結婚に身を固めることに対する女性の危惧が透けて見える。20 世紀を迎えようとする頃には、女性たちは作品のなかにおいても現実においても、「合法的」に、男性の庇護をうけずに望みどおりに大学に通い、財力を手にしてもよい時代になったのだった[14]。

しづが生まれ育った時代の日本はどうであったか。明治 44（1911）年に平塚らいてうが「元始、女性は太陽であった。」と掲げて雑誌『青踏』が創刊される一方、しづが尋常小学校の卒業時に学校からもらった『現代婦女宝典』が説くような、封建的な家庭感情がいまだ残る時代でもあった。そして、大正期は知識人のあいだで熱い「恋愛論」が繰り広げられた時代でもあった[15]。

大正 10（1921）年には英文学者の厨川白村（1880-1923）が「近代の恋愛観」を新聞に連載し、倉田百三の著書『愛と認識の出発』がベストセラーになっている。大正 13（1923）年には、しづの執筆に助言を与えた土田杏村が『恋愛のユートピア』を著した。土田は、厨川、倉田をはじめとする国内に発表された恋愛論を徹底的に考察して、体系的な恋愛哲学を論じようとした。厨川は、ロシアの作家イプセンが戯曲『人形の家』（1911 年日本初演）に描いた女性、亭主の家を飛び出した「ノラ」は「新しい女」の象徴としてはすでに古いとして論を展開する。女性が「恋愛によって自己を放棄していると見えたのは、実は表面的外面的な自己をのみ見ていた」からである（「近代恋愛論」）[16]。「『恋愛の自由』と『自由恋愛』（即ち自由性交）をごっちゃにして考ふ輩の如き先づ自らの頭脳を恥じよ[17]。」と、自由恋愛の美名を借りた放埒乱交を伐して精神的、人格的な恋愛の自由を主張した。

この時期には著名人の恋愛事件も相次いだ。北原白秋の姦通罪起訴（1911 年）、松井須磨子の後追い自殺（1919 年）、柳原白蓮事件（1921 年）、有島武郎情死事件（1923 年）、武者小路実篤の四角関係（1923 年）などが挙げられる。有島武郎の情死事件を取り上げた雑誌記事に、寿岳文章が「白川学人」のペンネームで寄稿した一文がある[18]。寿岳は、親しい友人が、有島の原町にあった借家を預かるほどの知己となった、その彼から聞いていた有島の心事をもとに「亡き人への廻向」として書き記した。「死を急ぐ心持も同感できる」としながらも、「複雑な愛欲の内容をじっと胸につつんで、日毎にこれを荘観しつつ俊敏な良心の

---

[14] Suzanne Fagence Cooper, *The Victorian Woman* (London: V&A Publications, 2001), pp. 64-67.

[15] 菅野聡美『消費される恋愛論　大正知識人と性』（青弓社、2001 年）に詳しい。

[16] 厨川白村「近代の恋愛観」『厨川白村全集 第 5 巻』（改造社、1921 年）、p. 28.

[17] 厨川白村「再び恋愛を説く」前掲書、p.145.

[18] 白川学人「「おゝ淋しい」と泣いた人」『サンデー毎日』2 巻 33 号（1923 年 7 月 29 日）、p.19.「京都市白川橋通三條」と筆者在住地が付記されている。

前に苦痛を訴える部分を浄化してゆくことが最も望ましき行き方」であったはずであるとした。そのような「忍苦の生活」は、「たとえ人間が定めた倫理や正義の掟には触れても、一路直に神へ通ずる永遠の倫理永遠の正義に導く」ものであり、これこそが「愛の完成」であるという主旨である。

有島の情死事件は、しづと文章が春に結婚した同年の夏に起きている。大正期のいわば「恋愛論ブーム」の渦中にあって、「愛の完成」という一語に帰結する寿岳の「恋愛論」は、しづと文章の結婚のうちに見事に「完成」しているのではないだろうか。先にみた『朝』の評者が洞察したように、作品に描かれた主人公は「うちあけて拒絶された時の心の持ち方を準備して、自分の心を練るような女」である。いいかえれば、しづは「愛の完成」のために「忍苦の生活」を覚悟することを厭わぬ女性であった。しづは、『人形の家』のノラが象徴するような「新しい女性」という意味では「モダンガアル」ではなかったかもしれないが、精神的に自立した新しい女性像を示す「大正期のモダンガール」であったといえよう。

『朝』の出版当時の女性識者たちは「恋愛結婚」をどうとらえていたのか。山川菊栄（1890-1980）は、女性が男性に対して経済的に委嘱しているという夫婦関係の根本が変わらない限り、恋愛結婚は「ただ恋愛の色どりを添えることだけに満足」して「売物としての女に、うちかけの代りに洋装をさせるというだけの、外形における近代化にすぎないとしか思われない。」（「景品つき特価品としての女」1928 年）と、厨川の恋愛論を批判した[19]。神近市子（1888-1981）は、女性に対して支配的立場にある男性にとって、「ロマンチシズムは何時も大切な隠れ蓑」であるとして（「新しき恋愛の理論について」1928 年）、過剰な恋愛依存を批判した[20]。伊藤野枝（1895-1923）は、「結婚に対する失敗の総ての原因が、ただ恋愛によらぬ、他人の意思を交えたことのみによるようにしか考えなかったことは、即ち私が、結婚というものに対して盲目であったことの一つを証拠だてている」（「自由意志による結婚の破滅」）とし、人間の本当の幸福は他人から与えられるものではなく、自己を生かすことによってのみ得られるものであると理解した[21]。

文学作品としての『朝』

しかし、男女とわずこのような知識人が賑やかに展開した恋愛論に対して、一般生活者の誰もが恋愛や恋愛結婚を成就できたわけではないのが現実であった。しづが書いた『朝』は、このような市井に生きる人々の心に寄り添う作品であったことが、読者の手紙から見てとれる。しづに宛てられたこの一通の手紙は、姓が異なる男女の連名によるもので、それまで「自分達に触れてくれる何物かを求めて」倉田百三の作品を愛読していた、そのような二人である。「…しかし百三先生御自身が平凡に生まれなすったのではありませんから、平凡な私達の機微に触れて導いて呉れるものをと考へて折りに触れては探していましたところ

---

[19] 菅野聡美『消費される恋愛論』（前掲書）、p. 198.

[20] 前掲書、p. 201.

[21] 前掲書、pp. 184-85.

（中略）［ふと手にした『朝』を］其の夜は寝もやらず読み通して、感謝と喜との心持ち」である、と書きつけている[22]。しづは『朝』の執筆について「所謂世の創作のために創作した」ものではなく、「ただどうしても、書き現してみたいという念願」、「何年か経っても同じ衰えぬ思いである念願」から書いたものであって、「自分の願うものをひたすら凝視めて」、「これからもずっと、出来るだけ深く静かにつつましく行かうとする私にとって、この作はすべての意味での朝」であると述べている[23]。

厨川白村がある一文に紹介した逸話である。『人形の家』を書いたイプセンを、ある多数の婦人たちが集まって招待して彼に言った。「世界の女たちのために、婦人の自覚とか解放とかについて新しい啓示を与えてくださったのはあなたの『人形の家』でした。婦人は皆あなたに感謝しています。」イプセンは「わたしはそんなつもりであの作品を書いたのではありません。私はただ詩を作っただけなのです。」と返答した。厨川は、思想家や学者や芸術家が、世間というものを最初から眼中において創作したり書いたりすることは、本来の職能ではないという意味のことを述べている[24]。イプセンの作品が、故意によらず自ずと世界の人の心を揺るがしたように、『朝』に読者の心を強くしたり勇気づけたりする何かがあるならば、それはしづの「書きたい」というただひとつの動機が根源になっているからではないだろうか。

II．自然文学

寿岳文章の英文講義

結婚生活をはじめてまもなく、文章から発音記号の手ほどきを二晩だけ受けたしづは、研究社の講義録をとりよせて英語を独学した。しづが最初に翻訳した作品はウィリアム・ブレイクの詩だった[25]。文章が翻訳した『ブレイク抒情詩抄』（岩波文庫、1931 年）のうち、「子守歌」「春」「幼児のよろこび」はしづが翻訳したものである[26]。しづの英語力を育てたいと

---

[22] 南禅寺僊壷庵内 寿岳しづ子宛書簡（昭和 2 年 6 月 1 日消印、向日庵資料）

[23] 寿岳しづ「作者の言葉」『読売新聞』（昭和 2 年、向日庵資料、「寿岳しづスクラップ帖」）

[24] 厨川白村「宣伝と創作」『厨川白村全集 第 5 巻』（前掲書）、pp. 242-50.

[25] 「夫がブレイクの研究を長年続けております関係上、少しづつブレイクを理解するやうになりました。夫が『ブレイク抒情詩抄』を岩波文庫版で出した時には『春』『みどり児の喜び』など、幼児の心を必要とする詩の幾つかを始めて訳してみました。」（寿岳しづ『荒野に歌ふ』［西村書店、1948 年］、pp. 54-55）

[26] このことを示した記述を挙げておく。

「邦語彙に對する私の貧痩な知識と直覺とがゆるす限り、原詩原文の或は雄渾な或は繊細な語感を寫し出すことにも随分と心を碎いた。たとへば、「無明の歌」所載、「虎」の如き迫力ある名什を譯出するに際しては、端座瞑目、爛々たる眼光を放つ夜林の虎を眼前に思ひ浮べ、しかるのち満身の力を筆尖に託し、また「無染の歌」にある「子守歌」或は「みどり兒の喜び」のやうに、幼な兒や母の心持が深く必要とされる場合には、私の妻がその翻譯に當った如きがそれである。」

考えた文章は、ウィリアム・ヘンリー・ハドソンの *Far Away and Long Ago*（『はるかな国とおい昔』）を翻訳することをしづに薦めた。しづは、はじめの一、二章は気乗りしなかったが、章を重ねるにつれてこの作家がたいへん好きになってしまった、と当時を振りかえっている[27]。「今、私の仕事となっているハドソンの翻訳を、時間のゆるす限り一心に続けております。出来上がった訳は文章に見てもらいます。このため鳥や草木を見る眼をハドソンから教わって、もともと好きな自然がいっそう親しくなりました[28]。」（「向日庵消息 第四信」1934 年）としづが綴ったこの年、文章は関西学院大学で *Far Away and Long Ago* をテキストに用いた英文学講義を行っている。この講義を受講した児童文学者の庄野英二（1915-1993）は当時のことを記している。「一九三四年（昭和九）四月、二年生に進級し、寿岳文章教授の英文学講読が開講された。寿岳文章は、先年イギリスの出版社からブレイクの本を上梓していた[29]が、その著書と同じキャンパス生地で洋服を作りそれを着ていた。（中略）私は寿岳の典雅で美しい日本語に感服した。英文学の授業でありながら美しい日本語について深く考えるようになった。また、テキストが野鳥の詩人と呼ばれるハドソンの、南米ラプラタに育った少年の日の思い出だけに、私は作品世界に鮮明な印象を受けた[30]。」

文章がハドソンを紹介した *Memories Sad and Sweet*（平野書店、1931 年）は、英語を学ぶ学生のための教科書であるが[31]、しづも文章から英語を学ぶ一学生として、この本を机上に置きハドソンの作品を繙いたことであろう。また同年、文章は *Far Away and Long Ago* の日本語版出版にむけて動き出し、友人であったイギリスの陶芸家バーナード・リーチが出版元のデント社に手紙を書き送ってくれることになった[32]。しづのハドソンへの傾倒と愛着

（寿岳文章「小序」『ブレイク抒情詩抄』[岩波書店、1931 年]、pp. 5-6.）

「英文學者夫妻　壽岳文章氏・しづさん　英文學界でブレイク研究家として有名な文章氏は現在関學教授　夫人も英文學の造詣深く岩波書店から訳著ハドスン『遙かな國遠い昔』ジエフリーズ『わが心の記』を刊行　英文學が結ぶ御両人のロマンスに就いてはしづ夫人著「朝」（岩波書店刊）に詳しいし　文章氏著　の「ブレイク詩抄」の中「子守唄」「春」「幼児のよろこび」は夫人の訳になるといふ　若い頃は英文學について激論をしたさうだが　この頃は年をとつた故か議論もアツサリとある。」（『アサヒグラフ』「同業者夫妻」1946 年 11 月 25 日号、朝日新聞社）

[27] 寿岳しづ『荒野に歌ふ』（前掲書）、p. 56.

[28] 寿岳文章・しづ「向日庵消息 第四信」『壽岳文章書物論集成』（沖積舎、1989 年）、p. 882.

[29] ブレイクの本を「イギリスの出版社から」とは庄野の記憶ちがいで、寿岳文章が昭和 8（1933）年 12 月に向日庵私版として刊行した *Exoteric Writings of William Blake*『英文ブレイク著作選集』を指しているのではないだろうか。表紙は麻布装である。

[30] 庄野英二『鶏冠詩人伝』（創元社、1990 年）、pp. 41-42.

[31] 中島俊郎「文化遺産としての向日庵」『甲南リベラリズムの源流を求めて』（甲南大学総合研究所、2018 年）、p. 52-53.

[32] このことについて、次のような記述がある。「その頃、妻は岩波文庫のためにハドソンの自伝『はるかな国とおい昔』の翻訳にとりかかっていた。リーチを食事に迎えたある日、いずれ版元のデント社へ日本語版のための出版譲渡をかけあわねばならない、と話すと、リーチは、デント

は、文章のハドソン作品に対する理解と熱意によって培われたといえる。

文章は、岩波文庫の企画者から依頼を受けて、ハドソンと同じイギリス自然文学であるギルバート・ホワイト（1720-1793）の著書『セルボーン博物誌』を訳刊している[33]。長女の章子は、ギルバート・ホワイトと W.H.ハドソンの作品を、文章としづが翻訳したことについて、「父は『セルボーン博物誌』を、母が『はるかな国遠い昔』をと訳しわけたのはおもしろいことだった。父は、語学力は大したことがなくとも（母は家庭の事情で小学校しか出ていない）、母の一種の文才がハドソンの作品の日本語化にぴったりだ（父自身よりも）、自分のタイプは『セルボーン博物誌』とお見通しだった[34]。」と伝えている。しづに翻訳家としての文才を開花させ、「鳥と草木をみる眼」を気付かせたハドソンは、自然をどのように見つめた人物だったのだろうか。

ウィリアム・ヘンリー・ハドソン

ウィリアム・ヘンリー・ハドソン（1841-1922）は、アルゼンチンのキルメスという町に生まれ育った。両親はアイルランド人の血を受け継ぐアメリカ人で、ボストンから移住して牧畜を営んでいた。大草原の懐にある家の周りは野鳥が群れをなす自然の楽園で、少年ハドソンは、生息する生きものを観察するのに夢中だった。家畜にはあまり興味がなく、‘ran wild in a wild land’と口にして山野と野鳥に親しむ少年であった[35]。30 歳のときにイギリスに渡り、住み慣れたロンドンで 81 歳の生涯を閉じるまで、故郷で親しんだ自然に対する愛情はさめることなく野鳥の観察と研究に熱中した。1925 年に英国政府は、イギリスの野鳥保護の活動に貢献したハドソンの功績を讃えてハイドパークの一角を鳥類保護地域とし、「英国鳥類保護協会」の会議室には彼の肖像画が掲げられている[36]。

社ならよく知っているから、いまおれが依頼状を書くと言い、その場でセピヤインクを使っての手紙をしたためてくれた。この手紙、デント社に今も残っているかどうか。恐らくは残っていまい。鳥取の吉田璋也君創案のを使っていたリーチのセピヤインクで連想されるのは、安部栄四郎君の雁皮紙だが、リーチを初めて岩坂の安部君の紙漉き場へ案内したのはこの私である。昭和九年八月十日のことだ。」（寿岳文章「“味楽”を共にした思い出」『民藝』第 320 号[日本民藝協会、1979 年]、p. 63. ）また、これを実証するバーナード・リーチからの書簡と寿岳文章の日記が「向日庵」に残っている。

[33] ギルバート・ホワイト著、寿岳文章訳『セルボーン博物誌（上）（下）』（岩波書店、1949 年）巻末索引は長男の潤が作成した。

[34] 『動物文学』第 60 巻第 1 号（動物文学会、1994 年 7 月）pp. 8-9.　寿岳文章は、訳書ギルバート・ホワイト著『セルボーン博物誌（下巻）』（岩波文庫、1949 年）「訳者のあとがき」に、下訳をするつもりで雑誌『動物文学』に「セルボーン博物誌抄」を少しずつ連載したことを記してる。

[35] 上野益三「ウィリアム・ヘンリー・ハドソン」『博物学の愉しみ』（八坂書房、1989 年）、pp. 200-1.

[36] 寿岳文章『自然・文学・人間　W・H・ハドソンの出発』新装版（新日本出版社、2002 年）

寿岳しづが翻訳した『はるかな国 とおい昔』（*Far Away and Long Ago,*1918）は 77 歳のハドソンが、遠い祖国アルゼンチンの大草原で過ごした少年の日々を回想した自叙伝で、しづは他に『ラ・プラタの博物学者』（*The Naturalist in La Plata,*1892）、『博物学者の本』（*The Book of a Naturalist.*1919）を抄訳している。しづは、「人の心が渇き、疲れはてるとき、『はるかな国 とおい昔』は、清浄な大気のように、ふるさとのように、読むものを慰め、きよめ、なごやかにするであろう[37]。」とハドソンを紹介している。とりわけこの岩波文庫が出版された 1937 年の日本の社会情勢を考えれば、『はるかな国 とおい昔』は時代が求めた作品であるといえるかもしれない。当時の日本の読者の声は、たとえばこのようなものだった。「独房にはいってから、まっさきに読んだのはもちろんこのハドソンです。せまい独房のなかで、すばらしい大草原の自然力、生きものの世界のひろがりに心をとらえられました。ガウチョの歌、鳥のさえずり、つかまえそこなった蛙、すさまじい夕だち、野生のねずみたち――すべていまなお、わたしの眼の前にうかびあがってきます。かわいらしい蜂すずめの羽音も耳にきこえます。あざやかに、やきついたように、すべての光景がまざまざと残っています[38]。」治安維持法により検挙された哲学者の古在由重（1901-1990）は、「巣鴨プリズン」での読書体験をこう振り返る。ハドソンは、自分自身を「動物の生活やそれについての談話に関心のある」、「古い意味でのナチュラリスト」であると称した[39]。『はるかな国 とおい昔』の世界が読者を惹きつけるのは、自然界と交わるときに湧き出る感情の記憶を読者に呼び起こさせるからかもしれない。

口絵

[37] 寿岳しづ「自然・文学・人生」『平安』（1950 年 12 月、向日庵資料、「寿岳しづスクラップ帖」）

[38] 寿岳しづ「古在さんと私たち」『古在吉重著作集』第 2 巻 月報 3 （勁草書房、1965 年）に、古在由重から届いた「昭和三十一年七月三十日」の手紙の内容が記されている。本論の引用文は次の記述に続く。「数年前の小文（『展望』掲載）のなかにも書いておいたかもしれませんが、あの訳書にはさらに特別な思いでがまといついています。十数年前のくらい時代―― 一九四〇年ごろ――に、私はあの本を神楽坂の本屋で求めました。それは治安維持法にかかっての一年半の留置場生活、読書からはまったくへだてられた生活ののちに、はじめて自分の手で買いもとめた最初の一冊の本でした。ひさしぶりに自動車にのせられて巣鴨プリズンへおくられる途中のことであり、刑事に見はられたまま、岩波文庫のならべられた書だなに心せわしく眼を走らせました。巣鴨へおくられれば、三じょうじきの独房だとはいえ、読書ができるという希望に心をおどらせました。なにかたのしそうな本はないかしら、そして「これだ！」と思って一冊ひきぬいたのが、あの『はるかな国とほい昔』です。私はハドソンという名も知らず、何が書かれているかもわかりませんでした。ただその題名――いかにもはるばるとした、たのしい題名にひかれたのかもしれません。いそいでこれをふろしき包みにいれ、再び自動車にのせられ拘置所へつれられたことを思いおこします。ちょうど春の季節でした。うすぐらい監房からでて外の大気を胸ふかくすいこみ、まばゆいばかりの桜の満開に生命のたぎりを感じました。」

[39] 上野益三「ウィリアム・ヘンリー・ハドソン」（前掲書）、p. 201.

ハドソンと自然観察

一方、寿岳文章が翻訳したギルバート・ホワイト著『セルボーン博物誌』は、イギリス南部に位置するセルボーン村の自然観察記録で、ハドソンが生まれる 50 年ほど前に書かれた自然文学である。イギリスでは、聖書、シェイクスピアの作品、バニヤンの『天路歴程』に続くベストセラーといわれるほど、英文学の古典として知られる。『はるかな国 とおい昔』のなかに、ハドソンの愛読書としてこの『セルボーン博物誌』が登場する[40]。ハドソン一家の古い友人として年に一度来訪するブエノス・アイレスの商人が、ヨーロッパ旅行中に古本屋でこの本を見つけ、鳥が大好きなハドソン少年のために買い与えてくれた。このような優れた本にはそれまで触れたことがなく、「その書物を、むさぼるように何度も何度も読み返した」ハドソン少年だったが、しかし、「この本は、自然に対して抱いている、私自身の感情の秘密、――ますますはっきりと私に認識され、私にとっては、一つの神秘となっていた感情、突然、思いがけず、どっと私を襲うような」感情の秘密を解きあかしてはくれなかった。そして、ハドソン少年が自然を前にして抱いたような自然界の不思議に対するこたえは、「ブラウンの『哲学』」や「ダーウィンの『種の起源』」のなかにではなく、むしろ 19 世紀初頭の詩人たちによる言葉のなかに見つけることができたのだった。ダーウィンの『種の起源』を貸してくれた兄からは、「さあ、その本を持って行って、お前がそれを読む正しい方法で――博物者として読み返したまえ[41]。」（傍点筆者）と忠告されて『種の起源』を再読したハドソン少年が到達した理解とはこうだった。つまり、「私の見る動物という動物――大は、青空に高く高く輪を描いて舞い上がる鳥から、小は、足もとの小さな生物まで、一切が議論の中へ巻き込まれ、ただ姿や、色彩や、言葉だけでなく、同様に心や、習性や、身ぶりの、ほんのちょっとした特徴や癖[42]」までも「系統の共通」という科学的説明ですまされてしまう、ということである。ハドソンは、「地球は円く、太陽の周囲を回転する遊星系の一つである」という「星についてのこんな知識などは、私たちが、この地上の生活を分かちあっている、無限に多種多様な生活形態の一切とつながりをもつという知識に比べたなら、ほとんどものの数に入らないのです。」「十九世紀の後半になって、やっと、この偉大な、ほとんど自明の事実が、世人の視聴をひき得たとは！[43]」といい、『種の起源』に代表されるような科学的な自然観察と、ハドソン自身が自然界に抱いた情熱の間にある隔たりを感じ取っていた。

寿岳文章は、『セルボーン博物誌』に接したハドソンが感じた「靴をへだててかゆみを掻くようなもどかしさ」の正体を、「同じ自然の忠実な観察者であっても、ホワイトには対象物とのあいだに、いつも一定の間隔をおいており、自然と一つになろうとしないつめたさ」

---

[40] ハドソン著、寿岳しづ訳『はるかな国 とおい昔』改訳（前掲書）、pp. 403-4.

[41] 前掲書、p. 409.

[42] 前掲書、p. 411.

[43] 前掲書、p. 411.

があるためだと分析する[44]。五十歳なかばにセルボーンの地を訪れたハドソンは、ホワイトを想いつづけながら散策し、『セルボーン博物誌』はホワイトの人格そのものが魅力になっている「人間記録」であると理解した[45]。『セルボーン博物誌』という野外観察記録が、ハドソン少年に遠いイギリスへの憧れと、生涯の興味の対象として進むべき道を教えてくれた本であったことに変わりはない。

ハドソンの作品を翻訳した英文学者の柏倉俊三は、生きとし生けるものの平等性を根底にもつ日本人の仏教的な感覚と、人間本位の西洋的な感覚の違いについて一例をあげて述べている[46]。あるミッション・スクールでみんなが可愛がっていた兎が死んだとき、一人の子どもが「天に召された」と言ったが、信者である校長先生は「兎は人間ではないからお召しにならんのだよ」と言ってきかせた、という逸話である。ではハドソンの場合はどうだろうか。『はるかな国 とおい昔』のなかの、ハドソン少年が目撃したヘビの話には「仏教的感覚」が感じられる。あたりから起る突然の悲鳴、見れば一匹のヘビが小路にいてもう少しで踏みつけるところだった。「真っ先に棒切れを見つけたのか、それとも一番勇敢だったのか」一人の男がたたき殺そうとしたとき、一人の婦人があらわれて彼の腕をとらえて引きとめる。それから身をかがめてヘビを手に持って、少し離れた緑の草の中に逃がしてやった。「なぜ殺すのですか？」と嬉しそうにしていた婦人の表情の意味を考えたあげく、ハドソン少年は「殺すよりは、逃がしてやるほうがよいかも知れぬ、助けられた動物のためばかりでなく、助けた人間の魂のためにも、よいことかも知れぬ」という考えを持つようになるのである[47]。ハドソンは鳥を剥製にすることが嫌いだった。「羊毛が詰めこまれ、生きた鳥に似せて立たされた鳥たちの外皮」が、ガラスケースの中に砂や岩や粘土やチョークと「緑の塗料が入ったバケツに漬けてでっち上げた」草や灌木で仕立てられた「“自然の環境”」に立っているのを見るのは不快だった。なぜなら、「死んで眼が閉じられると、鳥は、博物学者以外には、ただ一束の命なき羽毛になる。水晶の球体が空になった眼窩にはめられようし、きりっとした、生けるがの姿勢は剥製の標本に与えられよう。しかしガラスの眼球は、射るように生のまなざしを送り出すことはしない[48]。」からである。ハドソンは「生きたまま」の鳥を愛した。生きものの「息吹」こそ、ハドソンが愛したものであった。

「野鳥」と中西悟堂

「野の鳥」に熱い愛情を注ぐハドソンのような人物が日本にも存在した。中西悟堂（1895-

---

[44] 寿岳文章『自然・文学・人間　W・H・ハドソンの出発』（前掲書）、pp. 91-92.

[45] W.H.ハドスン著、小林歳夫訳「セルボーン」『鳥と人間』（*Bards and Man* , 1901）、（講談社、1978 年）、p. 282.

[46] 柏倉俊三「W・H・ハドソンの自然感覚・人間感情など」『學鐙』第 70 巻第 1 号（丸善、1973 年）、pp. 8-11.

[47] ハドソン著、寿岳しづ訳『はるかな国 とおい昔』改訳（前掲書）、pp. 265-66.

[48] W.H.ハドスン著、小林歳夫訳「セルボーン」『鳥と人間』（前掲書）、pp.13-14.

1987）は、昭和 9（1934）年に「日本野鳥の会」を創立した人物で、現在では一般に定着している「野鳥」という言葉の生みの親である。自宅で鳥を放し飼いしていた中西の暮らしぶりに、友人の詩人であり英文学者の竹友藻風（1891-1954）[49]が感銘を受け、鳥の雑誌を出すことを強くすすめた。鳥類学者の内田清之助や山階芳麿、民俗学者の柳田国男、言語学者の新村出ら多くの文化人の賛同と後援を得て「日本野鳥の会」を創立し、同年に中西は雑誌『野鳥』を創刊する。「野の鳥は野にあるように」と、籠のなかで鳥を飼うことと絶縁して放し飼いの鳥たちと生活をともにし、野鳥と自然環境の保全に一身をささげた。俗習として二百年以上行われてきた「霞網猟」[50]を七年半かけて阻止を求め、現在は「鳥獣保護及狩猟に関する法律」（1963 年成立）によって「霞網猟」は禁止されている。中西の活動は国際的であった。1948 年に「世界鳥類保護会議」の終身代表となり、後年に出席した会議では、世界の鳥学代表者と協議して「トキ」を国際保護鳥とした[51]。日本において、新潟県のトキ、富山県のライチョウ、兵庫県のコウノトリなど「都道府県の鳥」の制定を提唱したのも中西だった。東京オリンッピックや観光ブームに沸く当時の日本では、自然のなかを高速道路や山岳地への林道が切り拓かれてゆく。大型公共事業やリゾート開発、宅地造成に公害問題が加わり、野鳥の生息地と繁殖地が激減するなかで、中西は人と鳥の触れあいの場である「サンクチュアリ（野鳥の聖域 Sanctuary）」を作ろうとした[52]。中西によって拡げられていった「野鳥のサンクチュアリ」は、同時にそれが「人間のサンクチュアリ」でもあることを教えてくれる。中西悟堂は日本のハドソンである、といいたい。

寿岳文章、しづと中西悟堂

「日本野鳥の会」が創設された同時期に出版された、寿岳しづ訳『はるかな国 とおい昔』を中西が愛読したであろうことは想像に難くない。中西は自伝のなかで竹友藻風との交友について述懐している。「竹友君は以前からの詩壇づきあいで、同君の家を訪れた」こともあり、北原白秋らと詩会の帰りに、銀座の喫茶店で島崎藤村の「千曲川のほとり」を合唱するような間柄であった。「竹友君」は東京女子大学の英文学講義の帰路、すぐ隣にあった中

---

[49] 詩人、英文学者。三木露風のすすめで「藻風」の雅号を用いた。上田敏、新村出ほかに私淑する。雑誌『野鳥』の刊行を手伝い、自らも野鳥の観察と小鳥を飼うことに興味をもった。（笠原勝朗『昭和を彩った英文学者たち　生涯と書誌』[沖積舎、1996 年]、pp.179-80.）関西学院大学開設と同時に英文学の教授をつとめた。著書『エッセイとエッセイスト』（北文館、1927 年）、『書物と人』（斯文書院、1927 年）のなかでハドソンを紹介している。

[50] 小鳥捕獲用の網。細い絹糸で目立たないように編んだもので、高さ 4〜6m 幅 16〜20m の大きさで、山や森の木にしかけ、飛んでいる小鳥を獲えるのに用いる。江戸時代から行われてきたが、小鳥を一網打尽にしてしまうので 1947 年から狩猟法により、公務の渡り鳥調査以外は禁止となった。（『ブリタニカ国際大百科事典』）なお、「霞網猟」を文化としてとらえた記録映画『鳥の道を越えて』（今井友樹監督、1994 年製作）がある。

[51] 「中西悟堂年譜」『悟堂追憶』（中西悟堂追想文集刊行会、1990 年）、p. 478.

[52] 小林照幸『野の鳥は野に　評伝・中西悟堂』（新潮社、2007 年）、p.127.

西宅に立ち寄っては、中西が「オナガやムクドリに口移しで餌を食べさせ」たり「カラスやスズメやヨシゴイや鵜まで林の散歩のお伴につれて歩く」のに驚嘆の声をあげた。中西は英文学に出てくる鳥について尋ねられるが、イギリスの鳥まではわからない。そこで「竹友君」は「ハドソンの『ラプラタの博物学者』や『はるかな国とほい昔』、ギルバート・ホワイトの『セルボーンの博物誌』、ジェッフリーズの『わが心の物語』などを見せてくれたり、くれたりした」。とくに、「今も手許にあるハドソンの『ラプラタの博物学者』は故友の大切な記念であり、のちに寿岳しづ氏の『はるかな国とほい昔』の訳本が岩波書店から出たので、その原書は竹友君にお返しした。」と振り返る[53]。かつてハドソンが行商人からホワイトの本を与えられたのと同じように、中西悟堂は竹友藻風からハドソンの本を与えられた。そこに文学作品がもつ生命力の連鎖をみるようである。

やがてこの中西と寿岳文章とのあいだにも交友が生まれた。寿岳が記した「わが中西悟堂の思い出」という一文がある。関西学院高等部の文科と商科が大学に昇格する際、英文学の主任教授として竹友藻風に白羽の矢があたった。竹友が着任して学院のある仁川駅の近くに最初の居を構えた時、まず訪問したのは寿岳だった。「応接室の中を手乗り文鳥がひらひらと飛びまわっている」のに驚いてわけを聞くと、「愛鳥の趣味は、中西悟堂さんに教えてもらったのだと彼はそのいきさつを語った。」「私の姪たちの中で最年長者鈴木文子は、早くから「日本野鳥の会」の世話役をつとめたこともあるようだ[54]。」「私自身も『動物文学』の読者、また寄稿者であった関係上、おのずと中西との交渉もしげく」、「中西自身が我が家にやってきたこともたしかにあったと記憶する。」と、寿岳は当時を振り返る[55]。

---

[53] 中西悟堂『愛鳥自伝（下）』（平凡社、1993 年）、pp. 465-66.

[54] 寿岳文章の父は兵庫県西播磨の寺の住職であった鈴木快音である。『野鳥』第 47 巻 第 8 号（日本野鳥の会、1982 年 8 月）、p. 25. に、会員のインタビュー記事として「この人 鈴木文子さん」が掲載されている。向日庵には、寿岳文章の名が記載された「日本野鳥の会」の「会員名簿」が残されている。

[55] 寿岳文章と中西悟堂の交友を実証するものとして、「向日庵」に中西からの書簡が残っている。そのうち便箋五枚に及ぶ一通は次のような内容である。「拝啓　壽岳様御両所の御著作集の刊行されますことは待望のよろこびでございました。不朽の英知として後世にも残ることでありませう。既に『朝・歳月を美しく』『よき人を語る』『紙漉村旅日記』の三巻を頂いておりますが、このところ野鳥の会財団法人申請のこと、大台ケ原を守ることに併せて奈良と大台ケ原で行ひました野鳥の全国大会、自然奪回の組織運動等が重量いたし、特に財団化については全国五十の支部の意向をまとめて全国一丸とする必要から、大阪、金沢等の支部を歩いておりますなどのことから、御本のおん礼も申し遅れ失礼を重ねてをりました。楽しく三巻をバラバラとめくって拝見はしてをりますだけで、じっくり拝読に至ってをりません。それに『野鳥』の編集も小生の手許へ戻ってきて、落着きませんが、大体七月半ばで一応の一段落つきましたら是非とも拝読し誌上に御紹介もいたしたいと考えてをります。暫時の御猶予頂きたいと存じます。前に頂いた『本の話』は第 6 巻に入りますか。むかし御令室が訳されました『はるかな国とほい昔』は岩波の文庫本だけで別の本にはなさらぬのでせうか。（後略）　昭和四十五年六月二十日　中西悟堂　寿

雑誌『昴』（1979 年）に中西悟堂と寿岳文章の「往復書簡」が掲載されている。

「寿岳文章様　（中略）私も桑門に入り四度加行で幼名を捨てたのですが、寿岳さんが自他共に許す世界的学匠であるのにひきかえ、私は路傍の野仏がさまよい出たような者で、幼くして山中の荒行で鳥と親しみ、長じてインドの思想に触発され、私なりの野鳥保護運動を拓いて満四十五年になります。昔、御訳書のハドスンの自伝が愛読の書となり、新聞社などのアンケートで座右の書を問われるごとにいつも『はるかな国とほい昔』と『摩訶止観』を挙げる私でもありました。（中略）近年『神曲』を完璧訳され、これにブレイクの神曲挿絵を配された世界最初の御偉業は望外の喜びで、その脚註と解説を拝読致し、寿岳さんこそは最大のダンテ学の権威者と申すべきだと思うにつけ、この御大業が私共を導く恩顧を感謝致すのみであります。」と書き送る中西に返して寿岳も書きつける。

「中西悟堂様　この前お目にかかりましたのは、駐アルゼンチン大使をつとめられたこともある津田正夫さんが、有楽町の朝日新聞社講堂で、一九七二年八月十七日、没後五十年を記念するハドスンの夕べを催された折と記憶いたします。そのころは私たち夫婦もまだ旅行を億劫がらず、（中略）疲れも覚えず、ハドスンについて話しましたが、大兄は、私たちどもの何倍もお元気で、小鳥のように軽々と場内に歩を運んでいらっしゃいました。（中略）農家の藪へと続く庭先の木々には、いろんな鳥がやってきますが、それを見て必ず思うのは、野鳥のための大兄の立派なお仕事です。そして、台密と東密との差こそあれ[56]、共に四度加行をすませ、沙門の身となった私たち二人の、その後の行路をふりかえるにつけ、ここまで来ればそれぞれの祖師も、この恣意を許して下さると私は考えるのですがいかがでしょうか。」八十年以上の齢を重ねて老境に至った両者である。生きとし生けるすべてのものを差別なく愛する仏教的思想は、ハドソンをなかだちとして中西と寿岳の結縁をあたたかく育てたのかもしれない。

雑誌『動物文学』と平岩米吉

「地球の上には人間だけが住んでいるのではありません。また、人間だけで住んでいられるものでもありません。いろいろな生きものが、寄りあって、争ったり、助け合ったりしているなかに人間もいるのです。ですから、いろいろな生きものの生きる姿を、はっきり見きわめなければ、われわれの生き方も、生命というものの意味も、本当はわからない筈です[57]。」

岳文章様　御令室様」省略した文中には、中西が旅先で目にした野鳥 48 種と花木の名が便箋 2 枚にわたり記されている。

[56] 中西悟堂は海軍軍楽隊の父のもとに生まれたが一歳で孤児となる。石板と石筆を好んで、三歳の頃より「四書五経」を学び「千字文」を書写した。十五歳で僧籍に入り、現在の調布市にある天台宗深大寺において得度し、法名悟堂を得た。寿岳文章は真言宗高野派竜華院の住職の父のもとに生まれ、十一歳のときに長姉の寺に養子縁組をして得度し、名を文章と改めた。

[57] 平岩米吉「動物文学全集」（アルス児童文庫、1955 年）、片野ゆか『愛犬王 平岩米吉伝』（小学館、2006 年）、p. 3.

こう語るのは、雑誌『動物文学』を創刊した平岩米吉（1898-1986）である。

雑誌『動物文学』は「日本野鳥の会」の創立と同年の昭和 9（1934）年に創刊されたテーマを動物に特化した文芸誌である。「ロボー物語」（内山賢治訳 1935 年）を掲載して、『シートン動物記』の題名で知られるアーネスト・トンプソン・シートンの作品を日本で最初に紹介したほか、ハドソンの作品（岩田良吉訳）や『セルボーン博物誌』（寿岳文章訳）を掲載している。雑誌の主宰者として若い才能を発掘して育てたいと考えた平岩は、創作作品を募って、子どもが身近な動物とのふれあいを書いた詩や文章も掲載した。誌面構成からは、科学性と芸術性の両面を重要視した平岩の思いが伝わってくる。表紙に「生後四時間の小鹿」や「卵を守る蛇の母」など野生の生物の姿をとらえた写真を掲載し、扉にはアナトール・フランスやカレル・チャペック、ナポレオンなど、文学者や歴史に残る人物が動物について語った言葉を選んだ。

創刊号の扉には、文化 3（1806）年に田宮仲宣（1753?-1815）が著した『嗚呼矣草（おこたりぐさ）』[58] の一文が引用されている。「禽獣蟲魚には、爪牙觜角あつて類ひを害ひ物を傷ぶる。人に於いて鎗刀剣戟に比す。しかれども禽獣はみな天受の物にて、他を借り設しものならず。人の鎗刀剣戟は不具に備ふる器のみ。それ婦女にあつては、紅粉翠黛の妖艶を以つて國を傾け家を破り、丈夫に於ては巧言令色、讒諂面諛（ざんてんめんゆ）を以つて主心を蕩し同僚を倒す。人の蔭毒や深し。」とある[59]。つまり、動物や鳥、昆虫や魚が生まれながらにもつ鋭い爪や牙、くちばしや角は人に危害を与えるが、そこに悪意はない。それに比して、人が人に対して巧みに言葉を飾ったり、他人の悪口を言って媚を売ったりする、悪意ある行いは目にみえない「毒」である、という。「生きもの」に照らして「人の世」の本質を突く、『動物文学』の理念の一端を示している警句であるが、いつの時代にもどこの国にも、「人の世」が「動物の世界」に学ぶべきものは多くあるようである。

『動物文学』を基盤に平岩が発足させた「動物文学会」（1936 年 9 月発足）には、柳田国男、徳富猪一郎（蘇峰）、南方熊楠、中西悟堂、室生犀星、小川未明、与田準一など、分野をこえた研究者たちがメンバーとして名を連ねている。会の目的を「一、動物に関する文献の蒐集整理」「二、動物の生活の観察研究」「三、動物を主題とせる作品の創作」とし、「動物に対する認識と愛情を一般的ならしめ」「正当なる自然観人生観の確立に資する」ことを規約に掲げた。新宿中村屋、銀座竹葉亭、目黒雅叙園などで毎月のように開かれた定例会の内容は、上野動物園の園長による講話、平岩の家族が狼の様子を撮影した十六ミリ映画の上映、出席者が体験した動物とのふれあいや観察報告、動物に関係した各地の伝説などさまざ

---

[58] 『嗚呼矣草』は江戸時代の戯作者、田宮仲宣が著した随筆。五巻百三十條からなり、目録には、螺蛤、牛馬、蜻蛉、野狐詑、蚯蚓鳴（みみずなく）、就虫（かいちゅう）虎の子渡、などの題目がみうけられる。「著者は大坂の儒者にして、好事家なり。」とある。（『日本随筆大成　巻十』[吉川弘文館、1938 年]、p. 2.）

[59] 『動物文学』第 1 輯（白日荘、1934 年 6 月）

まだった。なかには人魚研究に熱心だった人物もいる[60]。平岩自身は、家族と暮らす「自由が丘」のモダンな屋敷のある土地をフェンスで囲んで、犬や狼や多くの野生動物を飼育した。「犬科動物」の研究家として『動物研究』にもっとも精力的に筆をふるったのも平岩だった。当時、日本人が野生動物の姿を目にすることができたのは動物園だけだった。明治 15(1882)年に日本初の動物園として上野動物園が開園されたが、飼育方法や調教方法についてのノウハウがなかった。飼育設備も充分に整わない条件のもと、野生動物の展示を継続させるのは容易ではなく、外国から贈られたキリンやゾウはすぐに死亡してしまったという[61]。『動物文学』の創刊当初から編集に携わり、誌上にハドソンやホワイトの文学を紹介した堀口守は[62]、「動物文学の根底には、精確な、微細な、透徹した生態観察がなければならない」にもかかわらず「非科学的な、漫然たる空想で造り上げた自称動物文学小説がいかに横行したことか」、だが「今日では大分理解されてきた。」と『動物文学』の足跡を振り返る[63]。

自然文学が伝えるもの

雑誌『動物文学』の愛読者であった寿岳章子は、創刊 60 周年を記念して「『動物文学』と我が親たち」という一文に幼少の頃の思い出を寄せている。「『動物文学』はずーっと我が家に送られてきていた。私はもともと動物物語が大好きなタイプで、ごく小さいときから『ジャングルブック』とか、『黒馬物語』とか愛読者になっていた。父の許にとどけられる『動物文学』は私のターゲットでもあった。狼や犬の心を惹く話がたくさんのっていて、こども心にも胸がわくわくするようであった。」続けて、文章が翻訳した『セルボーン博物誌』が「すさまじい物心の荒廃」の時代、「十五年戦争のもっとも悪しき時代にさしかかった頃」に掲載されたことに触れ、「声高に言うことはできなくとも、それは心あたたまる平和論だったのではなかろうか。人が殺し合いをするのはまちがっている、むしろ動物に学ぶべきだ、とは世界中の動物を愛する人たちの深い思いだったにちがいない。」そして、訳し終えるたびに「イワツバメがどうのこうの」と読み聞かせる父の声を子どもたちが「セルボーン経」だと称していた、その『セルボーン博物誌』を掲載してくれた『動物文学』こそ、「人やけもののやさしさを説く経典そのものであったかもしれない[64]。」と結んでいる。

中西悟堂、平岩米吉、ハドソン、ホワイトなどの野鳥や動物、野の生きものを愛した人々が現代に伝えるものとはなにか。自然界への憧れや畏怖、親子の情愛、生態から学ぶ社会性、生と死がつながりあう命、あるいは、自然保護や戦争と平和であり人間の生き方かもしれな

---

[60]『愛犬王 平岩米吉伝』(前掲書)、pp.102-3.

[61]『愛犬王 平岩米吉伝』(前掲書)、pp. 86-87.

[62] 堀口守「南英の動物文学」『動物文学』第 47 輯、第 48 輯（白日荘、1938 年 11 月、12 月）同著「ジェフリーズとハドスン 南英の動物文学 続南英の動物文学」同誌 66 輯（1940 年 6 月）がある。

[63]『愛犬王　平岩米吉伝』(前掲書)、p. 210.

[64] 寿岳章子「『動物文学』と我が親たち」(前掲書)、pp. 8-9.

い。それは、いつの時代、どこの国、どのような人にもかかわる普遍的な問いではないだろうか。自然を考えることは人間を考えることでもある。なぜなら自然界に生きとし生けるもののなかの、人間もそのなかの一種に過ぎないからだ。このように、野鳥や自然の観察にもとづく自然文学は、事実や発見の貴重な「記録」としてだけでなく、人としての生き方に対する視座までも与えてくれる。

「自然と人間の両方面からそれらの秘密の一つ一つに、できるならば探り入りたい。山の大きな蔭のもとに何百年何千年の生活を営んできた山の人々の生活感情にもはいってゆきたいし、山頂に近い岩角に落ちている斑入りの一枚の鳥の羽根にも、ハドスンのようなキュリオシティを働かせる私でもありたい[65]。」としづは記している。英語を学んで初めての翻訳作品として『はるかな国 とおい昔』に向き合って以来、ハドソンの自然を見つめる眼は、しづの社会と世界を見る眼へと育てられていった。

むすびに

寿岳しづは、市井の女性たちとともに社会を考え、行動したオピニオン・リーダーであった。「身の上相談」という呼称は、大正 3（1914）年に読売新聞が読者の投書に識者が答えるというかたちで掲載した記事がはじまりだが、1954 年にはしづも読売新聞の「人生相談」の相談役をつとめている[66]。女性が抱える家庭内の個人的な悩みを社会問題化する役割を持つ読者の「投書」は、『婦人之友』（前身は 1903 年に創刊された『家庭之友』）や『主婦之友』（1917 年創刊）にも掲載され、時代世相を映し出してきた[67]。恋愛、結婚、夫婦生活、教育、さまざまな悩みに寄り添い、それを社会の問題として捉えて進言するしづのもとには、相談者からの手紙が直接届くこともあった。とりわけ「読書」をすすめたしづは、英米文学の翻訳者として、外国文学の書評や外国映画の解説にも筆を執っている。

朝日新聞の連載記事「世界文学のヒロインたち　女性の生き方」では、「『四人の少女』ジョウ」をとりあげて自己の道を生き抜くヒロインを紹介している[68]。『若草物語』の題名で知られるこの四人姉妹の物語は、作者ルイザ・メイ・オールコット（1832-1888）が自身の体験をもとに書いた小説で、しづはこれを『四人の少女』の題名で翻訳出版した[69]。作品のなかでルイザは、自立するために作家を志望する次女「ジョウ」として登場するが、自己の道

---

[65] 寿岳しづ『荒野に歌ふ』（西村書店、1948 年）、pp.112-13.

[66] 読売新聞の「人生案内」の歩みについては、読売新聞生活部『きょうも誰かが悩んでる―「人生案内」100 年分』（中央公論新社、2015 年）に詳しい。

[67] 斎藤美穂「婦人雑誌における身の上相談―大正期を中心に―」『大正期の女性雑誌＜新装普及版＞』（近代女性文化研究会著、大空社、2016 年）に詳しい。

[68] 『朝日新聞　［大阪版］』1955 年 6 月 12 日掲載（向日庵資料、「寿岳しづスクラップ帖」）

[69] オールコット著、寿岳しづ訳『四人の少女（第一部）』（岩波文庫、1949 年）、『同（第二部）』（同、1952 年）

を生き抜く女性として、ルイザとジョウとしづの姿が重なりあう。『四人の少女』はいわば「オールコット版『朝』」であるといえよう。

しづは「京都婦人懇談会」(1954 年発足)、「毎日婦人文化センター」(1955 年開設)、「憲法を守る婦人の会」(1965 年結成)[70]などの活動を通して平和と自然保護についても訴えた。当時のソ連の核実験によって、オーストラリアのタスマニア沿岸に数百羽の渡り鳥が、死体となって打ちあげられていたという NASA 通信の報告を知り、「死の灰はもちろん私たちの間にも恐怖と怒りをまきおこし、核実験国への抗議となっているわけだが鳥たちは何も知らないで、アンバランスな人間の知恵の犠牲になった。」と正しい科学のあり方について問題提起する。そして「残酷なことにせよ、自然界のできごとは了解できるが、人間界の無慈悲や冷酷さは全く理解できない」といい「文明の名のもとに、人間が自然界のすばらしいものを絶滅させるのを憎悪」したハドソンが、もしも今生きていたならどんなに怒るだろうか、と語る[71]。また、「青少年を育てる京都会議」幹事をつとめたしづは、「衝動的にではなく熟慮の末勇気をもって行動してほしい。人の思惑などにはとらわれずに。」「協力の大切さを理解し実行するとともに、自己を見失わぬ強さを持ってほしい。」「失敗や不幸にめげないで、次の成長への一段階としてほしい。」と若者にメッセージを贈っている[72]。

このように、社会の真実や人の生き方を「文学」という糸によって紡ぎ、現実の社会に生きる人間が直面する普遍的な問題に向き合ったところに、寿岳しづの文筆活動の真骨頂がある。自然賛歌とは人間賛歌であり、他者にも自己にもわけへだてなく愛情をもつことの貴さに気づかせてくれる。そして、読書を通して知る人間の本質を文学世界の内側にとどめることなく、現実の社会のなかでよりよく生きるための行動へと繋いでいった寿岳しづの生き方は、どのような状況にあっても誰もが自己の可能性を拡げることができることを教えてくれるのではないだろうか。

謝辞
この論考は、「生誕 120 年　寿岳しづ展　～書いて、暮らして、ともに生きて～」(於：向日市文化資料館　会期：2021 年 1 月 23 日～3 月 21 日）を開催するにあたり行った向日庵資料調査にもとづく。ここに記して関係者の皆様に感謝を申し上げます。

---

[70] 寿岳しづは 1965 年の「憲法を守る婦人の会」結成大会で代表を務めた。(『京都の婦人のあゆみ　京都戦後婦人運動小史』[京都の婦人のあゆみ研究会編刊、1976 年]、p. 219.)

[71] 寿岳しづ「渡り鳥の死」『山陽新聞』(1961 年 11 月 24 日、向日庵資料、「寿岳しづスクラップ帖」)

[72] 寿岳しづ「幹事寸言　歴史から正しい指針を」[「青少年を育てる京都会議」リーフレット] p. 8.（向日庵資料）

新村出と寿岳章子――資料紹介を中心に

新村 恭（新村出記念財団嘱託）

Ⅰ　往復書簡の紹介

新村出記念財団重山文庫は、寿岳文章・しづ・章子との往復書簡を所蔵しており、それは同文庫のホームページにリストアップされている。今回は、寿岳章子とのものを、戦後初期のものに限って紹介する。章子が戦禍をはさんで東北大学を卒業し、京都大学の大学院に進む時期にあたる。新村出は、昭和 21（1946）年 10 月 4 日、満 70 歳であった。

寿岳章子は、文末に「乱筆」「悪筆」と記しているが、先生宛なので丁寧に書かれている。新村出のものは、ちびた筆で思うままに書いており、読みづらいところがある。

改めて読んでみると、完全には揃ってないと思われる。向日庵の新資料に新村・寿岳書簡が含まれているかもしれない。

＊漢字は新字体に改めている。ただし、「寿」と「壽」は書き分けた。仮名遣いは原文のままであるが、２字大の反復符号は使わず、文字を繰り返して表記するかたちにした。適宜濁音符と句読点を付している。〔　〕は筆者の注記である。言うまでもなく、新村出のごく一部のメモを除いて、縦書きである。

昭和 21 年 1 月 19 日、寿岳章子新村出宛書簡

・〔封書、巻紙、毛筆、10 銭、消印・向日町 21.1.19〕

京都市上京区小山中溝町一九　新村出先生

京都府乙訓郡向日町西向日　壽岳章子

一昨日は長時間にわたり御邪魔申上げ、色々のおもてなしまであづかり誠にありがたうございました。よく冷えます寒い日でございましたのに、お厭ひもなく、さまざまの御物語、何時もながらに先生の御厚情に深く感謝して帰途についた事でございました。あんなに長居をさせて頂きましたのはよいものゝ、先生の御身体に御障りはなかつたのであらうかと御案じ致しております。且つ私のうるさい事物まで御ていねいに御導きを下さいましたありがたさは身にしみるやうでございました。御話しのおかげで、仙台にゐる以上に学んでゐるといふ気持が燃え立ち、在京の一日々々が誠に有意義に思はれて、大そううれしく感じました次第でございます。

家にかへりまして色々考へております中、先生に御たづね申さうと思つてつい忘れてゐたことを思出したのでございますが、大倉流〔大蔵流〕の古本狂言は相当資料価値を持つものと思はれますが、室町期の口語研究上、やはり重大な一材料とした方がよろしうございますでせうか、御示しを頂ければ幸ひと存じます。

何分大学二年生といふ油の乗るべき大事な年を工場生活にて、すつかり棒にふつてしまひ、機械が休んで錆びついては中々動きかねますやうに、ぎくしやくした運転困難の勉学生活でございまして、我ながら情なく、何かにつけて空白の昨年が口惜しくなるのでございましたが、これからの学びの生活をたのしみに、さゝやかでも未来へ伸びるもとになる勉強を心

がけて行きたいと存じてをる次第でございます。
寒い二三日が続きましたけれども、今柔かい日ざしが雲間から洩れてまゐりました。寒が明けて、春が来てやがて花が咲く早春の向日町を訪れて頂くことが出来ますものと、あたゝかな夢を追ふやうな気持で母と話し合つたりしてをります。
二十一日からは大寒で比叡の風も一きはきびしくなりますことゝ存じ上げます。何とぞ御身くれぐれも御いとひ下さいますことを念じ上げます。
古来の悪筆定めて御読み辛いことゝ恐縮致して、御礼を一言述べさせて頂きました。

かしこ

一月十九日　壽岳章子
新村出先生

昭和 21 年 1 月 26 日、新村出寿岳章子宛書簡

・〔葉書、毛筆、５銭、消印・西陣 21.1.27〕

京都市外乙訓郡西向日町上植野　壽岳章子様
京都市上京区小山中溝町十九　新村出　21-1-26 pm

先般おたのみの本、本日夜京大研究室より持ち帰り候。いつにてもお出で被下度、十時半ころより以後に候はば当方好都合に候（二月二日はさしつかえ候）。そのをり狂言の本の事もよくおはなしうかゞふべく候。草々

昭和 21 年 1 月 31 日、寿岳章子新村出宛書簡

・〔葉書、毛筆、５銭、消印・向日町、□□31（５銭＝1945.4.1～1946.7.24）〕

京都市上京区小山中溝町一九　新村出先生
京都府乙訓郡向日町西向日　一月三十一日　壽岳章子

先日は突然御伺ひ申し上げたところ、寒い日にもかゝはりませず、色々御指導下さいまして誠に有難う存じました。あまり長時間御邪魔をしすぎたと、家へ帰りまして、たしなめられた始末でございます。
「乗合ぶね」〔新村出命名の和歌の同人誌〕の件は、不出来にはなりませうが、おうけさせて頂きたいと父が申してをります故、何か出来ます事と存じます。
河上博士がおなくなりになつて〔河上肇、1946 年 1 月 30 日歿〕、何となくうらさびしい夜を感慨にふけりつゝ送りました。終戦以来は父も一度もおたづねしてなかつたので、残念に存じてをります。
漸く寒もあけやうとしてまゐりました。御忙い先生の御健康のため、あたゝかい中にはるが来るやうにと祈つてをります。　かしこ

昭和 21 年 8 月 25 日、寿岳章子新村出宛書簡

・〔封書、巻紙、毛筆、30 銭、消印不見（30 銭＝1946.7.25～1947.3.31）〕

京都市上京区小山中溝町一九　新村出先生
京都府乙訓郡向日町　壽岳章子

日中は中々日ざしもきびしうございますが、朝夕はめつきり秋めいてまゐりました。遠い所で聞いてゐたやうなつくつくぼうしが耳もとまで近づき、こきざみな秋風に心をどろかされたり致します。その後先生初め皆様はお変わりなくお過しでいらつしやいませうか。
先日はおあつい所を長時間にわたりまして色々お話下さいました。まことにありがたうございました。数ならぬ私のやうな者のことまであれこれ御配慮下さいます御心のほど何と御礼申上げてよいやら家中の者が感謝の気持でいつぱいでございます。
御葉書〔新村出寿岳文章宛、8 月 18 日付、「エハラ氏」宅の地図入〕を頂きまして早速二十二日午前、頴原先生のお宅へ父に伴はれて参上致しました。暑い日でありましたが、先生はすぐお会い下さいまして、午近くまでさまざまお話下さいました。江戸語研究は中絶してゐたが、是非やりたく思つてゐたからとおつしやいまして、快く弟子入りをおゆるし下さいましたので、私もほつと安心大へんうれしく存じました。それと申しますのも、ひとへに新村先生のおかげと思ひました。その御恩に少しでも報いるやう努力しなければと心にちかつたことでございます。御膳立てばかりそろひましても、空つぽの人形のやうにひつぱられて踊つてゐてはつまりませんから、この上はよき環境に生ききる自主的な力を養はうと決心致しております。不束者ではございますが、この上ともよろしく御願ひ申上げます。
残暑が中々きびしうございますから、どうぞ御身を十分おいとひ下さいませ。
簡単ながら御礼かたがた御報告まで。　かしこ
　八月二十五日　　寿岳章子
　新村出先生

昭和 21 年 10 月 8 日、寿岳章子新村出宛書簡

・〔封書、巻紙、毛筆、30 銭、消印不見（30 銭＝1946.7.25～1947.3.31）〕

京都市上京区小山中溝町一九　新村出先生
京都府乙訓郡向日町　壽岳章子

久しく御無沙汰申上げましたが、先生初め皆々様はおかはりなくお過ごしでいらつしやいませうか。一雨々々秋がしみじみと訪れてをります。京都の地へ九月三十日の真夜中近く帰りつきました。汽車は超々満員で最後まで苦しい旅の連続でございましたが、とにもかくにも学校を卒業させて頂きまして、家に落着いた次第でございます。
かへりみますと誠に多事多端な三年間でございまして、動乱のさ中をくゞりぬけて来たやうな感にうたれますが、その間を通じて終始先生の御好意にあづかり、時には御本を拝借し、時には学問上の指導となるべきさまざまの御ことばを、時には生活上の御配慮を頂き、実に在学時代の基底となるほどのさまざまの御心つくしを頂戴致しました。数ならぬ身をふりかへつてほんたうに勿体ない気持が致すのでございますが、とくに無事卒業するに当りまして、あつく御礼を申あげる次第でございます。
いよいよ学校を出て思ふ存分自己の世界を拓いてゆかねばなりませんが、何事につきても経験浅く才足らぬがちの私のこと故、これからも何かにつけ先生の御力ぞへにあづからねばならぬと存じます。不束者でございますが、どうか今後尚よろしく御指導下さいますやう

伏して御願ひ申上げます。
早速御挨拶に伺ふ筈でございますのに、何だかだでがたがたしまして、ついつい失礼申上げました。追つて一寸親類に所用がありますため、今月中は家をはなれますので、十一月に入りましたら一度参上致したくぞんじてをります。その節、江戸語研究の書物二三拝借させて頂きたう存じます。
気候のかはり目でむしあつかつたり、うす寒かつたりしてをります。どうか御身をおいとひ下さいまして、御風邪など御召しになりませぬやう願ひ上げます。
乱筆乱文ながら一言御礼の御あいさつまで。　かしこ
　十月八日　　寿岳章子
　新村出先生

昭和 21 年 12 月 26 日、新村出寿岳章子宛書簡

・〔葉書、毛筆、15 銭、消印・西陣□12□〕

京都市外乙訓郡西向日町上植野　壽岳章子様
昭和二十一年十二月廿六日　京都市上京区小山中溝町十九　新村出

きのふは失礼、あいにく時間乏しくおはなしを早々きりあげざんねんでした。けふ運よく遠藤助教授来話あり、よくあなたのことを精しくたのんでおきましたから、新年早々願書を出すやうになさいまし。澤瀉教授もその中に全快、出動と存じます。潁原講師にもやがて会へることと思つてゐます。パパ、ママ御大切に。草々

昭和 22 年 2 月 4 日、新村出寿岳章子宛書簡

・〔封書、巻紙表裏、毛筆、30 銭、消印 22.2.5〕

京都府乙訓郡西向日町上植野　壽岳文章様内　壽岳章子様
昭和二十二年二月四日　京都市上京区小山中溝町十九　新村出

寒さのきびしさ立春ながらゆるみもせず耐へかね候が、御元気のやうにて洵に喜ばしう存候。御両親様も御健勝のよし大慶に存候。三月の末にはあがり得べくとたのしみをり候。振分けの連翹すでに早々軒をしのぎをり候がこの初冬落葉後ほどなく、冬芽きざして早春を予約せるけはひ、万葉にいはゆる冬ごもり春の予覚、老人をよろこばせ、なぐさめ、又はげまし候ひしことに候。すでにアヲキ、沈丁華、ニハトコ、殊にコブシの芽などのふくらみに、前途を楽観せしめ、冬季を闇路の程に、陽春と光明を思はしめつゝも、ひたすら火鉢、いな埋火にしがみつき読書に寒さを忘れんといたしをり候。御老父様ごぞんじの名詩 JAMES THOMSON : THE SEASON の冬や春の篇をひもとき、うれへつ、たのしみつ、日を送りをり候次第に候。
本日『展望』十二月号到来、肇翁の回想録を拝読する機会に接しをり候。卅日の一周忌は御老父さまお出ましかと存候。末川氏にもそのことを申し出でながら、又もや引こもりて、情をつくさず、礼をうしなひし候不本意のいたりに候。本日（四日）午後、御書状に接せし直後、実に幸にも、澤瀉博士来談に付、貴嬢のこと、委細紹介（エンドウ、エハラ二氏のことをも附加へ）今後の指導たのみおき候間、もはや小生の名刺も不要ながら、為念二葉同封い

たしおき候〔澤瀉久孝様宛壽岳章子紹介の加筆名刺、一枚同封あり〕。内々にはすでに御存知となるべくも、小林好日教授〔よしはる、東北大学教授〕の学位論文（方言学？）も澤瀉氏の審査にて、旧臘とやすでに通過のよしにつき、まことによろこばしく存候。
エンドウ氏には、貴嬢を紹介せざりしが、或はそれとも旧臘来談のをりに一言せしかともおもひ居り候も、老耄の記憶薄弱か不確に候。好機あらば（又忘却せずば）直接にも申し通すべく候。
願書は二月中か三月初め抔がよろしかるべく、入学許可に候。正式に四月の新学年より聴講登学がよろしかるべきも、貴見の如く適当なる早期におあひになりおく方よろしきかと存候。御訪問は貴嬢一人にてもよろしかるべく、御父さま並一しよの方更によろしきも、御繁忙中を煩はさるゝにも不及かと存候。澤瀉氏へは研究室乃至図書館にても自宅にてもよろしかるべきも、デンワにておたしかめ〔末尾に朱字で P.T.O.とあり。以下裏面〕可くやと存候。
その後もエハラ氏には、しばしば訪ひつ訪はれつ、をりにふれて貴嬢のこと、話題にのぼり候へども、かう寒くては、「言語」のことは「ハル」をまち「スプリング」をまつの外なく、だゞ「沈黙」にても「言説」にても、金も銀も何せんに、吾抔が物いへば唇どころか、おなかの底も寒きこゝちいたし候。惟然の句に

　　冬ごもり人にものいふこと勿れ

とあるをおもひ起して筆を擱き申候。口よりも唇よりも、第一手がかじかみ候まゝ、これにてやめ申候。みなみなさま御大切に。

　　昭和二十二年二月四日　　新村出
　　壽岳章子様

昭和 22 年 2 月、寿岳章子新村出宛書簡

〔昭和 21 年 8 月 24 日の書簡に同封保存、同じ紙、毛筆、内容から昭和 22 年 2 月下旬のものと推定〕
追々に暖かになつてまゐります様で先生もさぞおよろこびのことゝ家中でお噂さ申し上げてをります。春が来るといふことは、こんなにうれしいことかと、また事新しく思はずはをられぬ様ふ柔い日ざしがつゞいて、ほんたうに結構でございます。
先生を初め御一家の皆さま御小さひ方々も御すこやかに早春をおむかへになりましたことゝ存じ上げます。おかげさまで、私方一同も無事でございますが、母はいつもの通り半病人で家中の気がゝりとなって居りますが、それも春となりますと、やゝ良くなりますのが、例年の事でございますので、ひたすらはるを待ちのぞんでをる次第でございます。父はちよいちよいかぜをひいたりしてをりますが、元気に仕事にはげんでをります故、他事乍ら御休心下さいませ。
さて先日お忙しい所を早速に御返事を下さいまして、まことにありがたうございました。いつもいつもの先生の御厚情をほんたうに勿体なく感じた次第でございます。
あれから御二人の先生に御手紙を出しまして、遠藤先生には二月十六日研究室で、澤瀉先生には二十三日御宅でお目にかゝらせて頂き、それぞれ御あいさつ申上げました。十六日は頴

原先生も学校にお見えでございましたので、先生にもお話出来て幸ひでございました。諸先生の御話によりますと、願書は三月末がよからうとの事でございました。
それでいよいよ四月から大学院へまゐることになりましたが、これも全て何から何まで先生のおかげと思ひまして、ほんたうにありがたく思つてをります。又それを只の万分の一でもお報い出来るやうに仕事をしたいと念じてをります。
では皆々様、御身おいとひ下さいませ。乱筆ながら御報告かたがた御礼まで。　かしこ

昭和 22 年 3 月 10 日、新村出寿岳章子宛書簡

・〔絵葉書（正倉院）、ペン書、15 銭、消印不見〕

京都府乙訓郡西向町上植野　壽岳章子様

昭和二十二年三月十日　京都市上京区小山中溝一九　新村出

数日まへ、やつと「失調」のうぐひすをきゝ、連翹の芽ぶきをみるに至り候ひしところ、又さえかへるさむさに冬ごもりに立ちもどりをり候。けふ久々にて、穎原氏来訪に際し、しぜん貴嬢のはなしも出で候が、来学年も近より候まゝ、こゝ一段お気のりと、老人心はずみいたし候。同氏の『江戸時代語の研究』（キク判三〇〇頁）を今夜あちこちよみ申候て、益をうけ申候。その中におよみになると存候。

〔以下絵の余白〕小山居閑吟より

連翹の落葉しはてる蔓枝に冬の芽すでにあらはれにけり（丙戌十二月十八日）

連翹のつるの冬芽いまだかたしうながす春の雨まちかねつ（丁亥二月廿日詠）

ささなきのうぐひすも来ず朝夕も雀児なかず春浅みかも（同）

余末、おとうさんおかあさんお大事に。
「久方の文路は遠し直々に」ですよ。

Ⅱ　若干の解説

寿岳章子の学びの跡――東北帝国大学、仙台での暮し

寿岳章子は、昭和 16（1941）年 4 月に京都府立第一高等女学校（現、鴨沂高校）から京都府立女子専門学校に進み、昭和 18 年 9 月に大学入試を受けて卒業し、同 10 月に東北帝国大学法文学部に入学した。入学が 4 月でなく 10 月になったのは、戦局が深まるなかで、卒業を半年繰り上げるよう、お上からお達しがあったためである。当時、女子の入学をゆるしていたのは、７帝大のなかで、東北大学と九州大学のみであった。

東北大学は、先駆的に大正２（1913）年から女子の入学を認めていた。昭和 18 年の入学者は、それまでになく多数で９名だった。みな向学心が強く、家庭の理解と一定の経済力があった人たちである。家庭の理解という点では、寿岳家、文章・しづを両親にもつ章子が一番ではなかったかと思われる。専攻は、国語２名、国文３名、哲学２名、心理学と国史各１名であった。苦難を経ての卒業後は、研究者・教育者になった人が多い。１名が亡くなり、８名での座談会と執筆による『東北帝国大学女子学生の記録――昭和十八年十月に入学し

て』が私家版で出されている（1998 年 8 月）。

寿岳章子は国語学専攻で指導教官は、新村出の昭和 22 年 2 月 4 日付書簡にある、小林好日教授である。寿岳章子は頻繁に京都の家族宛に手紙を出しており、それは『東北発信』として出版されている（大月書店、1984 年）。10 月 1 日の入学式のすぐあと、10 月 3 日の書簡で「小林先生」が登場している。『東北発信』では、勉学への強い意欲が表れている。フランス語をとりたいのに、先生が不在でなかなか開講されないことへの不満が繰り返されたりする。以下、同書から新村出と国語学関連の部分を抄出する。

「もし古本か何かで『韻鏡』がお手にはいるようなときは買って下さいませね。」（昭和 19 年 6 月 18 日）

「新村先生に借りました本も三分の二近くよみました。事がおこらぬうちにおかえししたいと思っております。」（昭和 19 年 9 月 13 日）

「『東方言語史叢考』〔新村出著、1927 年、岩波書店刊〕は興深く一月足らずかけて読了いたしました。」（昭和 19 年 9 月 23 日）

「辞苑は全部見ましたから別紙を御覧下さい。〔新村出編『辞苑』の紙関係の項目の摘出〕」（昭和 19 年 10 月 15 日）

「今はエスペルセンの御本を読んでおります。〔著名な言語学者、新村出が言及すること多い〕」（昭和 19 年 10 月某日）

「支那語は先生が支那におかえりになったのでずーとありませんでしたが、支那文の小川先生（ユーコンの弟君）がやって下さる事になり、十一月四日より始まりました。〔湯川秀樹の弟、小川環樹先生〕」（昭和 19 年 11 月 6 日）

「『喜界島方言集』と『国語及朝鮮語のため』は既に所持しています故適当に御売却下さい。この間『古代語新論』売りました。」（同上）

学徒動員、仙台空襲、終戦

年明け昭和 20 年 1 月には授業が停止になり、寿岳章子は仙台東方郊外、苦竹（にがたけ）の陸軍軍需工場に勤務することになった。現場で作業に携わるのではなく、事務係として、大学生、二高生、中学生等の学徒動員者の受け入れ管理業務をしていた。環境が激変し、自分の自由になる時間は少なく、2 月 18 日の両親宛の書簡では「私には長い長い一ヶ月、あまりに事多き一ヶ月でありました」（前掲『東北発信』）とある。食糧難で栄養失調も普遍化し、病に倒れる同僚も多かった。健康な章子は、看病に忙しくもあった。

望郷の念も強くなっていく。4 月 10 日には「新村先生はお元気でいらっしゃいますか。いつもならばまた父上とそろって御家へ伺って気炎でもきかせて頂いている頃でしょうに。れんぎょうを見にいらっしゃいましたか？」と書き送っている。悲痛の声もあがる。「お母様！　すっかりつかれましたよ。ナミダ……」（前掲書、6 月 6 日）。「敵機」の襲来も多くなっていった。なお、現在も重山文庫の南庭に咲く連翹は、新村出の昭和 22 年 2 月 4 日付書簡にあるように、寿岳家から「振分け」てもらったものである。

そして、7 月 10 日の未明、2 時間にわたる仙台空襲によって、比較的大きな家だった章

子の下宿先の屋根に焼夷弾が降り注いだ。屋根にのぼり、火叩きで２個落としたがかなわず、全焼してしまった。居所を失った章子は、罹災証明をもらい（これがあると国鉄は無料だった）、東海道線は避け、郡山から磐越西線で新潟に出て北陸線系由で京都に帰った。着の身着のまま、ドロドロの体であった。

８月 15 日の「玉音放送」は、仙台の友人宅で聞いた。新たな下宿先を探すのは大変な状況だったが、幸い両親が紙漉村行脚の際に取材に訪れ、親しくなっていた阿部亮作家（現仙台市太白区）に寄寓することになった。混沌とした、激しいインフレーションの時代であった。冒頭の寿岳章子の新村出宛書簡の「大学二年生といふ油の乗るべき大事な年を工場生活にて、すっかり棒にふってしまひ……」という実態の概要が以上である。

資料として掲げたのは、明けて昭和 21 年、１月に帰省中に書いた、やや落ち着いて学問の道に進み、卒論を書き、大学院に進学する時期の書簡から始まっている。大きな変革期であり、章子は国語問題にも関心を持ち、「アメリカ式皮相なる能率主義、またアメリカ崇拝よりおこる国語改革主義であります。文化とことば、ことばと民族精神の融合に無知である人々があまりにも多くいます」と家族に書き送り（前掲書、昭和 20 年 10 月 25 日）、「ローマ字論がいよいよ本格的になって来たので憂慮にたえません。それは日本文明以上に、東洋文明の否定となります。私は早く卒業して、そういう方面にも発言したいと思っています。ローマ字にする必要などこれっぱかしもありません」と述べる（同前、昭和 21 年４月 10 日）。このあたりは、新村出の感覚と近く、会談によって影響を受けた可能性もある。

東北大学卒業、京都大学大学院へ

寿岳章子は、卒業論文作成に際して、家族に新村出の応援を依頼する手紙を出している。

「卒論を書こうという尖った気持。……私は決心して演習をすましてさっさとかえる事にしました。それで中旬には帰京しますが、急いで次の事項のお返事をねがいます。大至急。……

一、新村先生から『三河物語』を拝借できるか否や。（……もし駄目だとすると学校から借りますが、期限が一ヶ月でちょっと困ります）

一、新村先生の持っておられた『寛永三年木活本史記抄』は今どこにあるか、一見させていただく事が出来るか、あるいはまだどこかに疎開中であるか。」（前掲書、昭和 21 年６月某日）

これをうけて、父寿岳文章は書簡で伝え、新村は即座に探しておくと返信している。

章子は昭和 21 年９月、評価の高い卒論、「室町時代における『の』と『が』」を提出して東北大学を卒業し、京都に帰る（卒論はのちの 1958 年、「室町時代の『の・が』――その感情価値表現を中心に」として京大国語学国文学研究室編『国語国文』に収められている）。「超々満員」の列車であったことは、10 月８日付の新村出宛書簡で様子がわかる。

その後、22 年４月からの京大大学院進学に向けて、新村出のサポートぶりが、書簡から窺える。「澤瀉博士」等は京大の国語国文学科の澤瀉（おもだか）久孝教授で万葉学者、「ヱンドウ氏」等は遠藤嘉基（よしもと）同助教授で、漢文を読む際の訓点についてが研究の中心であった。「エハラ氏」等は頴原退蔵同講師、近世の俳諧の研究で名高い。

ここからは、新村出の、頴原退蔵への積極的な紹介の意図がみられる。私の知る新村出から推察すると、近世語の分野が手薄なこともあって勧めたように思われる。しかし、結果的に寿岳章子は中世から近世には向かわなかった。頴原退蔵が、間もない昭和 23 年 8 月に亡くなってしまったことが影響しているとも思われる（拙著『広辞苑はなぜ生まれたか――新村出の生きた軌跡』世界思想社、2017 年、131-133 頁参照）。

寿岳章子は、無事京大の大学院に進学するが、苦難の中の東北大学での経験では、生え抜きの同学たちとのレベルが違うことに悩み、スランプの時期があったと述懐している（寿岳文章・寿岳章子『父と娘の歳月』人文書院、1988 年、109-111 頁）。当時の社会状況からくる、女性の悲哀でもあるが、強く生きたと言うしかない。

新村出と寿岳章子

寿岳章子は、新村出の影響で国語学に志したかというと、そうではない。父の寿岳文章は言う、「絵本はもとより、何でも手あたり次第に読むのがすきな章子は、小学生になるずっと前からかなりの数の文字を覚え、親の気づかぬ間に、お櫃の蓋にびっしりと鉛筆で文字を書きならべて、母親を驚かした思い出がある」（『過ぎたれど去らぬ日々――わが少女期の日記抄』「あとがき」大月書店、1981 年）。同日記は章子が府立第一高女の時のもので、今では考えられないが、学校から書いて提出することを課せられていたものである。4 年生の 9 月 2 日には「最初の授業日、はじめ国語、方丈記のことのお話色々。カタカナで書いてあると伺って驚いた。カタカナって何時からあるのかしら、日本の文字も面白いと思った」とある。こうしたことから、章子の志が先にあったことは明らかだと思う。

そして、「父壽岳文章が御尊父新村出先生に大そうかわいがられていて、……父は国語学を志した娘に、その道の大家である新村出先生を知らせたかったので、よくいっしょに出かけた。そして後には私単独で何回も、とりわけ東北大学に入ってからは、帰省の度ごとにあつかましくおうかがいしたのである」（新村恭編『緑の樹――新村猛追想』1995 年）と回想されている。Ｉで紹介した往復書簡は、まさしくそのことを表している。

最後に、この機会に、資料を離れて、お題にしたがって、両者に通底するものを、感ずるままに述べておきたい。当然ながらの、もろもろの違いを捨象してのうえである。

一つは、研究者として業績はありつつも、体系化して仕上げる方向には向かわず、学究の徒として閉じた世界にいたのではないことである。新村出は厖大な著作をのこしているが、初期のものを除いて、ほとんどが随筆であった。学術・文化・教育に関わることどもに広く貢献した。寿岳章子も「国語学者、エッセイスト」と称され、国語学の論著も数多くのこしているが、まとめられることはなく、他方で多くの一般向けの著作を出している。京都府立大学で 36 年間教鞭をとり、新村出記念財団の理事長を 9 年間務めた（理事を含めると 20 年）。旺盛な社会活動も知られている。

二つ目は、人々の生き、暮らしてきたあとに強い愛情を注いだことである。そもそも言葉はその表れでもある。その延長に、景観や街並みを大切にする意識があったと思われる。新

村出は、戦後の景観論争の嚆矢である「鴨東線問題」で、鴨川の景観を守るために、京阪本線が三条から出町柳まで地上に延伸するのに反対し、生涯一度だけ政治にかかわり、中心的役割をはたした（前掲拙著、117-119 頁参照）。新村出は、京都では、近現代的発展は一定の制約を受けるべきとし、リクリエイトのために静かさが必要な場所であると述べている。寿岳章子の想いは、向日庵の講演で中村隆一氏が紹介された（『向日庵 3』2020 年 1 月参照）、寿岳章子文・沢田重隆絵『京都町なかの暮らし』『京に暮らすよろこび』『京の思い道』三部作（草思社刊）によく表出されている。京都の歴史に愛情をこめながら、時代の流れも感じつつ柔らかな文で綴っている。そして、京都ホテル問題、京都駅問題でも反対して宣伝カーの上で演説したことを、筆者は直接伺っている。

三つ目は、平和主義者であることである。憲法第 9 条を愛する寿岳章子の『ひたすら憲法』（岩波書店、1998 年）がある。新村出の「平和」と色紙に揮毫したものの写真を掲げておく（入江貞子氏蔵）。

私は向日庵の講演「寿岳文書の生きた軌跡と新村出」（『向日庵 2』2019 年 2 月参照）で両者に通底するのはヒューマニズムであると述べた。それは、文章・しづから章子に伝わり、受け継がれたと感じられる。

慈父・文章先生

草川 八重子（小説家）

壽岳文章先生が誕生された時の名は、小林規矩王麻呂であった。それが鈴木姓になり、10歳から壽岳になられた。

「夕べ1番古い友から電話がありましたよ。キクちゃんと呼ばれると、面白いものですね。自分もその頃に戻って『おう、なになにちゃんか』と喋ってましたよ」

幼友達からの電話が、一人で留守番をされる夜に、よほど嬉しかったのだろう。勝手口に自転車を止めて、ドアを開けたばかりの私に、先生のご気嫌のいい声が跳ねてきた。私がキクちゃんて？という顔をしたのだろう。初めて先生の「親がつけてくれた名前」を知った。

「エーッ、そんなお公家さんみたいなお名前だったんですか」私は驚いた。「文章」は得度されたお名前であること、壽岳家に養子に行かれたことは『自伝抄』や『わが日　わが歩み』などの書物で知ってはいた。

「生まれた家も、養子に行った先も、播磨の貧乏寺でねぇー」先生は話の節々で、何度か繰り返された。感じやすい時期に、さまざまなご苦労をされたのは、私にも想像出来た。そのご苦労はすべて、先生の人間の大きさ、やさしさに化学変化のように作用したと思う。

得度されたのは養子先の寺である。子どものできない姉の嫁ぎ先だが、なじみのない家だった。古畳が杉の皮色になっているのは同じだが、ここには親も兄弟もいない。ただ先生は義兄が「文章」と名付けてくれたのを、感謝されていた。「わたしのゆくべき道を、自ずから示す名前になった」と。

小学校を終えても、宗門の中学（東寺中学）にすぐ行くことはできなかった。1年間の学費を節約するために、土蔵の 2 階を孤独な勉強部屋として、講義録を頼りに独習されること 3 年、それで中学 2 年生に編入されたのだった。その3年間が、内省的で考え深い少年の感性を更に深く、繊細に育てたのは間違いない。後に住井すゑさんとの対談（『時に聴く』人文書院、1989 年）で、部落差別から天皇制、宗教、生き方の真髄を問い、語る、迫力の反骨同士の対談でも、生い立ちを原点として、ご自分と世の中を語っておられる。嘘やまがい物一切を見抜く視力を鍛え、研ぐ基礎が、土蔵の 2 階で培われたと話しておられる。

直接伺ったのだったが、先生が養子に行かれる前年であったと記憶されていた。ならば9歳である。ある日、赤ん坊とともに母が消えた。夜になっても帰らない。翌日もその次の日も母は戻らなかった。

母親が明石の短歌結社に所属して、歌を詠んでいるらしいことは感じていた。和紙を束ねた小さな帳面を懐から出して、時々手早く何かを書きつけている母の記憶がある。3 か月に 1 度、赤ん坊を負ぶい、峠をいくつも超えて、明石へ出かけてもいた。それも村人たちの噂の種だった。

1 週間か 10 日だったか、母を迎えた少年は、深い安堵とともに、母を頼る一方ではなく、

距離を置いて 1 人の「女性」として見る目を育てていた、と後に気付かれるのである。母はもがいていたのだと。封建的な山村の寺で、村自体が貧しいのだから、経済的やりくりも大変なうえに、「住職の妻、大黒」は村人注視の的であった。山村で寺はほとんど唯一の「知識階級」である。何故か「大黒は出しゃばっている」というのが、村の通説になっていた。自我を育てることが許されぬとき、自我に目覚めた女は「魔女」である。自由になりたい！わたしらしく暮らしたい！と母は何度も心に叫んだであろう。母もいわば「時代の犠牲者」だったと、先生は長じて「自分の中の母」なる存在をそう位置付けられたのだった。

10 歳にして「僧侶」となられた先生の「苦難の道」は始まったばかりであった。その生涯を語るには、単行本 1 冊の枚数が必要だ。

私は 1960 年代の末から壽岳家に出入りしていた。章子先生が地域の母親運動や、平和運動、憲法を守る運動などに参加しておられたし、ご両親も挙げて応援してくださったからである。私も 2 人の子どもを育てながら、地域活動に参加していた。東京に美濃部革新都政が誕生したのが 1967 年であったから、その数年後のことである。何かの打ち合わせで章子先生をご自宅に訪ねた折、文章先生が茶の間から廊下を隔てた応接間に、柱や壁を伝って出てこられた。私がご挨拶するのを待って「東京では中野君（好夫、英文学者）や古在君（由重、哲学者。ともに同世代の知識人で先生と親しかった）らが民主都政のブレーンとして活躍しているのに、わたしは足が悪くてどこにも出かけられず、お役に立てなくて申し訳ありません」と言って、私に頭を下げられたのだ。私は驚き、恐縮した。先生は立派にそのお役を果たしておられたのだから。「民主府政を守る会」のメンバーであられたし、機関紙に推薦文などを載せておられる。何首かの短歌も詠まれて掲載されている。「先生がいらっしゃるだけで、みんなはとても励まされているのです！」と私は必死で繰り返していた。

早稲田で英文学専攻だった私の文学仲間M君は、会うたびに「壽岳先生は雲の上の人、英文学徒にとっては神さまだよ。神さまとフツーに喋ってるなんてー信じられないよ！」と、呆れたように頭を振ったものだ。「先生はお茶を売りに来る人にも、新聞紙を引き取ってゆく人にも、同じ人間として、丁寧な言葉を交わされるのです！」とその度に私は言ったものだ。

府立大学の壽岳（章子）研究室に、週 3 日出かけることになったのも、そんなご縁からだった。研究室には「婦人問題研究会」と、「桂苑会」（府立大学の前身、京都府立女子専門学校の同窓会、桂に校舎があった）の事務局が置かれていた。前者は先駆的なジェンダー視点から、テーマを決めて毎月勉強会を開き、前回までの数か月分の会の要旨を会報として、会員に郵送する。後者は幹事会が総会の前に開かれ、その年の総会をどうするかが検討される。そんな事務と章子先生の資料整理、（先生はあらゆることに興味を持たれていたので、新聞

や週刊誌の切り抜きはもとより、本の書き抜きなども、分類しておられた。（それらは次々と発表され、後に単行本になった）来客接待、学生の小論文を下読みすることも、両先生の本を編纂することもあった。

文章先生の「初恋の人」で、生涯を共に暮らし、二人の学者を育てた妻、しづさんは、本当に素敵な方だった。お若い時の写真は、女優さんでもこれだけの美人はいない、とため息が出る。可愛く、美しく更に気品があった。章子先生のエッセイに度々描かれている。女性の経済的、精神的自立の道を切り開いた方でもあった。ご自身家庭教師も、翻訳や、講演もされた。着物姿が凛として美しい、私も憧れ尊敬する方だった。

しづさんが亡くなられたのは 1981 年 6 月、長い闘病の後だった。「最後まで何かの役に立ちたい」とご夫妻の希望で、ご遺体は医学解剖され、病院の霊安室から焼き場に直行された。最後のお別れに「わたしも、やがてそちらへゆくからね」と文章先生は、溢れる涙を拭いもせずにおっしゃった。しづさんの小説『朝』や『歳月を美しく』、お二人で全国の紙漉き村を廻られた共著『紙漉村旅日記』などが、一度にどっと私に押し寄せてきた。

小柄な和服姿のしづさんが、大きなボストンバッグと傘を持ち、文章先生も重そうなボストンバッグに風呂敷包みを持って、川のほとりに佇んでおられる写真が 1 葉、春秋社版の『旅日記』にある。苦難も喜びも共にされたご夫妻だが、この詳細な日記を読めば、ご苦労の多さが身に染みる。

紙漉きはほとんど山村の仕事である。都会の子であったしづさんは、たどり着くまでがまず大変だったろう。途中で雨に降られた時もあり、泥にまみれてぬかるみを歩くこともあった。麓の宿では、酔客と隣り合わせで、眠れない夜もある。

しづさんの実家には馭者付きの馬車さえあった。ピカピカの黒い胴には「岩橋鉱業研究所」と金文字で書かれていたものだ。この「育ちの違い」が、文章先生にプロポーズをためらわせた。積極的なのはしづさんの方だったと聞き、また彼女の小説『朝』にも描かれている。章子先生は相変わらずお忙しい。時々私は研究室の帰りに河原町の寿司屋に寄り、海苔巻 1 本買って、家に届けるよう頼まれた。文章先生の夕食である。

しづさんの逝かれた年の秋、木枯らしも吹き始める頃、私が訪ねる家は暗く蹲っていた。先生は茶の間のガスストーブの前に、膝を投げた姿勢で銅像のようにただ、赤外線の赤い光の中におられた。そのお姿が私の胸を刺した。章子先生に、なるべく夜はご一緒にいられるようにしてくださいとお願いしたものだ。

章子先生が定年で大学をやめられてから、私は文章先生の話し相手兼、書庫整理係、耳も聞こえにくくなられた先生の朗読係として、お家に出かけることになった。

壽岳家に何年も通って驚いたことは、玄関も勝手口も鍵を閉めないことだった。夜遅くには施錠されるのだろうが、いつも「開かれていた」のだった。盆、暮れの贈り物が届く時期には、配送業者が勝手に玄関に置かれているハンコを押して、荷物を置いてゆく。それはこの家の人たちから、深く信じられていることを、彼らがよく知っていたからだろう。又この家がこの地域に住む方々に、佳き隣人として守られていたからでもあろう。

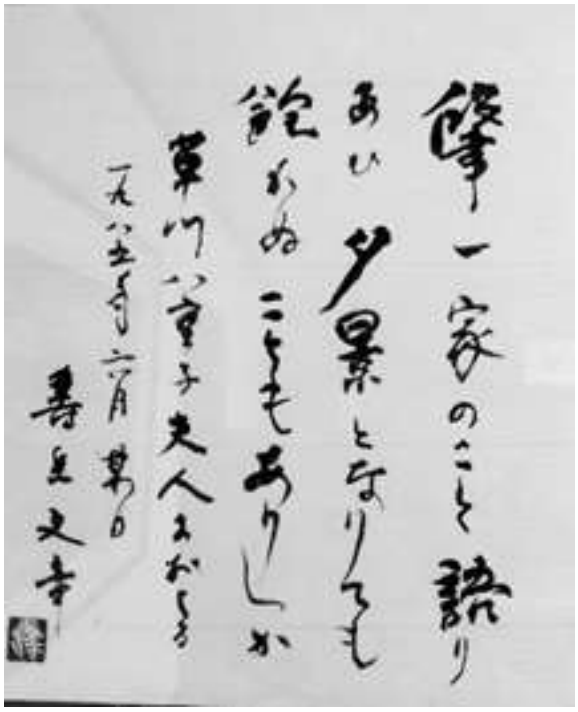
章子先生から河上肇生誕 100 年の催しのことを聞いたのは、1979 年、私はまだ府立大学

の研究室にいた時だった。私が出かけたのは、確か思文閣の展示会であったと思う。生誕100年は大規模で、講演会や論文集もいくつか発行されたと後で知った。河上ご一家の写真に私は衝撃を受けた。河上肇の『自叙伝』の印象だけで、私は彼を「悲劇的な求道の人」というイメージを造りあげていた。当然ながら、ご家族は一人ひとり個性があり、それぞれの衣装に身を包んで微笑んだり、生真面目にこちらを見つめていたりしている。まだお元気な頃の政男さんも写っている。娘の芳子さんもシズさんも「楚々とした」という形容詞をつけたくなる美人姉妹だ。今も生きておられる家族に出会った気がした。この家族とたくさん話がしたい、と私は突き上げるように思った。この家族を描いてみたいということである。

文章先生が、詩人としても才能豊かであった政男の話をしてくださった時、私はポロっとその野望を語ったのだった。その後先生は、河上家のことは特に力を入れて話してくださるようになった。

周知のように文章先生は先駆的な和紙研究家でもある。全国の紙漉き村を訪ねて、その特徴を調べられた。高松の宮家からその研究費の一部が出ていたと聞く。

「午前には宮家にご報告に上がり、午後には刑務所から釈放されたばかりの人を訪ねる。こんな経験をした人は日本中探しても、わたししかいないでしょうなぁー」愉快そうに話されたお声が、今も聞こえるようだ。治安維持法違反で 4 年半にわたる拘束から釈放された河上肇を、先生は、中野の借家にお見舞いに行かれたのだった。以降河上一家とは親密に過ごされ、河上が京都に戻ってからは、たびたび訪ねておられる。戦時中に書き進められていた河上の自叙伝や、漢詩研究（『陸放翁鑑賞』文章・吉川幸次郎の両先生で校正を担当され、河上の死後出版）などの原稿は壽岳家に託された。左京区より向日町の方が空襲の心配がないとの判断だが、壽岳先生一家に全幅の信頼を置かれてのことは言うまでもない。文章先生は、その最初の読者となることを許された。ちなみに章子先生は『陸放翁鑑賞』を京大院生時代に清書なさっている。写経をするような気持ちで書き写した、とエッセイに記しておられる。



岩波書店から『河上肇全集』出版の話が出た時から、文章先生は編纂委員会の顧問だった。全集 23 巻（晩年の日記）の解題も先生が担当されるので、1983 年初めからゲラだったのか、筑摩版だったのかを毎日読み返しておられた。先生と私の会話は、ほとんど河上一家のことになった。

岩波の担当者が来られた時、ちょうど私も先生の家にいた。寒い時期で、担当の方にも茶の間の炬燵が勧められた。

打ち合わせが済むと、先生は 1 枚の紙を

岩波の人に渡された。「この方が河上一家のことを描かれますので、ここに記した本は 2 冊送ってください」と言われたのだ。私は全く聞いていない話でびっくりした。全集なのにそんなことができるのかと疑問もわき、だが文章先生の頼みは断ることもできないだろうと、岩波の方が気の毒でもあった。9，22，23，28 の各巻と別巻を私は先生から頂いた。先生が解題を書かれた 23 巻の扉には 83 歳の先生の文字で、「これからのお仕事に最も関係の深いこの巻のはじめにわが名を記して草川八重子夫人へのはげましとする　1983 年 11 月下旬」と先生の署名があった。私の宝物である。

『奔馬 河上肇の妻』が週刊新聞の連載を経て、角川書店から出版された時（1996 年）、先生は既に旅立たれていた。写真の飾られた祭壇に本を供え、私は心から何度もお礼を言った。その 4 年前の 1992 年正月 5 日、先生から例年のように「お年玉」を頂いたのに。その 10 日余り後、私にとっても慈父の如き先生は、風に乗ったように素早く逝かれた。

編集後記

この欄において、ただいま向日市文化資料館で開催している「寿岳文章 人と仕事展」の報告をする場を与えていただきましたので、準備段階からの過程、展示内容や開催状況をお知らせします。

本展は、寿岳文章生誕 120 年にあたる 2020 年に愛知県豊田市で紙についての国際会議が開催されるのを機に、世界から日本へやってくる紙の研究者に、日本の手漉紙を世界へ発信した寿岳の居宅「向日庵」のある向日市へもお越しいただいて国際シンポジウムを開催し、その前後の期間に寿岳文章の業績を紹介する特別展を開催するために企画し、準備が始まりました。書物や紙など、ある分野に主題を絞った展示はすでにありますが、その生涯の仕事を回顧しようとするのは初めての試みです。

紙に関する収集・研究資料や関連する書物は、すでに寄贈された兵庫県多可町で和紙博物館「寿岳文庫」として展示・収蔵されています。2017 年には、多可町の追加調査を契機に、「向日庵」保管資料の一部を当館にお預かりしました。また今回の展示準備のため、所有者のご好意により「向日庵」内部の資料調査を 2019 年 11 月に行い、一部の資料を当館に移したことは、前号の編集後記で中島理事長が披露されています。

その後、シンポジウムと展示は向日市の文化振興事業となり、ＮＰＯ向日庵関係者や豊田市、多可町の担当者に集まっていただき実行委員会を組織し、令和 2 年の文化庁芸術文化創造拠点形成事業に採択されて、事業がスタートしました。しかし、同時期に拡大していった新型コロナウイルスの世界的感染により、豊田市での国際会議と本市での国際シンポは延期となり、展示のみ時期を遅らせて開催することになりました。

新たにお預かりした日記や書簡、蔵書原簿やスクラップなどの調査は、収納箱別の簡単なリストを作成後、6 月中旬から週一回のペースで 1 月初旬まで続きました。中島俊郎、井上琢智、長尾史子、長野裕子のＮＰＯ向日庵の各氏や、高木博志、福家崇祥、土田眞紀の近代史・工芸史研究者各氏による調査が、本展第Ⅰ部「寿岳文章の軌跡」に結びつき、英文学、書物、和紙の仕事と国際交流への貢献が展示・紹介されました。

多可町「寿岳文庫」からも多くの資料を出展いただきました。特に寿岳文庫で資料整理を進められた山仲進氏の準備により、第Ⅱ部「紙漉村旅日記の世界」として、寿岳夫妻が日本各地を行脚して集めた手漉紙が、80 年の時を経て初めて一堂に展示されることになりました。今回新たに職人技で造られた和紙展示額に収められ、調査時の撮影写真と位置図のパネルを添えて会場狭しと並びます。来館者が熱心にご覧になるようすは、80 年前の紙漉きと、現代の関係者の、時空をこえた手仕事が、人びとを惹きつけることの証明です。

展示は 2021 年 1 月 23 日から 3 月 14 日の会期でしたが、新型コロナ緊急事態宣言の影響により、同時開催の生誕 120 年記念「寿岳しづ展」（ＮＰＯ向日庵主催）とともに 3 月 21 日までの延期となりました。コロナを乗り越えて今後も活動にいそしみたく存じます。

玉城 玲子（向日市文化資料館長）